

80-42

金港堂書籍株式會社編輯所編

受驗
必携
日本歷史問答全

東京

金港堂書籍株式會社

緒言

一本編ハ小學科教員若シクハ尋常中學生徒以上ノ受験答案用ニ資スル目的ヲ以テ選次シタルモノナリ。

一試場ノ程問ニハ時限アリ、所謂巧遅ハ拙速ニ若カズト雖モ、亦能ク問題ノ要領ヲ得テ、切ニ其ノ肯綮ニ中ルニ非ザレバ、合格及第ノ榮ヲ享ケ難シ、本編ハ乃チ深ク此ノ點ニ留意シ、問題ト答案トヲシテ相關緊當セシメ、一句一語モ輒ク増減シ得ベカラザル迄ニ安排シタリ。

一事實ノ原委脈絡ハ元ト自ラ聯關スル所アリ、故ニ孤々睽立シテ記憶ニ存スベキニ非ズ、歴史科ニ於テハ殊ニ然リトス、本編ハ乃チ歴史ノ本體ニ據リテ順序ヲ立テ、上ハ上古ヨリ下ハ今代ニ至リ、上下二千五百有餘年間ノ史的現象ヲ網羅シ、脈絡條緒ヲシテ井然串通スル所アラシメ、以テ本邦史ノ全豹ヲ窺フニ足ラシメタリ、故ニ各般ノ問題ヲ除クトキハ恰モ是一部ノ國史タリ。

一事實ノ繁冗ニ涉レル者ハ、可成的之ヲ分割シテ其ノ局部ニ就キ、問題ヲ選ミ
 タレドモ、尙實際ニ方リ、一層細分セル課題ニ遭フコトアラバ、答案中ノ一
 部之ニ恰當セル者ヲ舉ゲ、臨機應答ヲナサンコトヲ要ス。
 一歷史上著名ノ人物ニ係ル事蹟ノ試問ハ、各時代別ニ條項ヲ設ケテ輯題シタリ、
 是近時往々用フル所ノ試法ニシテ、頗ル練習シ置クベキ必要アルヲ以テナリ。
 一事實ノ重要ナル者ニハ、都ベテ月日ヲ掲ゲ、又年代ヲ附註シタレバ、宜シク
 之ヲ記憶ニ存スベシ

明治三十一年三月

編者誌

目次

第一編	上古 <small>神代ヨリ蘇我氏ノ滅亡ニ至ル</small> (計四十六問及ビ答)	自三十二頁
第二編	大化革新ヨリ平氏滅亡ニ至ル(計六十問及ビ答)	自三十三頁
第三編	鎌倉時代 <small>幕府ノ創立ヨリ北條氏滅亡ニ至ル</small> (計十九問及ビ答)	自八十三頁
第四編	南北朝時代 <small>建武中興ヨリ南北合ニ至ル</small> (計十三問及ビ答)	自九十九頁
第五編	足利時代 <small>足利義滿ノ代ヨリ群雄割據ニ至ル</small> (計二十問及ビ答)	自百二十八頁
第六編	織豊時代 <small>織田氏ノ經略ヨリ關ヶ原ノ戰ニ至ル</small> (計十問及ビ答)	自百二十九頁
第七編	徳川時代 <small>徳川幕府ノ創立ヨリ大政奉還ニ至ル</small> (計六十八問及ビ答)	自百四十二頁
第八編	今 <small>王政復古ヨリ條約改正事件ニ至ル</small> (計三十三問及ビ答)	自百八十三頁
附錄	御歴代表	自一頁

必受 携驗 日本歷史問答

第一編 上古神代ヨリ蘇我氏滅亡ニ至ル

(一) 日本帝國ノ位置、地勢、氣候ノ概要ヲ問フ 日本帝國ハ本州、四國、九州、北海道及ビ臺灣ノ五大島ヨリ成リ、尙周邊ニ大小許多ノ屬島ヲ有シ、西北ハ亞細亞大陸ニ沿ヒ、東南ハ太平洋ニ臨メリ、地勢ハ西南ヨリ東北ニ向ヒテ狹長ク、一帶ノ山脈國ヲ縦斷スルヲ以テ、之ヨリ發スル諸川ハ流レ甚ダ短ク且急ニシテ、舟楫ノ便ニ乏シト雖モ、尙利根、木曾、信濃等ノ如キ長流アリテ運輸ノ利ヲ與フルコト少カラズ、又國ノ面積ニ比シテ海岸線ノ長キコト實ニ世界第一タリト地勢既ニ述長ナルヲ以テ、南端ハ熱帶圈ニ入り、北端ハ寒帶圈ニ迫リ、隨ツテ氣候種々ニシテ物産亦多種ナレドモ、概シテ氣候中和ヲ得テ寒熱甚シキニ至ラズ、地味亦膏沃ニシテ山野ニハ植物繁茂シ河海ニハ魚介多ク産セ

リ。

(二)神代ノ初メヲ問フ 天地ノ初メノ時ニ當リテ天御中主神、高御産靈神、カムミムスビノカミ神御産靈神ノ三神在シマシ、其ノ御血胤ニ伊邪奈岐神、伊邪奈美神ト申ス男女ノ二神アリ、始メテ大八洲國ヲ生成シ、三人ノ御子ヲ生ミ給フ、長ヲ大日靈尊ト申シ奉ル、是即チ天照大御神ナリ、次ヲ月夜見尊、其ノ次ヲ須佐男之尊ト申ス、天照大御神ニハ高天原ヲ、月夜見尊ニハ、夜見國ヲ、須佐之男尊ニハ海原ヲ治メサセ給フ。

(三)天照大御神ノ御明德及ビ御武装ヲ問フ 天照大御神ニハ靈德特ニ勝レサセ給ヒ、始メテ人ノ生ヲ保ツベキ穀物ヲ植ウルコトヲ教ヘ、又藪ヲ含ミテ絲ヲ取リ及ビ機織ル業ヲサヘ始メ給ヘリ、大御神、鞆ヲ纏キ、弓矢ヲ手挾ミ、脊ニ鞆ヲサヘ負ヒ給フトアレバ、時トシテハ雄々シキ御武装ニテ仇ヲ討チ給ヒシコトモアリシナルベシ。

(四)大八洲ノ國土及ビ其ノ他我が國古名ノ起源ヲ問フ。大八洲トハ現今ノ本州、四國、九州ト淡路、佐渡、對馬、壹岐、隱岐ノ島々トヲ稱スル名ナリ、其ノ他上古ニハ、我が國ニ千五百秋瑞穂國ノ稱アリ、是地味ノ膏腴ニシテ嘉穀ノ豐熟スルヲ表ス名ナリ、又細戈千足國ト云ヘル古名ハ、武器精練ニシテ充足スルノ義ヨリ出デタル名ナルベシ。

(五)神代ノ初メノ開化ノ度ヲ問フ 神代ノ初メヨリ火食スルノ法ヲ知り、又金屬ニテ作レル銚モ劍モアリシヲ以テ見レバ、冶金ノ術既ニ開ケ居リタルヲトスベク、殊ニ天照大御神ノ頃ニハ玉工、陶工ハ勿論、諸種ノ工藝モ開ケ、神祭ノ儀モ備ハリ、多クノ神々ヲ集メテ事ヲ議リ、罪アルモノニハ、祓トシテ多クノ贖物ヲ出サシメシ事モ見エ、又琴、笛等ノ樂器アリテ、歌舞ノ聲ニ合ハセタリトアレバ、音樂歌曲ノ如キモ、此ノ頃早ク己ニ開ケ居リタルヲ知ルベシ、又須佐之男尊ガ海外ニ往復シ給ヒシ由モ見ユレバ、大洋ヲ渡ルベキ船舶モ既ニ備ハリ居

リタルコト明カナリ。

(六)大國主命ノ經營ヲ問フ 是ヨリ先キ須佐之男尊、暴行ニヨリテ罪ヲ天照大御神ニ得、根國ニ逐ハレ給ヒシカバ、先ヅ出雲國ニ至リ、須賀(大原郡)ノ地ニ宮殿ヲ營ミ、奇稻田姫ヲ娶リテ住ミ給フ、尊ノ御子ニ大國主命アリ、産靈神ノ後胤ナル少彦名命トカチ協セテ草萊ヲ闢キ、沼澤ヲ干シ、以テ衣食スベキノ地トナシ給ヒ、且醫藥禁厭ノ法ヲサヘ教ヘ給ヒキ、サレバ其ノ德化ハ山陰道ニ遍カリシノミナラズ、越、信濃ハ更ナリ遙カニ遠キ邊マデニ及ビケリ。

(七)大國主命國土ヲ獻納セシ事實及ビ三種ノ神器ノ由來ヲ問フ 天照大御神、須佐之男尊ノ子、天忍穗耳尊ヲ養ヒテ子トナシ、之ニ大八洲國ヲ治メシメント欲シ給フ、乃チ先ヅ經津主、武甕槌ノ二神ヲ下シテ出雲國ニ至リ、旨ヲ大國主命ニ傳ヘシメ給フニ、大國主命畏ミテ命ヲ奉ジ、國土ヲ獻リシカバ、二神尙奧羽ノ邊マデ巡檢シ、還リテ大御神ニ復命セリ、大御神更ニ忍穗耳尊ノ奏請ヲ許シテ、

其ノ子瓊杵尊ヲ大八洲國ノ主トセントテ之ニ告ゲ給ハク、豐葦原瑞穗國ハ朕ガ子孫ノ君タルベキ地ナリ、汝往イテ之ヲ治メヨ、寶祚ノ隆ナランコト天壤ト共ニ窮リナカルベシト、因リテ八咫鏡、叢雲劍、八尺瓊勾玉ヲ授ケテ宣ハク、此ノ鏡ヲ視ルコト猶朕ヲ視ルガ如クセヨト、是ヨリ此ノ三器ヲ三種ノ神器ト稱シテ、皇位ノ御璽トナシ、歷世ノ天皇之ヲ授受シ給ヘリ。

(八)天孫降臨及ビ其ノ後ノ事蹟ヲ問フ 瓊杵尊、大御神ノ命ヲ畏ミ天兒屋根命、天太玉命等ヲ從ヘテ天降り給ヘルニ、國神、猿田彦命出デ迎ヘテ日向ノ高千穗峰ニ導キ奉リ、吾田笠狹崎ヲ相シテ大宮ヲ營ミ住マセ給フ、斯クテ後、瓊杵尊ハ彦火火出見尊ヲ生ミ、彦火火出見尊ハ鷓鴣草葺不合尊ヲ生ミ、相繼ギテ天位ニ登リ日向ノ大宮ニ御世ヲ知食シ給ヒキ。

(九)上古ノ時ノ居室、衣裝及ビ器具ノ概略ヲ問フ、住居ハ岩窟土窖ニ住ミシ者ト、木造ノ家屋ニ住ミシ者トアリタレドモ、其ノ制今日ノ如キモノニ非ズシテ、

柱ハ深ク地ニ埋メ、梁ハ藤葛ニテ結付ケ、屋根ハ一般ニ草葺ナリキ、又衣服ノ料ニハ絹ヲ初メ麻、楮等ノ織緯ニテ織レル布ヲ用ヒ、男女共ニ數多ノ玉ヲ緒ニ貫キタルモノヲ頸及ビ手足等ニ纏ヒ、且頭ニハ草木ノ枝葉ヲ挿シ、或ハ蔓ヲ戴キタリ、其ノ他日用ノ器具ニハ埴土ヲ以テ造リタル手挾、瓮ナド云フ土器アリ、又魚ヲ捕ルニ釣、築ナドヲ用ヒ、木ヲ伐ルニ斧ヲ用ヒ、田ヲ耕スニ鋤ノ類アリキ。

(一〇)天ツ神、國ツ神ノ別ヲ問フ。天ツ神トハ天照大御神ヲ初メ奉リ、瓊瓊杵尊ニ隨ヒテ天降りシ神々ニ至ルマデナ云ヒ、國ツ神トハ天孫降臨ノ前ヨリ此ノ國內ニ住ミシ神々ヲ云フ。

(一一)我が國上古ヨリノ君民ノ關係ヲ問フ。我等臣民ノ祖先ハ皆是天ツ神、國ツ神ノ支裔ニシテ、天ツ神モ國ツ神モ其ノ本源ヲ窮ムレバ、亦皆皇祖ヨリ分來シタルモノナレバ、皇室ハ、我が國民ノ宗家ニマシク、國民ハ即チ皇室ノ分派支裔ナリ、皇室ト臣民トハ公ニハ君民ノ關係ヲナスト雖モ、私ニハ本支ノ關係ア

ルヲ以テ、畏ケレドモ君民ト云ハンヨリ、父子ノ續キアリトヤ云フベカラン。

(一二)神武天皇東征ヨリ即位ニ至ルマデノ大要ヲ記セ。神武天皇ハ鷓鴣草葺不合尊ノ第四子ニマシク、天資英邁ニシテ國內ヲ統一セントノ御志アリ皇兄五瀬命ト相謀リテ東征ノ事ヲ決シ給ヒ、諸ノ族人ヲ率キテ日向宮ヲ發シ、豊國ノ宇佐ニ到リ、更ニ安藝ニ航シテ吉備ニ入り給ヒヌ、此ニ在マスコト三年バカリ、舟楫ヲ整ヘ、兵糧ヲ蓄ヘ、軍ヲ進メテ海路ヨリ難波ヲ經テ河内ノ白肩津ニ着キ、生駒山ヲ越エテ大和ニ入ラントシ給ヒシニ、大和國鳥見ノ酋長長髓彦ト云フ者、天神ノ裔ナル饒速日命ヲ奉ジテ主トナシ、皇軍ヲ孔舍衙坂ニ迎ヘテ拒ギ戰フ、時ニ皇軍利アラズシテ五瀬命流矢ニ中リ、終ニ薨ジ給ヒヌ、天皇乃チ軍ヲ回シテ紀ノ國ニ入り、沿道ノ諸賊ヲ平ゲテ更ニ熊野ノ嶮ヲ踰エ、吉野ヨリ進ミテ大和ニ入ラントシ給フ、道臣命、大久米命常ニ先鋒トナリ、行ク々々兄猾、八十梟帥、兄磯城等ノ諸賊ヲ誅シテ、更ニ背後ヨリ長髓彦ヲ攻メ給フ、時ニ金色ノ鴉飛ビ

來リテ御弓ノ弮ニ止マリシ瑞アリ、皇軍大イニ勢ヲ得テ遂ニ長髓彦ヲ滅シ、又兵
ヲ分チテ諸ノ土岫ヲ誅シ、盡ク大和ヲ定メ給ヒヌ、是ニ於テ都ヲ畝傍山ノ東南
橿原ノ地ニ奠メテ即位ノ式ヲ行ヒ給ヒ、我が帝室ノ鴻基茲ニ定マリヌ、此ノ年
ヲ紀元元年トシ、天皇ヲ人皇第一代ト算ヘ奉ル。

(一三)神武天皇建國ノ制度ヲ問フ 神武天皇既ニ御位ニ即キ給ヒテ後、靈時
ヲ鳥見山ニ造リテ皇祖天神ヲ祭り、三種ノ神器ヲ正殿ニ安置シ、天種子命中臣天
富命齋部ヲシテ祭祀ヲ司リテ朝政ヲ輔ケシメ、道臣命、大久米命久米氏ヲシテ
大伴、久米ノ二部ヲ率キテ宮門ヲ護衛セシメ、饒速日命ノ子可美真手命ヲシテ
内物部ヲ率キテ殿内ニ宿衛セシメ給ヒ、又國縣ニハ國造クニノミヤツコ、縣主アガタマシヲ置キテ地方
ノ政ヲ行ハシメ給ヘリ。

(一四)崇神天皇敬神ノ事蹟ヲ問フ 天皇即位ノ初メ、疾疫流行シテ民死スル
者多カリシカバ、天皇深ク之ヲ憂ヒ、先ヅ敬神ノ典ヲ舉ゲサセ給フ、此ヨリ先

キ、天授ノ神器ハ皆殿内ニ奉安シテ皇宮ト神宮トノ別ナカリシガ、天皇其ノ神
威ヲ瀆サンコトヲ恐レ、紀元五百六十九年、別ニ鏡劔ヲ模造セシメテ之ヲ殿内
ニ置キ、神授ノ鏡劔ヲバ、大和ノ笠縫邑ニ移シ祀リ、皇女ヲシテ奉侍セシメ給
ヒキ、其ノ他天神地祇ノ社ヲ定メ、神地神戶ヲ進ラセテ其ノ祭祀ヲ厚クシ給ヘ
リ。

(一五)四道將軍ノ起元ヲ問フ 當時僻遠ノ地尙皇威ニ服セザルモノアリシカ
バ、乃チ大彥命ヲ北陸ニ、武渟川別カハワケヲ東海ニ、吉備津彥ヲ西海ニ、丹波道主ヲ
丹波ニ遣ハシテ、人民ヲ綏撫シ、尙順ハザル者ヲ討タシメ給フ、世ニ之ヲ四道
將軍ト稱ス。

(一六)崇神天皇ノ朝ノ税法及ビ水利ヲ問フ 四道將軍巡按ノ後ハ、皇化普ク
四方ニ及ビシカバ、是ニ於テ人口ヲ校ベ、男ニハ弓弭ニハツノ調女ニハ手末タナスエノ調ヲ課
シ給ヘリ、是紀元五百七十五年ノ事ニ係ル、天皇又多クノ池溝ヲ掘ラシメテ灌

漚ニ便ニシ、又多ク船舶ヲ造ラシメテ航海ノ業ヲ獎勵シ給ヘリ。

(一七) 韓國トノ交通ヲ問フ 此ノ御代ノ末ニ大加羅國オホカラノ南部今ノ大韓ノ王子蘇那葛スナカ

叱智來朝シケルガ、歸ルニ臨ミ、其ノ請ヲ許シテ鹽乘津彦シホノリツヒコヲ遣ハシ、其ノ國ヲ

鎮撫セシメ給フ、垂仁帝ノ朝ニ至リ、先帝ノ御諱ミマエノイリヒコニ因ミテ其ノ國名ヲ

任那ト名ケ給ヘリ。

(一八) 伊勢内宮外宮ノ起元ヲ問フ 第十一代垂仁天皇ノ朝紀元六前代大和ニ

奉祀セル神授ノ鏡劍ヲバ、更ニ伊勢ノ宇治ニ遷シ祀ラシメ給フ、是即チ今ノ内

宮ナリ、後、雄略天皇ノ朝、豐受大神ヲ丹波ヨリ伊勢ノ山田ニ遷シ祀レリ、是

即チ今ノ外宮ナリ。

(一九) 垂仁天皇ノ農政ニ意ヲ留メ給ヒシ事實ヲ問フ 垂仁天皇ハ先帝ノ遺志

ヲ紹ギ、深ク御心ヲ民事ニ留メ給ヒ、諸國ニ命ジテ池溝ヲ穿テ通ゼシメ、畿内

近國ハ勿論、西ハ筑紫ヨリ東北ハ越コシ、信濃及ビ奥ノ地方ニ及ボシ、池ノ數八百

ニ至レリト云フ。

(二〇) 殉死禁制及ビ相撲ノ起元ヲ問フ 古代ヨリ殉死トテ貴人死スルトキ

ハ、其ノ近臣ヲ併セ埋ムルノ制アリ、垂仁天皇ノ皇后日葉酢媛崩御ノ際ニモ亦此

ノ制ヲ用ヒントセシニ、天皇深ク之ヲ憐ミ給ヒ、野見宿禰ガ埴輪埴土ヲ以テ人

馬ノ形ヲ造リタル者ハニシヲ以テ殉死ニ代ヘントノ建議ヲ納レ、爾後永ク殉死ヲ禁

ズルノ制ヲ定メ給ヘリ、乃チ野見宿禰ノ功ヲ賞シテ土師ノ姓ヲ賜ヒ、其ノ子孫

ヲシテ代々造埴ノ事ヲ掌ラシメ給フ。宿禰曾テ無双ノ力士タケモノノクセハヤ當麻蹶速トカチ角ベ

テ之ヲ蹶殺シタリキ、朝廷ニテ相撲ノ式ヲ行ハセラル、コト此ニ肇マル。

(二一) 車塚ノ構造ヲ問フ 第八代孝元天皇ノ御代マデハ、皆天然ノ丘陵ニ因

リテ山陵トナシ、其ノ巔或ハ尾上ニ、石棺ヲ以テ御遺骸ヲ納メ奉リシガ、其ヨリ

後ハ工事大イニ進ミ、人工ノ山ヲ築キテ其ノ巔ニ葬リ奉リ、山ノ周圍ヲ池ニシ

テ、繞ラスニ堤ヲ以テセリ、而シテ其ノ山ノ形、上ヨリ瞰ヘバ瓢ノ如ク前後兩

丘ヲ成シ、横ヨリ視レバ後丘ハ圓クシテ高ク、前丘ハ平ニシテ低シ、後丘ハ車ノ室ノ如ク前丘ハ車ノ轅ニ似タリ、故ニ之ヲ車塚ト云ヒキ。

(二二)倭ヤマト建命タケノミコトノ武功ヲ問フ。第十二代景行天皇ノ朝、紀元七百五十七年ニ熊襲今ノ日向、大隅、薩摩再ビ叛キテ勢益々猖獗ナリ、天皇、皇子小碓命オウスキミコトヲシテ之ヲ討タシメ給フ、皇子時二年十六、身體魁梧勇武絶倫ニアラセラレ、單身筑紫ニ赴キ、女装シテ賊巢ニ入り、賊魁川上梟帥ヲ刺シ給ヒシニ、梟帥其ノ勇武ニ感シ、吾未ダ皇子ノ如ク強勇ニマシマス者ヲ見ザリキ、今ヨリ後ハ御名ヲ倭建命ト申シ給ヘト云ヒテ息絶エヌ、皇子尙餘賊ヲ討チ平ゲテ倭國ヘ還リ給ヒケルガ、後幾程モナク東夷復叛キテ征討ノ命ヲ受ケ給ヘリ、皇子乃チ吉備武彦、大伴武日等ト共ニ都ヲ出デ、先ヅ伊勢ニ赴キテ神宮ヲ拜シ、叢雲劍ト燧袋トヲ得テ尾張ヲ經、駿河ニ到リ給ヒシニ、土賊伴リ降りテ皇子ニ遊獵ヲ勸メ、火ヲ原野ニ縱チテ皇子ヲ燒キ殺サントス、皇子乃チ劍ヲ挺キテ草ヲ薙ギ、燧ヲ鑽ツテ向ヒ

火ヲ附ケ給ヒシカバ、賊徒却テ燒キ殺サレタリ、是ヨリ叢雲劍ヲ草薙劍ト改稱ス、皇子更ニ進ミテ相摸ヨリ上總ニ航シ、轉ジテ海路ヨリ蝦夷ノ地ニ赴キ給ヒシニ、賊酋迎ヘ降りテ蝦夷地悉ク定リヌ、是ニ於テ陸路ヨリ常陸ニ出デ、武藏、上野ヲ經テ信濃ニ入り、吉備武彦ヲ越國コシノクニニ遣ハシテ巡察セシメ、御自身ハ美濃ヲ經テ尾張ニ入り、近江ノ膽吹山ノ賊ヲ勦サントテ之ニ赴キシニ、疾ヲ得テ旋リ、遂ニ伊勢ノ能褒野ニテ薨ジ給フ、時ニ御年二十ナリキ。

(二三)成務天皇ノ朝ノ行政區畫及ビ地方官制ヲ問フ。天皇ノ御代ニ至リテハ皇化ノ及ブ所大イニ廣マリタルヲ以テ、紀元七百九十五年、詔シテ山河ノ形勢ニ依リテ國縣ヲ分チ、阡陌ニ從ヒテ邑里ヲ定メ、以テ行政ノ便ヲ計リ給ヘリ、而シテ地方官ニハ國造クニノミヤツコ、縣主イナキ、稻置等アリ、國造ハ國ノ長官、縣主ハ稍狹キ地方ノ長官、稻置ハ村邑ノ長ニシテ、孰レモ其ノ職ヲ世襲シ、恰モ後世ノ大名庄屋ノ如クナリキ。

(二四)三韓ノ位置及ビ當時我が國トノ交通ヲ問フ 當時朝鮮半島ノ北部ハ支那ノ領有ニ係リ、南部ハ一般ニ韓ト稱シテ其ノ中ニ高麗、百濟、新羅、任那等アリキ、高麗ハ其ノ北方ヲ占メ、新羅ハ東南部ノ海岸ニ沿ヒテ國ヲ立テ、百濟ハ西岸一帯ノ地ニ國シ、而シテ任那ハ新、百兩國ノ間ニ介マレル小國ナリキ、又我が國ト韓國トノ往來ハ紀元前早ク既ニ開ケシモノナルベク、殊ニ九州ノ地ハ壹岐對馬ノ二島、韓國ニ接近セルヲ以テ相互ノ交通最モ便ナリシナラン。

(二五)三韓征討ノ顛末ヲ問フ 第十四代仲哀天皇ノ朝ニ、熊襲マダ叛キケレバ、天皇皇后息長足媛ト共ニ筑紫ニ行幸シテ之ヲ討シ給ヒシニ、軍半ニシテ天皇崩ジ給ヒヌ、皇后御氣性雄々シク、初メヨリ熊襲ノ屢、叛クハ新羅ノ應援ニ出ツルナルベシ、故ニ先ヅ新羅ヲ征服セバ熊襲自ラ平ガント思惟シ給ヒ、乃チ大臣武内宿禰ト謀リテ大喪ヲ秘シ、先ヅ吉備鴨別ヲシテ熊襲勦平ノ任ニ當ラシメ、御自ラハ懷妊ノ身ヲモ顧ミズ、男装シテ舟師ヲ率キ、遂ニ新羅ニ到リテ第一ニ

新羅王、次ニ高麗、百濟ノ二王ヲ降服セシメ、各々永ク西蕃ト稱シテ年々定額ノ朝貢ヲ欠クマジキ旨ヲ誓ハシメ、任那ニハ内宮家ヲ置キ而シテ筑紫ニ凱旋シ給ヘリ、是ヨリ韓國我ニ服屬シテ朝貢ヲ怠ラザリシノミナラズ、熊襲モ亦全ク事ナキニ至リヌ。

(二六)韓國征服ノ後、我が國文學技術等ノ發達セル由來ヲ問フ 韓國ニハ夙ニ支那ノ文藝流布セシガ、其ノ我が屬國トナリシヨリ更ニ之ヲ我が國ニ傳ヘテ文化ノ發達ヲ助ケシコト頗ル大ナリ、第十五代應神天皇ノ朝、紀元九百四十四年ニ、百濟ヨリ阿直岐アチキ來朝シケルガ、此ノ者經典ニ精通セルヲ以テ、皇子稚郎子ワキイラツコ就キテ學ヲ受ケタリ、然ルニ阿直岐ノ推薦ニ由リ、更ニ韓國ノ碩學王仁來朝シテ論語十卷及ビ千字文一卷ヲ獻ジキ、稚郎子王仁ヲ師トシテ深ク經義ヲ究メラル、是實ニ我が國文教ノ淵源ナリトス、是ヨリ以前ニハ一般ニ文字ヲ用ヒ或ハ書ヲ讀ム等ノ事ナカリシガ如シ、此ノ後更ニ百十八年ヲ經テ履中天皇ノ朝ニ至

リ、漸ク諸國ニ史官ヲ置キテ記録ノ事ヲ掌ラシメラル、更ニ下リテ繼體天皇ノ朝ニ至リ、百濟ヨリ五經博士段楊爾來朝シテ益々文學ノ發達ヲ促シタリ、其ノ他應神天皇ノ御代ノ頃ヨリ織縫、鍛冶、釀酒ノ職工等モ來朝シテ大イニ我が工藝技術等ノ進歩ヲ促シヌ。

(二七)皇子稚郎子ガ遜讓ノ次第ヲ問フ 初メ應神天皇、少子稚郎子ワキイラツコノ才學アルヲ愛シ、稚郎子ノ御兄ナル大鷦鷯命ト議シテ皇太子ニ定メ給ヘリ、然ルニ父帝崩ズルニ及ビ、稚郎子ハ位ヲ兄ニ讓リテ曰ク、阿兄ハ齒德共ニ勝レ給ヘリ、宜シク吾ニ代リテ天下ヲ知ロシメスベシト、大鷦鷯命答ヘテ曰ク、吾ハ兄ナリト雖モ、イカデ先帝ノ意ニ背カンヤトテ、兄弟互ニ位ヲ讓リ給フコト三年、人民甚ダ嚮ウ所ニ困シミキ、稚郎子、兄ノ志ノ奪フベカラザルヲ見テ遂ニ自殺シ給ヘリ、大鷦鷯悲悼シテ尙位ニ即キ給ハザリシガ、群臣勸メテ位ニ即カシメ奉リヌ、是ヲ仁德天皇トス。

(二八)應神、仁德ノ二朝心ヲ民政ニ盡クシ給ヒシ事實ヲ問フ 應神ノ朝ニハ歸化ノ韓人ヲ使役シテ多ク水利ヲ開キ給ヒ、仁德之ニ嗣ギテ又處々ニ溝ヲ掘リ堤ヲ築カシメ給フ、又弓月君ユツキキミ (秦ノ始皇帝ノ裔ニシテ我が國ニ歸化セル者)ノ族人ガ絹ヲ織ルニ巧ナルヲ嘉ミシ、之ニ秦アキノ姓ヲ賜ヒ、諸國ニ遣ハシテ韓風ノ蠶業ヲ教ヘシメラル、殊ニ天皇ノ御仁德ノ著シキモノヲ記サンニ、一日、天皇高臺ニ上リテ炊煙ノ稀少ナルヲ眺ミ、百姓ノ窮乏ヲ察シ、三年ノ間調役ヲ免ジ痛ク節儉ヲ行ヒ給ヒ、斯クテ後再ビ高臺ニ上リ、炊煙ノ盛ニ起ルヲ見テ大イニ喜ビ朕既ニ富メリト宣ヒ、尙三年ノ課役ヲ免シ給ヒシカバ、百姓益々殷富ニ赴ケリ、此ヨリ先キ民屢々宮殿ヲ修理センコトヲ請ヒシカド、民力ヲ疲ラサンコトヲ思ヒテ之ヲ許サズ、此ニ至リ始メテ其ノ請ヲ許シ給ヒシカバ、庶民子ノ如クニ來リテ忽チ其ノ工事ヲ竣ヘタリキトゾ。

(二九)姓氏釐正ノ事實及ビ姓、氏ノ區別ヲ問フ 上古ニハ未ダ官位ノ制ナク、

ナ憂へ、使ヲ諸國ニ遣ハシテ遍ク皇胤ヲ索メ給ヒヌ、此ノ時播磨ノ國司來目部クメベ小楯チダテ、ソノ國ニ履仲天皇ノ皇孫億計、弘計ノ二王市邊押磐皇子ノ遺子子ノ遺子伏匿シ給ヘルヲ知リテ、其ノ由ヲ奏セシカバ、天皇大イニ喜ビ、二王ヲ迎ヘシメ、億計王ヲ立テ、皇太子トス、然ルニ天皇崩ズルニ及ビ、二王互ニ相讓リテ位ニ即キ給ハズ、因ツテ其ノ姨飯豐青皇女假リニ政ヲ攝シ給ヒシガ、幾程モナクシテ薨ズ、弘計王遂ニ位ニ即キ給ヒ是ヲ顯宗天皇ト申ス、天皇崩御ノ後、億計王繼ギ給フ是ヲ仁賢天皇トス。

(三四)大臣大連爭權ノ濫觴ヲ問フ 萬機ノ政漸ク繁ク、大臣大連ノ權勢次第ニ熾ナルニ從ヒ、弊害爰ニ生ゼリ、初メ武内宿禰景行ノ朝ヨリ五代ノ間大臣ノ職ニ在リ忠貞類ヒナカリシモ、其ノ曾孫平群眞鳥大臣タルニ及ビ、漸ク皇室ヲ侮ルノ勢ヲ生ジケレバ、武烈天皇、大連大伴金村ニ命ジテ之ヲ誅戮セシメ給ヒキ、斯ク大臣大連鈐制シテ勢ヲ分ツノ利ハ、轉ジテ勢力競爭妬忌排擠ノ弊ヲ醸シ、

遂ニ將來ニ於ケル大臣大連軋轢ノ源ヲ啓キタリ。

(三五)佛法傳來及ビ流布ニ至リシ顛末ヲ問フ 第二十六代繼體天皇ノ朝、支那南梁ノ人司馬達等初メテ我が國ニ佛法ヲ傳ヘシガ、更ニ之ヲ信ズル者ナクシテ流布ニ至ラザリキ、然ルニ第二十九代欽明天皇ノ朝、紀元一千二百十二年ニ百濟王、釋迦佛ノ像及ビ經論ヲ獻ジテ盛ニ其ノ功德ヲ頌述セリ、天皇乃チ群臣ヲ召シテ之ヲ禮スルノ可否ヲ詢リ給ヒシニ、大臣蘇我稻目ハ、西方ノ諸國皆既ニ之ヲ禮ス、我が國豈ニ獨リ之ヲ禮セザランヤト奏シ、大連物部尾輿、中臣鎌子ハ、本邦古ヨリ天神地祇ノ在ルアリ、今ニ及ンデ、蕃神ヲ祀ラバ恐クハ神祇ノ譴怒ヲ招カント奏シテ、稻目ノ議ヲ駁シタリ、天皇乃チ佛像ヲ稻目ニ賜ヒテ試ニ禮拜セシメ給フ、稻目大イニ悦ビ己ガ向原ウケハラノ家ニ安置シテ向原寺ト稱ス、是本邦寺院ノ嚆矢ニシテ實ニ我が國人佛ヲ信ズルノ初メトス、後幾モナクシテ疾疫大イニ行ハレシカバ、尾輿、鎌子ノ二人ハ、是全ク蕃神ヲ禮スルノ致ス所ナリ、

姓氏ヲ以テ其ノ用ヲナシ、ガ、韓國トノ交通頻繁ナルニ從ヒ、人民漸ク質朴ノ風ヲ失ヒテ姓氏ヲ詐冒スル者少カラズ、是ニ於テ第十九代允恭天皇ノ朝、諸ノ氏人ヲ集メ、探湯クガダケセシメテ其ノ眞偽ヲ正シ給ヘリ、探湯トハ熱湯ヲ探ラシメ、手ノ爛ル、ト否ラザルトニ據リテ眞偽曲直ヲ質スノ法ニシテ即チ當時ノ審判法ナリ、元來姓ハ即チ爵ニシテ家ノ尊卑ヲ表シ、氏ハ其ノ世襲ノ職ヨリ出デタルモノ多クシテ、族類ヲ區別スルノ稱ナリ、例ヘバ物部、連、齋部、首、土師、臣ト云ヘバ、物部、齋部、土師ハ氏ニシテ連、首、臣ハ姓ナルガ如シ。

(三〇)氏族三別ノ制ヲ問フ 上古ニハ神別、皇別、蕃別トテ氏族ヲ三段ニ區別セリ、即チ神別トハ神代諸神ノ裔ヲ云ヒ、皇別トハ神武天皇以來列朝諸帝ノ皇族ヲ云ヒ、蕃別トハ外國ヨリ歸化セシ人ノ子孫ヲ云フ。

(三一)皇室ト族長、族人及ビ其ノ配下人民トノ關係ヲ問フ 臣、連、首等ノ姓ヲ賜ハリタル者ハ即チ族長ニシテ、各、其ノ下ニ屬スル族類アリ、而シテ族類ノ

外ニ又一族ニ屬シタル土地人民アリキ、故ニ族人ハ族長ニ統ベラレテ世々祖先傳來ノ業務ニ從事シ、族長ハ族人ヲ率ヒテ皇室ニ仕ヘ奉リ、而シテ配下ノ人民ハ各氏族ニ管セラレテ物ヲ致シ其ノ供用ニ充テタリ。

(三二)雄略天皇ノ朝ノ著シキ事蹟ヲ問フ 此ノ天皇ノ朝ニ最モ著シキ事實ハ、國政漸ク繁劇ニ至レルヲ以テ平群眞鳥(武内宿禰ノ孫)ヲ大臣トシ、大伴室屋(大伴武)ヲ大連トシテ共ニ朝政ヲ輔佐セシメ給ヒ即チ大臣大連並立ノ起元ヲ開キ給ヒシ事ヲ首メトシ、服制ノ大改革ヲ行ハントテ諸國ニ令シ、桑ヲ植エシメ、皇妃ニ勅シテ躬ヲ蠶ヲ養ハシメ、又使ヲ吳國(南北朝ノ晉ヲ云フ)ニ遣ハシ漢織、吳織、衣縫等ノ女工ヲ徵シ給ヒシ事、此ノ御代ニ又百濟ヨリ陶部、鞍部、畫部、錦部、木工等徵ニ應ジテ來朝シ、其ノ結果トシテ工藝ノ進歩著シク、殊ニ樓閣等ノ建築ノ起リシ事等トス。

(三三)億計オゲチ弘計チゲニ皇子遞立ノ事蹟ヲ問フ 第二十二代清寧天皇ハ皇嗣マシサヌ

ヲ憂へ、使ヲ諸國ニ遣ハシテ遍ク皇胤ヲ索メ給ヒヌ、此ノ時播磨ノ國司來目部クメベ小楯チダテ、ソノ國ニ履仲天皇ノ皇孫億計、弘計ノ二王(市邊押磐皇子ノ皇子)伏匿シ給ヘルヲ知リテ、其ノ由ヲ奏セシカバ、天皇大イニ喜ビ、二王ヲ迎ヘシメ、億計王ヲ立テ、皇太子トス、然ルニ天皇崩ズルニ及ビ、二王互ニ相讓リテ位ニ即キ給ハズ、因ツテ其ノ姨飯豐青皇女假リニ政ヲ攝シ給ヒシガ、幾程モナクシテ薨ズ、弘計王逐ニ位ニ即キ給ヒ是ヲ顯宗天皇ト申ス、天皇崩御ノ後、億計王繼ギ給フ是ヲ仁賢天皇トス。

(三四)大臣大連爭權ノ濫觴ヲ問フ 萬機ノ政漸ク繁ク、大臣大連ノ權勢次第ニ熾ナルニ從ヒ、弊害爰ニ生ゼリ、初メ武内宿禰景行ノ朝ヨリ五代ノ間大臣ノ職ニ在リ忠貞類ヒナカリシモ、其ノ曾孫平群眞鳥大臣タルニ及ビ、漸ク皇室ヲ侮ルノ勢ヲ生ジケレバ、武烈天皇、大連大伴金村ニ命ジテ之ヲ誅戮セシメ給ヒキ、斯ク大臣大連鈐制シテ勢ヲ分ツノ利ハ、轉ジテ勢力競爭妬忌排擠ノ弊ヲ醸シ、

遂ニ將來ニ於ケル大臣大連軋轢ノ源ヲ啓キタリ。

(三五)佛法傳來及ビ流布ニ至リシ顛末ヲ問フ 第二十六代繼體天皇ノ朝、支那南梁ノ人司馬達等初メテ我が國ニ佛法ヲ傳ヘシガ、更ニ之ヲ信ズル者ナクシテ流布ニ至ラザリキ、然ルニ第二十九代欽明天皇ノ朝、紀元一千二百十二年ニ百濟王、釋迦佛ノ像及ビ經論ヲ獻シテ盛ニ其ノ功德ヲ頌述セリ、天皇乃チ群臣ヲ召シテ之ヲ禮スルノ可否ヲ詢リ給ヒシニ、大臣蘇我稻目ハ、西方ノ諸國皆既ニ之ヲ禮ス、我が國豈ニ獨リ之ヲ禮セザランヤト奏シ、大連物部ノ尾輿、中臣鎌子ハ、本邦古ヨリ天神地祇ノ在ルアリ、今ニ及ンデ、蕃神ヲ祀ラバ恐クハ神祇ノ譴怒ヲ招カント奏シテ、稻目ノ議ヲ駁シタリ、天皇乃チ佛像ヲ稻目ニ賜ヒテ試ニ禮拜セシメ給フ、稻目大イニ悦ビ己ガ向原カクハラノ家ニ安置シテ向原寺ト稱ス、是本邦寺院ノ嚆矢ニシテ實ニ我が國人佛ヲ信ズルノ初メトス、後幾モナクシテ疾疫大イニ行ハレシカバ、尾輿、鎌子ノ二人ハ、是全ク蕃神ヲ禮スルノ致ス所ナリ、

請フ速ニ佛ヲ廢セント奏シケレバ、天皇之ヲ允シ、向原寺ヲ燒キ、佛像ヲ難波ノ堀江ニ投ゼシム、サレド稻目ハ依然佛ヲ信奉シ、私ニ韓土ヨリ佛像經論ヲ獻ゼシメタリ、斯クテ第三十代敏達天皇ノ朝ニ至リ、新羅亦佛像ヲ獻ゼシガ、時ニ稻目ハ既ニ死シテ其ノ子馬子、愈佛ヲ信ジ、佛殿ヲ造リ僧尼ヲ招ジナドシケルニ、疾疫再ビ流行セリ、此ノ時尾輿ノ子大連守屋、鎌子ノ子勝臣、又奏請シテ寺塔ヲ燒キ佛像ヲ棄テ僧尼ヲ逐ヒシガ、守屋疫疾ニ罹リ、天皇モ亦之ヲ患ヘ給ヒケレバ、時人ハ是佛ノ崇ナラントテ更ニ佛ヲ信ズルノ念ヲ萌セリ、加之馬子ハ其ノ病ノタメ奏請シテ己レ獨リ佛ヲ信ズルノ允許ヲ得ケルガ、是ヨリ佛法次第ニ盛ナルニ至リヌ。

(三六)當時ニ於ケル韓國ノ形勢ヲ略述セヨ 韓國ハ一般ニ微弱ニシテ人情猜疑ノ念深ク、我が國ヨリ軍ヲ出セバ忽チニ服シ、軍ヲ旋セバ其ノ遼遠ヲ恃ミ我ニ對シテ亡狀ヲ加フルコト多カリキ、此ノ頃ヨリ新羅ト高麗トハ漸ク強大ニ赴

キ、三韓互ニ仇視スルコト甚シカリシガ、百濟最モ微弱ニシテ毎ニ鄰國ニ苦シメラレヌ、加之、雄略天皇ノ朝ニハ吉備、田狹、仁賢天皇ノ朝ニハ紀、大磐等、任那ノ日本府ニ在リテ叛キ、繼體天皇ノ朝ニハ、新羅ノ國人等、大伴金村ガ處分ヲ怨ミ、筑紫ノ國造磐井ト謀ヲ通ジテ我ニ叛キ、磐井ハ程ナク誅ニ伏セシガ韓國トノ怨隙ハ益々甚シカリキ、欽明天皇ノ朝ニ至リテハ、新羅ノ國人百濟ヲ侵シテ其ノ國王ヲ殺シ、遂ニ任那ヲ侵奪シテ我が官府ヲ壞チ、任那遂ニ滅ス、時ニ紀元一千二百二十二年ナリ。

當時我が國ヨリハ、紀ノ男麻呂、河邊瓊岳ヲ遣ハシテ新羅ヲ征セシメラレシモ軍利アラズシテ止ミヌ。

(三七)物部氏滅亡ノ顛末ヲ問フ 繼體天皇ノ頃ヨリ大連家ノ一ナル大伴氏專ラ外政ノ任ニ當リシヲ以テ、朝廷ノ政權全ク物部、蘇我ノ二氏ニ歸シ、敏達天皇崩御ニ當リ、物部守屋ハ穴穗部ノ皇子ヲ立テントシタルニ、蘇我馬子ハ己ガ妹ノ

所生ナル大兄皇子ヲ立テ奉レリ是ヲ用明天皇トス、即位ノ後幾モナク病ニ罹リ給ヘルトキ、厩戸皇子(敏達天皇ノ太子)晝夜傍ニ在リテ佛ヲ祈リ、天皇モ亦佛ヲ拜セントシ給ヒシニ、守屋、勝海ノ二人ハ固ク諫メテ之ヲ止メ奉リヌ、然ルニ馬子ハ僧ヲ率キテ宮中ニ入り、厩戸皇子ト謀リ、先ヅ人ヲ遣ハシテ勝海ヲ殺サシメ、尋イデ炊屋姫皇后(敏達天皇ノ皇后)ノ詔ナリト矯リ、軍ヲ遣リテ穴穗部皇子ヲ弑シ、更ニ厩戸皇子ト共ニ守屋ヲ攻殺シ、其ノ田宅奴婢ヲサヘ奪ヒヌ、是ニ於テ物部氏ノ本宗ハ滅亡シテ大連ノ官オノツカラ廢絶セリ。

(三八)蘇我馬子が悖逆ノ事實ヲ問フ 用明天皇崩ジテ、馬子、崇峻天皇ヲ擁立シ 功ヲ特ミテ擅横ナリシカバ、天皇堪フルコト能ハズ、遂ニ馬子ヲ除カントシ給フ、馬子大イニ懼レアツマノアヤノアタヒコ東漢直駒ヲ教唆シテ天皇ヲ弑シ奉ラシメキ、是悖逆ノ極メテ甚シキモノニシテ、天人共ニ容レザル所ノ大罪ナリ。

(三九)當時々大臣等馬子ノ逆罪ヲ正サヤリシ理由ヲ問フ 佛敎ハ專ラ三世因

果ノ理ヲ説クヲ以テ主トシタレバ、智者ハ其ノ經典ニ心醉シ、愚者ハ其ノ莊嚴ニ目ヲ眩マシ、痛ク人心ニ變化ヲ與ヘシモノナルベシ、サレバニヤ馬子ガ弑逆ノ大罪ヲ犯スニ際シ、臣、連ヲ初メ諸ノ族長等徒ニ傍觀シテ之ヲ匡ス者アルナク、賢明ノ聞エ高キ厩戸皇子スラ天皇ノ弑逆ニ遇ヒ給ヒシハ是前世ノ果報ナルベシトテ、馬子ノ罪惡ヲ黙過サレタリ、淺マシト云フモ疎カナル事ニコソ。

(四〇)冠位制定及ビ憲法ノ起元ヲ問フ 第三十三代推古天皇ノ朝、紀元千二百六十三年ニ始メテ大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智十二階ノ冠位ヲ制定シ、並ニ當色ノ繩ヲ以テ冠ヲ縫ヒ、其ノ頂ヲバ撮グリテ袋ノ如クシ、之ヲ臣連以下諸ノ族長ニ賜ヒテ貴賤ヲ叙デ給フ、但シ元旦ニハ特ニ髻ウヅ華ヲ冠ノ上ニ挿シテ入朝セシム、其ノ翌年厩戸皇子親ラ漢文ヲ以テ憲法十七條ヲ撰定セラル、是ヲ我が國成文律ノ始トス、サレド毎條單ニ訓誨ノ詞ニ止リテ、現今ノ法律トハ甚ダ其ノ趣ヲ異ニセリ。

(四一)此ノ時期ニ於ケル佛法興隆及ビ美術文藝ノ發達ヲ問フ 厩戸皇子ハ憲法ノ劈頭ニ佛法興隆ノ事ヲ示シ、先ツ攝津ノ四天王寺ヲ創メ、次ニ大和ノ法隆寺ヲ建テ、自ラ佛經ヲ講ジテ教旨ヲ敷衍セラル、推古天皇ノ末年即チ紀元千二百八十四年ニ至リテハ、海内ノ寺四十六箇所、僧尼ノ數合セテ千三百八十五人ノ多キニ達ス、而シテ佛法傳來ヨリ此ニ至ルマテ實ニ七十二年ヲ經タリ、斯ク佛法ノ隆昌ニ赴クニ伴ヒ、曆學、音樂、建築、鑄造、彫刻、造瓦、佛畫等ノ工人渡來シテ之ガ發達ヲ促シ、ト著シク、就中歸化僧曇徴ハ最モ佛畫ニ巧ニ、且彩色紙墨ノ製法ヲ傳ヘ、鞍作鳥(鳥佛師)ハ佛像彫刻ニ精練ニシテ其ノ製作今ニ傳ハレリ。

(四二)支那交通ノ起元ヲ問フ 我ガ國ガ直接ニ支那ト交際ヲ開キタルハ實ニ紀元千二百六十七年即チ推古天皇ノ十五年ヲ以テ嚆矢トス、此ノ年小野妹子ヲ大使トシテ隋國(當時支那ノ國號)ニ遣ハサレ、翌年妹子ノ歸朝スル時、隋ヨリハ管禮使トシテ襄世清ヲ我ガ國ニ遣ハサレタリ、抑崇神天皇以前ヨリ九州ノ豪族等支那

ト交通スル者アリシカド、ソハ朝廷ノ關リ知ラザル所ナリキ、又應神天皇以後、支那ヨリ縫織ノ女工ヲ招キタレドモ此等ハ皆三韓ヲ媒トセリ、故ニ直接交際ハ推古ノ朝ヲ以テ其ノ始メトス。

(四三)海外留學生ノ由來ヲ問フ 隋使表世清ノ歸國ニ際シ、學生八人ヲ撰ビテ彼ノ國ニ留學セシメタルヲ首トシ、幾モナク隋亡ビテ唐ノ代トナルニ及ビ、支那ニ留學スル者愈々多ク、就中著名ナリシ者ヲ高向漢人玄理、南淵漢人請安僧新漢人旻等トス、此等ノ學生歸朝シテ支那ノ文物ヲ傳ヘ皇國ノ開化ヲ資ケタルコト極メテ多カリキ。

(四四)蘇我氏專横ノ狀ヲ問フ 物部氏亡ビテ朝權專ラ蘇我氏ニ歸シ馬子ハ大臣トシテ四朝ニ歷仕シ、且外戚ノ親ヲ憑ムヲ以テ威權特ニ隆赫ニ、隨ツテ悖逆ノ舉動少ナカラザリキ、其ノ子ノ蝦夷繼ギテ大臣タルニ及ビ、益々專横ヲ極メ、舒明天皇ヲ擁立シ、皇極天皇ヲ策立スル等天皇ノ廢立皆其意ニ出デ、遂ニ允許ヲ

得スシテ私ニ紫冠ヲ其子入鹿ニ授ケ以テ大臣ニ擬シ、大イニ第宅ヲ起シテ宮門ト稱シ、其ノ子ヲ王子ト稱スルニ至リヌ。

(四五)蘇我氏滅亡ノ顛末ヲ問フ 舒明天皇ノ皇子中大兄英明ナカノオホヒニシテ才略アリ、時ニ中臣勝海ノ子鎌足亦智謀ニ富ミケルガ、蘇我氏ノ社稷ヲ危クスルヲ見テ慨然匡濟ノ志ヲ起シ、竊ニ諸皇子ノ中與ニ爲スアルベキ者ヲ求メテ遂ニ中大兄皇子ニ結托シ、之ニ勸メテ蘇我石川麻呂、佐伯ノ子麿等ヲ援ト爲サシメ、皇極天皇ノ四年紀元一三〇五年六月三韓入貢ノ日ニ當リ、入鹿ヲ太極殿ニ斬殺シテ彼等父子ノ罪惡ヲ奏シ、又兵ヲ遣ハシ蝦夷ヲ討タシム、蝦夷悉ク圖書珍寶ヲ焚キテ自殺シ、蘇我氏ノ本宗茲ニ亡ビタリ。

(四六)曆術度量衡ノ起元及ビ其ノ以前ノ狀況ヲ問フ 上古未開ノ世ニハ千支年月ナドノ定メアルコトナク、唯太陽ノ出沒ニヨリテ晝夜ヲ分チ、月初メテ出ツレバ月立ツキタチ(即チ朔日)ト云ヒ、月見エザレバ月ゴモリ(即チ晦日)ト稱シ、花ノ開

クヲ見テ春ヲ知り、雁鳴キ渡ルヲ聞キテ秋ナルヲ知リタル類ニ過ギザリシナラシ、然ルニ欽明天皇ノ朝ニ至リ、百濟ヨリ曆博士ヲ召シ、推古天皇ノ朝、百濟ノ僧觀勒曆天文等ノ書ヲ献リシカバ、學生ヲ擇ビテ之ヲ學バシメ、天皇ノ十二年即チ紀元千二百六十四年ニ始メテ曆ヲ天下ニ頒チ給ヘリ、又物ヲ數フルノ法ハ上古、あだ、ひろ、つか等ノ稱アリ、是唯手モテ量リシ名目ニ過ギザリシガ、韓土トノ交通頻繁ナルニ及ビ、彼ノ國ヨリ所謂高麗尺ナル尺度ヲ傳ヘ、崇峻天皇ノ朝ニハ權衡ヲモ献ゼシメ、舒明天皇ノ朝ニハ斗、升、斤、兩ノ法ヲサヘ定メ給ヘリ。

(四七)支那交通後ニ於ケル文學及ビ風俗ノ一斑ヲ問フ 支那文學ハ支那交通ノ前ヨリ早ク已ニ傳來シタリト雖モ、交通ノ後ハ直接ニ其ノ文學ヲ傳ヘテ一層ノ發達ヲ來シタリ、而シテ其ノ發達ヲ來シタル一原因ハ、佛經ヲ研究スルノ力多キニ居ル、何トナレバ佛經ハ皆支那ニテ翻譯セシモノナレバ、支那文學ニ通ズルニ非ザレバ其ノ奥旨ヲ悟ル能ハサルヲ以テナリ、サレド當時支那ノ文格ハ所

謂四六駢麗ノ體ニシテ皇國ノ事物ヲ直ニ其ノ體ニ模シテ寫出スベキニ非ザレバ、大抵ハ支那ノ字音ヲ假リテ、皇國固有ノ詞ヲ寫シ、ニ過ギザルベシ、其ノ他貴族ノ間ニハ支那傳來ノ蹴鞠音樂行ハレ、皇極天皇ノ建テ給ヘル大極殿ノ内ニハ瓦ヲ甃ミ、屋上ハ碧瓦ヲ以テ葺ケリト云ヘバ、全ク支那風ノ建築ナリシナリ、衣冠ノ如キモ推古天皇ノ朝ヨリ全ク支那風ニ化シタルハ、當時百濟ノ畫工阿佐ノ丹青ニ係ル聖德太子ノ像ヲ見テモ之ヲト知スベシ。

(四八)左ノ人々ノ事蹟ヲ簡明ニ記述セヨ

- 甲、ウツヒヒ珍彦
- 乙、カミヤキミ神八井耳命
- 丙、オトメチカサヒメ乙橘媛
- 丁、ツキノイキナ武内宿禰
- 戊、オホトチノサデヒコ御諸別王
- 己、オホトチノサデヒコ大伴狹手彦
- 庚、ツキノイキナ調伊企儼

(甲)珍彦ハ漁人ナリ、神武天皇東征シテ速吸門ニ到リ給ヒシトキ、珍彦舟ニ乘リテ帝ヲ迎ヘ奉リ、遂ニ勅ヲ奉ジテ嚮導トナリ、シヒネツヒコ椎根津彦ノ名ヲ賜ハリタ

(乙)神八井耳命ハ神武天皇ノ皇子ニシテ綏靖天皇ノ同母兄ナリ、神武天皇崩ジテ手研耳命逆ヲ謀リシトキ、綏靖天皇ト力ヲ協セテ之ヲ誅シ、遂ニ天皇ヲシテ位ニ即カシメ、己ハ輔佐ノ任ニ當レリ。

(丙)乙橘媛ハ倭建命ノ妃ナリ、命、東夷ヲ征討セントテ相摸ヨリ上總ニ渡リ給フトキ、海上颶風ニ逢ヒ船將ニ覆ラントスルニ當リ、橘媛皇子ノ御身ニ代ラントテ身ヲ海ニ投ジヌ、是ニ於テ風濤稍靜マリテ船ハ岸ニ着セリ、皇子既ニ戡定ノ功ヲ畢ヘ旋リテ碓日嶺ニ登リ、東望シテ橘媛ヲ追慕シ、吾孀ハヤト宣ヒシヨリ後世、東國ヲ吾孀ト稱セリトゾ。

(丁)武内宿禰ハ忠良無比ノ臣ニシテ、神功皇后ヲ翼ケ三韓征服ノ功ヲ遂ゲシハ云フモ更ナリ、景行ノ朝ニ蝦夷地ヲ巡檢シ、成務ノ朝ニハ大臣トナリテ大イニ行政ノ組織ヲ整ヘ、應神ノ朝ニハ筑紫ニ居リテ、西陲ヲ鎮撫シ兼子テ三

韓ヲ控制シ、仁徳ノ朝ニ至リテ薨ズ、在官二百四十餘年ナリキ。

(戊)御諸別王ハ崇神帝ノ皇子豐城入彦命ノ曾孫ナリ、景行ノ朝東山道十五國ノ都督ニ任ジ、東陸頼ツテ以テ靜穩ナリキ。

(己)大伴狹手彦ハ金村ノ子ニシテ宣化ノ朝、新羅、任那ヲ侵シ、時、狹手彦往イテ任那ヲ鎮シ且百濟ヲ救ヒ、欽明ノ朝、大將軍トナリ、兵數万ヲ率ヰテ高麗ヲ伐チ、百濟ノ計ヲ用ヒテ大イニ之ヲ破リ、勝ニ乘ジテ高麗ノ王宮ニ入り、悉ク珍寶什器ヲ獲テ還リヌ。

(庚)欽明ノ朝新羅任那ヲ侵シテ我が官府ヲ毀チシカバ、朝廷大將軍紀男麻呂、副將軍河邊瓊岳ヲ遣ハシテ新羅ヲ討タシメ給フ然ルニ我が軍利アラズシテ軍士調伊企儼敵ノ擒ニスル所トナル、敵之ヲ却カシテ降ラシメントセシニ、伊企儼敢テ屈從セザリシカバ、更ニ及チ拔キテ之ニ逼リ、汝宜シク日本ノ將吾ガ髻肉ヲ啖ヘトイフベシト命ジタルニ、伊企儼却テ新羅王吾ガ髻肉ヲ啖ヘト

大呼シケレバ、終ニ敵ノ殘殺ニ逢ヒタリ。

第二編 大化革新ヨリ平氏滅亡ニ至ル

(一)大化ニ於ケル職官改正ノ理由及ビ班田租庸調ノ制ヲ問フ 大化ノ革新ハ第三十六代孝徳天皇ノ朝ニ施行セラレタリト雖モ、實ハ其前ヨリ中大兄皇子ト鎌足トノ圖謀計畫ニ成レルモノトス、天皇即位ノ年即チ紀元千三百五年初メテ年號ヲ立テ、大化ト命ジ給フ此ノ年大臣大連ヲ廢シテ左右大臣及ビ内臣ヲ置キ、阿部内麻呂ヲ左大臣ニ、蘇我石川麻呂ヲ右大臣ニ、鎌足ヲ内臣ニ任ジ給ヒキ、是即チ大臣大連ガ專横ノ弊ヲ改革シ給ヘルナリ、其ノ翌年諸國ノ國造、稻置ヲ廢シテ國司ヲ發遣シ給フ、此ヨリ先キ各地方官ハ宛モ近世ノ大名ノ如ク、世々土地人民ヲ私有シテ隨意ノ政ヲ施シ、弊害極メテ多ク、加之蘇我氏ノ如ク廣大ノ土地、衆多ノ人民ヲ領スル者ハ、勢朝廷ノ不利ヲ醸スニ至リシカバ、此ニ至リ乃チ世襲ノ地方官ヲ罷メテ任限アル國司ニ替ヘラレタルナリ、之ヲ郡縣ノ政治

ト名ク、即チ天下一般ヲ公民公田トシテ王室ノ領有ニ歸スルノ義ナリ、斯ク郡縣ノ制定マリシカバ、先ヅ戶籍ヲ檢按シテ戶口ノ多少ヲ計リ、次ニ班田收授ノ法トテ、男子生マレテ六歳ニ至レバ、口分田二段、女子ニハ其ノ三分ニ賜ヒ、六年毎ニ死生ヲ調査シテ、或ハ收メ或ハ授クルノ法ヲ定メラル、當時ノ一段ハ三百六十歩ニシテ平均稻五十束ヲ出ス者ト算シ、一束ノ米ハ五升ト算セラル、而シテ其ノ田租ハ每段二束ニ把即チ收穫ノ凡二十分一ナリ、又男子ハ人毎ニ絹繩及ビ各種ノ土産ヲ上納セシメ之ヲ調ト云フ、其ノ他五十戸毎ニ一人ヅ、毎年人夫ヲ出シ、每戸之ガ糧トシテ布米ヲ納メシメ之ヲ庸ト云ヒキ。

(二)大化革新ニ於ケル中央政府ノ組織及ビ軍制ヲ問フ 政府ノ組織ヲ改革シテ二官八省トナシ、太政官ノ上ニ神祇官ヲ置キテ敬神ノ國風ヲ明カニシ、中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内ノ八省ヲ置キ皆太政官ニ屬セシメテ以テ職務ヲ分掌ス、又禮法ヲ制シ更ニ位冠ヲ定メテ以テ朝儀ヲ整ヘラル、軍制ハ、男子二十一歳以上六十歳以下ヲ成丁トシ、全國ノ成丁三分一ヲ取りテ專ラ兵事ヲ習ハセ、事アル時ハ軍ニ從ハシム、又要害ノ地ニハ關塞、斥候、防人ヲ置キ以テ邊寇ニ備ヘラル。

(三)蝦夷征服ノ事實ヲ問フ 大化ノ革新ニヨリテ内治漸ク整ヒシカド、王化尙未ダ東陞ニ及バズ、蝦夷ハ其ノ地高麗、肅慎(一ニ靺鞨ト云フ、高麗ノ東北ニアリテ蝦夷島ト相對セリ)ニ近キヲ以テ、形勢ニ風動セラレ、屢々不穩ノ狀アリキ、是ニ於テ齋明天皇(皇極天皇御)ノ三年即チ紀元千三百十八年ニ、越ノ國司阿部比羅夫舟師七十艘ヲ率テ海路ヨリ蝦夷ヲ征シ、淳代、津輕ニ郡領ヲ置キ、更ニ渡島ニ渡リテ後方羊蹄ニモ郡領ヲ置キ、尙船ヲ進メテ肅慎ヲ征伐セリ、是ヨリ蝦夷永ク我が版圖ニ入りヌ。

(四)三韓形勢ノ變遷始末ヲ問フ、 韓地ハ欽明ノ朝ニ任那滅ビシヨリ、屢々兵ヲ派シテ恢復ヲ圖ラレシガ毎ニ功ヲ奏セス、齋明ノ朝ニ至リ、新羅唐ニ内屬シ、其兵ヲ假リテ百濟ヲ滅シ國王ヲサハ虜ニセリ、百濟ノ國相鬼室福臣殘兵ヲ集メテ

王城ヲ恢復シ、王子豐璋(當時我が國ニ)
質タリシ者ヲ迎へ、且我ニ援ヲ乞へリ、皇太子(中大兄)乃チ天皇ヲ奉ジテ西征シケルガ、會ニ天皇病ミテ筑紫ノ朝倉ノ行宮ニ崩ジ給ヒキ太子素服シテ制ヲ稱シ、阿曇比羅夫等ヲ遣ハシ、豐璋ヲ立テ、百濟王トセリ、然ルニ内亂更ニ起リテ豐璋ハ高麗ニ奔リ、我が軍亦唐兵ト戰ヒテ利アラズ百濟全ク滅亡セリ、後幾モナク新羅復唐兵ト合シテ高麗ヲ滅セシカバ、三韓悉ク我が統屬ヲ脱シタリ、斯クテ我が國ニテハ唐、新羅ノ侵襲ニ備ヘンタメ西陸ニ防烽ヲ設ケ、又水城(大垣ヲ築キテ水ヲ貯ヘタルモノ)ヲ築キ、大イニ兵馬ヲ閱シテ警戒スル所アリシガ、太子稱制ノ四年ニ唐ノ聘使來リテ和ヲ講ジ好ヲ修シテ事平ギヌ、此ノ後十餘朝、百數十年ノ間新羅ハ時々使ヲ遣ハシ、舊慣ニ依リテ臣ト稱シ朝貢ト唱ヘシガ、往々無禮ノ舉動アリシコト以テ、仁明天皇ノ朝ニ至リ、遂ニ全ク新羅人ノ來朝ヲ禁止シタリ。

(五)天智帝ノ御事蹟ノ著明ナルモノヲ問フ 天皇皇子タルノ時蘇我入鹿ヲ誅

シ及ビ大化ノ新制ヲ撰定シ給ヒシ事ハ云フモ更ナリ、内外多事ノ際ニ立タセ給ヒ、雄略天皇、聖德太子ノ遺志ヲ紹ギテ學校ヲ興シ典禮ヲ定メ、尙新ニ戶籍ヲ作り盜賊浮浪ヲ糺斷シ、又中臣鎌足等ニ律令ヲ撰定セシメ給フ(世ニ之ヲ近江令ト云フ、時ヲ以テナリ、然レドモ此ノ律令今ハ傳ハラレズ)等、深ク民情ヲ察シテ治ヲ施シ給ヒシコト實ニ勤カラズ、斯ク御功績著シク皇祖ノ大業ヲ皇張シ給ヒシヲ以テ、永ク中宗ト仰ガレ給ヘリ。

(六)壬申ノ亂ノ顛末ヲ問フ 初メ天智天皇、事ヲ以テ皇太弟大海人ト善カラズ、天皇病革リ給フニ際シ、大海人、皇子、儲位ヲ辭シ髮ヲ削リテ吉野ニ入ル、是ニ於テ大友皇子位ニ即キ給フ、弘文天皇是ナリ、大海人固ヨリ平カナラズ、既ニシテ流言アリ、朝廷吉野ニ備フル所アリト、大海人之ヲ聞キ意ヲ決シテ自ラ伊勢ニ出デ、美濃ノ不破、伊勢ノ鈴鹿ヲ塞ギテ東山、東海ヲ扼シ、東國ノ兵ヲ集ム、天皇大イニ驚キ、急ニ兵ヲ徵シ給ヘドモ、觀望シテ至ラズ、乃チ蘇我果安等ヲ遣ハシテ不破ヲ襲ハシメ給トシモ、諸將相和セズシテ逡巡スルノ間ニ、東軍ノ將村

國男依等、不破ヨリ進ミ瀬田ニ至ル、天皇、近臣及ビ諸將ヲ率キテ防戦シ給ヒシ
モ皇軍利アラズシテ天皇遂ニ山前ニ崩ジ給ヒヌ、時ニ紀元千三百三十一年ナリ、
此ノ歳壬申ニ當レルヲ以テ世ニ之ヲ壬申ノ亂ト稱ス。

(七)天武天皇ノ著明ナル御政績ヲ問フ 大化ノ新制ニヨリテ中央集權ノ實績
略々擧リタリト雖モ、當時事尙草創ニ屬シテ未ダ完備スルニ至ラズ、是ニ於テ天
皇痛ク之ヲ修正増補シ給ヘリ、天皇又諸氏族ヲ八類ニ分チ、其ノ祖先ノ高下ニ由
リ、等級ヲ定メ給フ、真人、朝臣、宿禰、忌寸、道ノ師、臣、連、稻置ノ八等はナリ、
之ヲかばねト云フ、而シテ一族中ノ勢力アル者ヲ氏ノ上即チ氏ノ長者ト定メテ其
氏族ヲ總轄セシメラル、又舊冠位ノ制ヲ改メ、位ヲ四十八階ニ分チ、位記ヲ賜
ヒテ叙任ヲ表スルノ制ヲ定メラル、其ノ他軍事ヲ獎勵シ、國史ノ撰定ヲ命ジ、
男女ノ結髮、女子ノ騎馬等ニ至ルマデ風俗ニ關シテ規定セラル、所頗ル多カリ
キ。

(八)大寶令ニヨリ定メラレタル品位及ビ官廳ノ制ヲ問フ 親王ノ位ハ一品ヨ
リ四品ニ至ル、臣下ノ位ハ一位ヨリ八位ニ至リ各一正從アリ、即チ正一位從一
位ノ如シ、四位以下更ニ正從ヲ各上下ニ分ツ、即チ正四位上、正四位下ノ如シ、
八位ノ下ニ大少初位アリテ各上下ニ分チ、總ベテ二十六階トス、官廳ハ中央
政府ニ神祇、太政ノ二官、中務、式部、民部、治部、兵部、刑部、大藏、宮内ノ
八省アリ、太政官ハ即チ今ノ内閣ニシテ太政大臣、左右大臣、大納言等ノ官アリ
テ大政ヲ總攬シ、八省ハ各其ノ名ノ如ク庶政ヲ分掌ス、此ノ外ニ又彈正臺アリ
テ糾斷ヲ掌ル、地方廳ニハ國司、郡司アリ、又京ニ左右京職アリ、攝津ニ攝津職ア
リ、筑紫ニ大宰府アリ、而シテ此ノ後ニ新設セラレタル官ヲ總ベテ令外官ト云
フ、内大臣、參議等ノ如キ是ナリ、斯クテ孰レノ官衙ニモ其ノ官吏ニハ、長官、
次官、判官、主典ノ四等アリテ位階、俸祿、服色等ノ制亦之ニ副フ。
(九)同上兵制ヲ問フ 京都ニ衛門ノ府、左右衛士府、兵衛府(後改メテ左右近衛、
衛門、兵衛トス)

アリテ禁内ノ守衛ヲ司リ、兵員ノ定數凡ソ二千七百人トス、諸國ニハ大抵五六郡ニ一軍團アリテ全國凡ソ百三十所ノ軍團ヲ置キ、兵數總ベテ十萬ニ上レリ、每團ニ大毅(團長ナリ)アリテ之ヲ統べ、事アリテ軍ヲ出ストキハ軍數ニ應ジテ將校ノ數ヲ定メ、而シテ之ヲ統帥スル者ヲ將軍トス、徵兵ノ法ハ全國ノ壯丁三分一ヲ取リテ兵トシ、其ノ中ニテ禁中ノ宿衛ヲ勤ムル者ヲ衛士ト云ヒ、筑紫ニ赴キ警備スル者ヲ防人サキキト云フ。

(一〇)同上學制ヲ問フ 學制ハ京ニ大學アリ、國ニ國學アリ、而シテ大學ノ學科ハ明經道、紀傳道、明法道、算道ノ四科ニ分ル、此等ノ學校ニテハ主トシテ官吏ノ子弟ヲ教養シ、一般人民ハ入學ヲ許サレザルノ制ナリキ。

(一一)同上刑法ノ制ヲ問フ 答、杖、徒、流、死ノ五刑ヲ定メ、而シテ死ニ絞、斬ノ二種アリシコト猶近代ノ如シ、其他贖銅八虐(謀反、謀大逆、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義)等ノ法ヲ設ケラル、但シ八虐ハ決シテ特赦ノ典ニ與カラザルノ定メナリキ、此ヨリ

先キ贖罪ノ法及ビ、火刑、墨刑等モ早ク已ニ行ハレシガ、皆臨機ノ處分ニ過ギズシテ法文ニヨリ確定セラレタルハ此ヲ始メトス。

(一二)律、令、格、式ノ別ヲ問フ 律トハ今ノ刑法ナリ、令トハ官制、學制、民法等ノ法令ヲ行ヒ、格トハ時ヲ量リテ制ヲ立テタル者即チ今ノ條例ノ類ヲ云ヒ、式トハ闕ヲ補ヒ遺ヲ拾ヘル者即チ今ノ追加規則ノ如キヲ云フ。

(一三)左ノ人々ノ著明ナル事蹟ヲ問フ

- 甲 高向玄理
- 乙 大伴博麻
- 丙 巨勢德太古

(甲)高向玄理ハ武内宿禰ノ裔ニシテ推古ノ朝大使小野妹子ニ隨ヒテ隋ニ往キ留學スルコト三十三年、舒明帝ノ十二年ニ歸朝シ、大化元年國博士ニ擧ゲラル、白雉五年遣唐押使トナリ唐ニ赴キ遂ニ長安ニ入りテ高宗皇帝ニ見エ、留連數月、唐ニテ卒セリ。

(乙)紀元千三百二十三年、阿部比良夫韓國ニ赴キ、唐ノ兵ト戰ヒテ利アラス、

時ニ大伴ノ博麻ハ軍丁タリシガ、土師ノ富杼等ト共ニ虜トナリナガラ、唐ノ狀況ヲ探リテ之ヲ皇朝ニ奏上セント欲シ、己ガ身ヲ賣リ富杼等ガ衣糧ノ資ニ充テ歸朝セシメ遂ニ唐ニ入りテ持統ノ朝始メテ我が國ニ還リヌ、朝廷厚ク其ノ愛國ノ誠忠ヲ賞シ給ヘリ、

(丙)古勢德太古ハ孝德ノ朝ニ左大臣トナリ、尋イデ白雉元年ニ新羅ノ使至リシニ、唐服ヲ着セシテ以テ朝廷其ノ無禮ヲ責メテ之ヲ逐還サレキ、時ニ德太古奏シテ曰ク今ニ及ビ新羅ヲ討タザレバ後必ず悔アラン、請フ難波ヨリ筑紫ニ至ルマデ多ク戰艦ヲ泛ベ以テ形勢ヲ盛ニシ、新羅ヲ召シテ其ノ罪ヲ問ハハ彼必ず懾服セント、然ルニ此ノ議遂ニ行ハレズ、後果シテ新羅ハ唐ニ合シ、我ハ三韓ノ屬國ヲ失フニ至レリ。

(一四)奈良朝ノ終始及ビ遷都ノ理由ヲ問フ 奈良朝トハ元明天皇ノ遷都(紀元三七〇年)ヨリ以來元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁ノ七代、七十五年間ヲ云フ、抑

奈良ニ遷都セシ理由ハ様々アルベケレド、第一ニ大化革新以來朝廷ノ狀況頓ニ一變シ、都ヲ一處ニ確定セズバ萬機ノ政ヲ行ハセラル、ニ不便多カリシニ依ルナルベク、第二ニ唐ヘ往キタル人々、長安城ノ宏壯ナルヲ見テ、唐人來聘ノ際從來ノ皇城ニテハ其ノ盛大ヲ觀スニ足ラザルヲ憾ミトシ、交ニ新宮建造ヲ勸メ奉リシニ由レルナルベシ。

(一五)本邦錢貨鑄造ノ濫觴及ビ其以前ノ交易法ヲ問フ 本邦ニテ始メテ錢貨ヲ鑄造セシ時代ハ定カナラネド、元明天皇ノ和銅元年ニ、初メテ銅ヲ探リ、尋イデ和同開珎ト云ヘル錢ヲ鑄シコトアリ、是ゾ大方濫觴ナルベキ、抑、往時錢貨ナキ世ニハ專ラ物ト物トヲ以テ交易ヲ營ミ、概ネ稻米布帛ナドヲ用ヒテ之ニ充テ、例ヘバ何品ハ稻何束、何品ハ絹幾匹ト定メテ物ノ價ヲ計リシナリ。

(一六)國史撰修ノ沿革ヲ問フ 推古ノ朝、聖德太子、蘇我馬子ト共ニ國史ヲ選バレシガ、蘇我氏ノ滅亡ト共ニ失セテ今ハ傳ハラズ、天武ノ朝又修史ノ業ヲ

始メラレシモ果サズシテ止ミヌ、然ルニ元明天皇ノ和銅五年(二三七)ニ至リ、太安麻呂古事記三卷ヲ選ビ、開國ヨリ推古ノ朝ニ至ルマデノ事蹟ヲ紀述セリ、元正天皇ノ朝ニ至リ、又舍人親王等ニ詔シテ、日本書記三十卷ヲ撰バシム、即チ開國ヨリ持統ノ朝ニ至ルマデノ歴史トス、是ヨリ後、醍醐ノ朝ニ至ルマデニ、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄ナド云フ國史類々撰出セラレ世ニ之ヲ六國史ト稱ス。

(二七)奈良朝時代佛法隆盛ノ狀ヲ問フ 此ヨリ先キ天武ノ朝、使テ諸國ニ遣シテ佛經ヲ講説セシメ、又戸毎ニ佛壇ヲ設ケシメラレシガ、聖武ノ朝天平十三年(紀元一四〇二年)ニハ諸國ニ詔シテ國分寺ヲ建テシメ、又國毎ニ僧寺尼寺各一ヲ置カシム、當時水旱疾疫アレバ朝廷必ズ佛ニ禱リ經ヲ誦スルヲ施政ノ方便トナシキ、特ニ聖武天皇ハ佛法ヲ信ジサセ給フコト深ク、唐僧鑑真ニ就イテ戒ヲ受ケ、自ラ三寶奴ト稱シ給フニ至リ、皇后光明子モ亦深ク佛ヲ信ゼラル、此ノ朝ニ建築

セル佛寺ノ最モ宏壯ナルハ東大寺ニシテ、長五丈二尺ノ金銅大佛ヲ安置シ、之ヲ總國分寺トナス、帝ノ皇女位ヲ繼ギ孝謙天皇ト申シ奉リシガ、此ノ帝亦佛法ヲ信ジ給フコト深ク、東大寺大佛ノ落成式ニハ一萬ノ僧ヲ會シテ齋會ヲ修シ、重祚(稱徳天皇ト稱シ給フ)ノ後ニハ百萬ノ小塔ヲ造リテ中ニ印刷ノ經文ヲ藏メ之ヲ諸寺ニ頒チ給ヘリ、本邦ノ印刷術此ニ始マル。

(二八)奈良朝文學美術ノ發達ヲ問フ 文學ノ發達ハ國史撰修ニ徴シテ昭々タルノミナラズ、詩歌等ノ韻文モ亦此ノ時代ニ著シク發達シタリ、弘文天皇及ビ大津皇子ノ如キハ共ニ詩ヲ善クセラレ、和歌ニハ柿本人麻呂、山邊赤人、大伴家持等輩出シテ萬葉集中ノ巨擘ト稱セラル、ニ至レリ、又彫刻繪畫等ハ、佛寺ノ建築盛ナルニ伴ヒテ最モ雄麗精美ヲ極メ、天平時代ノ工藝美術トテ今モ尙其ノ進歩ニ驚カシムル程ナリキ、其ノ他蒔繪織物等ノ術モ大イニ進歩シ、奈良ノ寺院、正倉院ノ寶庫ニハ當時ノ制作物ノ現存スル者少カラズ。

(一九)奈良時代ノ衣服家屋ノ制ヲ問フ 衣服ノ制ハ支那交通以來唐風ニ倣ヒテ著シク其ノ様ヲ變ジ、袖ハ濶ク裾ハ長キ制モアリケン、からざるもト稱シテ今日ノ衣服ニ近キ者アリシカド、ソハ重ニ上等社會ニ行ハレテ一般ニハ猶襟、身幅共ニ狭カリシナ、元明ノ朝詔シテ諸司ノ人ノ袖ノ濶サヲ八寸乃至一尺ト定メ小首^{チクビ}ナクシテ身幅ノ狭キ服ヲ禁ジ給ヒキ、此ノ風初メハ官省ニ出入スル者ノミニ止リシガ、次ニ京地ノ人民ニ及ビ遂ニ天下一般ノ風トナリヌ、尋イデ元正ノ朝、詔シテ左衽ヲ改メ右衽トナサシメ給フニ及ビテハ殆ド今日ノ平服ト制ヲ同ジウセリ上代ノ家屋ハ一般ニ屋根ヲ茅葺ニシ、木ヲ組ミテ壁トシ、貴人ノ家ニハ往々板葺ノ者アリ、瓦葺ハ獨リ佛寺ニノミ限リシガ、聖武ノ朝、詔シテ五位以上ノ人若シクハ資財饒カナル者ニハ、屋根ヲ瓦葺ニシ、丹白ヲ以テ壁ヲ塗ラシメ給ヒキ。

(二〇)藤原廣嗣ノ叛亂始末ヲ問フ 聖武天皇、深ク佛法ヲ信ジ給ヒシニヨリ。僧徒ノ勢甚ダシク、殊ニ玄昉ト云フ者君寵ヲ恃ミテ亂行多カリケレバ、太宰大貳藤原廣嗣上表シテ玄昉ガ奸惡ヲ正サンコトヲ請ヒ、且、當時諸國ノ兵士ヲ解キ、牧馬ヲ賣リ、武備ヲ怠リ給ヘルヲ歎キテ切ニ諫メ奉リシカド用ヒラレズ、剩サヘ妻ヲ玄昉ニ奪ハレントシケレバ、廣嗣憤怒ニ堪ヘズ、遂ニ任所ナル太宰府ニ據リテ謀叛セシガ、官軍發向シテ之ヲ誅シタリ。

(二一)藤原仲麻呂ノ叛亂始末ヲ問フ 孝謙天皇ノ朝、藤原不比等ノ孫仲麻呂、君寵ヲ受ケ、頗ル勢威アリシガ、天皇、位ヲ淳仁天皇ニ讓リ給ヒ、太上天皇ニテ猶政事ヲ聞召スニ及ビ、仲麻呂益々權勢ヲ擅ニシ、姓名ヲ惠美押勝ト賜ヒ正一位ニ叙セラル、然ルニ上皇又僧道鏡ヲ寵シ、稍々押勝ヲ疎ンジ給ヒケレバ、押勝憤怨シ、兵ヲ集メテ道鏡ヲ誅シ、上皇ヲ幽閉セント圖リシニ、謀泄レテ官軍、之ヲ討ゼリ、押勝奔リテ近江ニ到リシカド、東北諸國ノ道已ニ官軍ノ爲ニ塞ガレタルヲ以テ終ニ誅ニ伏シヌ。

(二二)和氣清磨ガ忠節ノ狀ヲ問フ 押勝誅セラレテ後ハ、道鏡益々殊籠ヲ受ケ、太政大臣禪師トナリ尋イデ法王ノ位ニ昇リ、車輿服飾總テ供御ニ擬シ、大小ノ政皆己ノ意ニ出デ威權隆赫比ヒナカリキ、時ニ太宰主神習宜^{スギ}ノ阿蘇磨、宇佐八幡ノ託宣ナリト矯リ、天位ヲ道鏡ニ禪リ給ハ、天下益々太平ナラント奏ス、天皇頗ル之ニ惑ヒ給ヒヌ、乃チ和氣清磨ヲ宇佐ニ遣シ、更ニ神教ヲ乞ハシメ給フ、清磨發スルニ臨ミ道鏡威嚇シテ己ガ意ニ從ハシメントス、然ルニ清磨毅然動カズ、還リテ、我が國開闢以來君臣ノ分定マレリ、臣ヲ以テ君トセシコト未ダ之アラズ、天日嗣ハ必ず皇緒ヲ立ツベシ、道鏡何者ゾ速ニ剪除スベシト復命セシカバ、道鏡大ニ怒リテ清磨ノ官職ヲ褫ヒ、名ヲ穢磨ト改メテ大隅ニ流シ、途ニテ之ヲ殺サシメントセシガ果サザリキ、後、光仁ノ朝ニ至リ、道鏡ハ下野國ニ貶斥セラレ、清磨ハ召還サレテ官ニ復シキ。

(二三)左ノ人々ノ著明ナル事跡ヲ問フ

甲 僧行基

乙 阿倍仲磨

丙 吉備眞備

丁 藤原清河

(甲)行基ハ早クヨリ諸國ヲ巡リ、池溝ヲ堀リ橋梁ヲ架シナドシテ、佛法ノ弘布ニ力ヲ致シ、僧ニシテ、聖武ノ朝、大僧正トナリ、深ク皇室ノ尊信ヲ得、世ニ大菩薩ト尊稱セラル、此ノ僧又、本地垂迹ノ説ヲ唱へ、佛ヲ拜スルハ即チ神ノ本ヲ敬フモノナリトシ、佛教愈々民間ニ弘マルニ至レリ。

(乙)阿倍仲磨ハ元正ノ朝ニ留學生トナリテ唐ニ留學シ、玄宗皇帝ニ仕ヘ秘書監トナリ、姓名ヲ朝衡ト改ム、仲磨歸朝スルノ時ヲ失ヒ、五十餘年唐ニ在リテ終ニ異域ニ死ス、其ノ鄉國ヲ思慕シテ詠ゼル三笠山ノ歌ハ人口ニ膾炙スル所ナリ。

(丙)吉備眞備モ亦元正ノ朝ニ仲麻呂ト共ニ唐ニ留學シ、居ルコト十九年許ニシテ、經史、曆算、音律、法制等ニ通ジ、歸朝ノ後、大學ノ博士トナリ、文

學ヲ進メ朝儀ヲ改メ、曆術ヲ正ス等其ノ功勳カラズ、片假名五十音圖ハ即チ其ノ創作スル所ナリト云フ。

(丁)藤原清實、聖武ノ朝、遣唐使トナリテ唐ニ赴キ、儀式ノ際、班位ヲ爭ヒテ國權ヲ墜サズ使命ヲ全ウシキ、當時、玄宗皇帝、清河ノ動容進止禮節ニ合ヘルヲ嘉ミシ、我が國ヲ稱シテ君子國ナリト云ハレキトソ。

(二四)兵農分別ノ濫觴ヲ問フ 光仁天皇ノ寶龜年間太イニ元兵ヲ沙汰シ、殷富ナル百姓ノ弓馬ニ堪フル者ヲバ擧ゲテ兵士トナシ、其ノ餘ノ羸弱ナル者ハ罷メテ田里ニ歸シ專ラ農業ニ就カシム、是ニ於テ兵農全ク別レ、舉國皆兵ノ古制遂ニ一變スルニ至レリ。

(二五)桓武天皇ノ遷都及ビ其ノ規模ヲ問フ 桓武天皇ノ延暦十三年即チ紀元千四百五十四年ニ、山背ノ菟野郡宇多村ノ地ヲ相シテ新都ヲ經營シ、奈良ヨリ移リテ此ニ都シ給ヘリ、此ノ地ノ形勢タル山河襟帶シテ自然ニ城ヲ成セルヲ以

テ山背ヲ改メテ山城トシ平安城ト名ク、實ニ今上天皇ニ至ルマデ千有餘年間ノ帝都タリキ、抑、此ノ都ノ規模タル南北一千七百五十三丈、東西千五百八丈、其ノ中央ニ一大路アリテ南北ニ通ジ、其ノ幅二十八丈、之ヲ朱雀大路ト云フ、此ノ大路ノ東ヲ左京ト云ヒ、西ヲ右京ト云フ、各、東西ニ通ズル九條ノ道路アリテ街衢井然タリ、人家一戸ノ廣サヲ間口五丈、奥行十丈ト定ムレバ、全都ノ戶數實ニ三萬八千九百餘ノ多キニ上リキ、而シテ宮城ハ市ノ北端ニ位シテ南面シ、南北四百六十丈、東西三百八十四丈、四方ニ十二ノ門ヲ開キ、太極殿ヲ初メ、紫宸殿、清涼殿等ノ宮殿ヨリ諸官省ニ至ルマデ總ベテ其ノ内ニアリ、之ヲ總稱シテ大内裏ト云フ、結構ノ宏麗ナル建築ノ輪奐タル振古其ノ比ヲ見サル所トス、然レドモ物變リ星移リテ漸ク其ノ舊態ヲ變ジ、今ノ西京ハ僅ニ當時ノ左京ノ殘留セルノミ。

(二六)元正ノ朝ヨリ嵯峨ノ朝ニ至ルマデ蝦夷叛亂及ビ征服ノ顛末ヲ問フ 齊

明ノ朝、阿倍ノ比羅夫、蝦夷ヲ征服シテヨリ東陞久シク無事ナリシガ、元正ノ朝ニ至リ、蝦夷復叛シテ按察使ヲ殺シ、聖武ノ朝又國司ヲ殺シタリ、朝廷乃チ藤原宇合^{カヒツ}ヲシテ之ヲ征セシメ給フ、此ノ時鎮守府將軍大野東人、陸奥ニ多賀城ヲ築キ、後又出羽ニ秋田城ヲ築キテ鎮撫ノ策ヲ講ジケルガ光仁ノ朝、蝦夷更ニ大イニ亂レ、藤原繼繩之ヲ討シテ平ケル能ハズ、桓武ノ朝ニ及ビ、大伴家持、紀古佐美等又之ヲ征シテ功ナカリキ、是ニ於テ延暦十二年^(紀元一四五三年)坂上田村麿呂ヲ副將トシテ之ヲ征セシメラレシニ、始メテ功アリシカバ、乃チ田村麿呂ヲ征夷大將軍ニ任ジ、大イニ蝦夷ノ巢窟ヲ掃蕩シ、陸奥ノ膽澤ニ城キヌ、是ヨリ東陞漸ク靜謐ニ歸セシガ、嵯峨ノ朝ニ至リ、蝦夷復叛キケレバ文屋綿曆將軍トナリ之ヲ討シテ全ク之ヲ滅盡シタリト云フ。

(二七) 弘仁ノ變亂ヲ問フ 初メ平城上皇、深ク尙侍藥子ヲ寵シ言フ所皆從ヒ給フ、其ノ兄仲成亦勢ヲ恃ンテ驕恣ナリ、藥子、上皇ヲシテ復祚セシメ己レ后位

ニ上ラント欲シ、嵯峨天皇ノ弘仁元年^(紀元一四七〇年)上皇ノ宣旨ト矯リ、都乎平城ニ遷サントス人心洵々タリ、天皇乃チ藥子ノ官位ヲ褫ヒ、仲成ヲ捕ヘ給ヒシニ、上皇大イニ憤怒シ、兵ヲ擧ゲ藥子ト輦ヲ同ジクシテ東國ニ出デントシ給フ、天皇、坂上田村麿ニ勅シテ美濃路ヲ塞ガシメ給ヒケレバ、上皇進ムコト能ハズ、宮ニ還リテ薙髮シ、藥子ハ毒ヲ服シテ自殺セリ、是ヲ弘仁ノ變ト云フ。

(二八) 藏人所及ビ檢非違使設置ノ由來ヲ問フ 嵯峨天皇 弘仁元年始メテ藏人所ヲ置キ、機密ノ文書ヲ掌リ又訴訟ヲ聽斷セシメラル、藤原冬嗣、巨勢野足其ノ頭タリ、是ニ由リテ中務省ト辨官トノ事務ハ自ラ藏人所ニ移リヌ、天皇又檢非違使ヲ置キテ盜賊追捕ノ事ヲ掌ラシメ給ヒシガ、淳和ノ朝ニ至リ、更ニ檢非違使廳ヲ置カル、是ヨリ衛府、彈正臺、刑部、京職等ノ職權皆此ノ使廳ニ歸シテ、大寶令ノ制度漸ク紊亂スルニ至レリ。

(二八) 佛教八宗ノ由來ヲ問フ 推古ノ朝、高麗ノ僧惠灌來リテ始メテ三論宗

ナ唱フ、成實宗モ亦此ノ朝ヨリ傳ハリシガ、其ノ傳者詳ラカナラズ、齋明ノ朝、智通、智達ノ二僧、渡唐シテ法相宗ヲ傳ヘ、聖武ノ朝、唐僧道璿ハ華嚴宗ヲ傳ヘ、孝謙ノ朝、唐僧鑑真ハ律宗ヲ傳ヘ、桓武ノ朝ニ至リ、僧明全、俱舍宗ヲ始メシガ、其ノ源實ニ法相宗ヨリ出ヅ、此ノ朝又僧最澄、天台宗ヲ弘メ、空海、眞言宗ヲ立ツ、以上諸宗ヲ併セ稱シテ八宗ト云フ。

(二九)畿道ノ沿革ヲ問フ 繼體ノ朝ノ頃、凡百四十四ニ定メ給ヒシ國々ハ、大寶ノ頃、更ニ一畿七道五十八國三島トナリ、爾來分レテ又合スルコト石城、石背、諏訪ノ如キアリ、合シテ又分レタルコト和泉、安房、能登ノ如キアリ、蝦夷全ク平定シテ後ハ、終ニ一畿七道六十六國二島ト定リテ明治維新ノ初マデ永ク變更ナカリキ。

(三〇)藤原氏ノ權力ヲ得シ原因及ビ四分家ヲ問フ 抑藤原氏ノ勢力ヲ朝廷ニ得シハ累代ノ勳功ト皇室ノ外戚タリシトニ因レリ、初メ鎌足ノ子不比等ハ持統、

文武、元明、元正ノ四朝ニ歷事シテ大臣トナリ、律令ヲ撰定シテ大功アリシノミナラス、其ノ長女宮子ハ文武天皇ノ夫人トナリテ聖武天皇ヲ生ミ、其ノ二女光明子ハ聖武帝ノ皇后トナリテ孝謙帝ヲ生ミ奉リシカバ、藤氏ハ常ニ外戚タルノ親ニ憑レリ、而シテ不比等ノ四子ハ分レテ四家トナリ、即チ武智磨ハ南家、房前ハ北家、宇合ハ式家、麻呂ハ京家ト稱シキ、就中北家最モ盛ニシテ世ニ閑院大臣ト稱スル冬嗣ノ如キ亦北家ヨリ出デ、嵯峨、淳和、仁明ノ朝ニ權勢ヲ擅シ、冬嗣ノ子良房ハ文德ノ朝ニ太政大臣トナリ、人臣ノ榮ヲ極メタリ。

(三一)藤氏攝關ノ始メヲ問フ 文德天皇、早ク崩ジ給ヒケルニ、藤原良房、帝ノ長子惟喬親王ヲ措キ、當時幼冲ノ皇太子(良房ノ女ノ生ム所)ヲ立ツ是ヲ清和天皇トス而シテ良房萬機ノ政ヲ攝行セリ、攝政此ニ始マル、良房薨ジテ其ノ子基經太政大臣ニ陞リシガ、天皇、位ヲ陽成天皇ニ讓リ給フニ及ビ、基經、帝御病アリテ人君ノ德ナシトテ之ヲ廢シ、光孝天皇ヲ迎ヘ立テヌ、天皇、基經ガ定策ノ功ヲ

思ボシ、之ニ萬機アツカリテヲ關白サシメ給フ、關白ノ稱此ニ始マル、是ヨリ藤原氏、幼帝ノ御時ニハ攝政トナリ、御年長ジサセ給ヘバ關白トナルコト累世ノ例トナリヌ。

(三二)菅原道真拔擢ノ叡旨及ビ其ノ貶謫ノ顛末ヲ問フ 宇多天皇ガ菅原道真ヲ儒林ヨリ拔擢シテ之ニ重任ヲ委子給ヒシハ、全ク藤原氏ノ權力ヲ抑ヘントテノ叡旨ニ出デタリ、此ヨリ先キ帝尙基經ヲシテ萬機ヲ關白セシメ給ヒシモ、基經薨ジテ後ハ復關白ヲ置カズ、而シテ御讓位ノ後ハ基經ノ子時平ヲ左大臣トシ、道真ヲ右大臣トシテ相對角シ政務ヲ參決セシメ給ヘリ、時ニ醍醐帝尙春秋鼎盛ニマシノシカバ、寬平法皇(宇多帝讓位ノ後ノ御號)萬機ニツキ帝ニ訓謨ヲ授ケラレ、遂ニ特旨ヲモテ、道真一人ニ萬機ヲ奉決セヨト諭シ給ヒシカド、道真固辭シテ受ケズ、然ルニ時平陰カニ此ノ由ヲ漏レ聞キテ心平カナラズ、乃チ大納言源光、藏人頭藤原菅根ト相結ビテ道真廢立ヲ謀ルト誣奏セシカバ、帝大イニ怒リ道真ヲ太宰權

師ニ貶シ、其ノ子二十三人ヲ流罪ニ處シ給フ、法皇、之ヲ救ハントシテ菅根等ヲ爲ニ妨ゲラレ、事ヲ果シ給ハザリキ、時ニ延喜元年即チ紀元千五百六十一年ナリ。

(三三)延喜ノ治績ヲ問フ 醍醐天皇、過チテ道真ヲ貶シ給ヒシカド、天資英明ニシテ意ヲ政治ニ留メ、能ク諫言ヲ容レ給ヒキ、又常ニ百姓ノ疾苦ヲ憐ミ給ヒ、嘗テ寒夜ニ御衣ヲ脱ギテ下民ノ情ヲ恕察シ給フニ至レリ、帝在位日久シク天下太平ヲ極メシカバ、世ニ延喜ノ聖帝ト稱シ奉リヌ。

(三四)三善清行ガ封事ノ要領及ビ朝廷ノ採否ヲ問フ 醍醐ノ朝、三善清行上書シテ時政ノ失ヲ陳ベケルガ、其ノ大要ハ朝廷ノ佛事及ビ奢侈ノ爲ニ小民ノ衰微セシ事、地方ノ豪族、衛府ノ官人トナリ、宿衛ヲ勤メズシテ郷里ニ歸リ、官名ヲ以テ小民ヲ壓抑シ、國司ノ統轄ニ順ハザル事等ナリ、其ノ封事ノ一部ヲ納レ、屢々免稅ノ詔、奢侈ヲ禁ズルノ勅ヲ下シ給ヒシカド、豪族ノ專橫ヲ奈何ト

モシ給ハザリキ。

(三五)當時ニ於ケル都鄙ノ状態ヲ問フ 帝都ニハ華奢ノ風次第ニ長ジテ一般ニ遊嬉歡樂ニ耽リ、朝廷ニハ藤原氏政權ヲ弄シテ名爵ヲ私門ニ籠ムルコトヲノミ圖リ、武備ハ日ニ弛ビ、賦歛ハ益々重ク、大寶令ノ既ニ紊レシヨリ、班田ノ制復行ハレズシテ、豪族ハ土地ノ兼併ヲ恣ニシ、貧富ノ懸隔漸ク甚シクナリヌ、斯クテ地方ノ豪族ハ、名ヲ在朝ノ權門勢家ニ藉リテ其ノ所有地ノ賦租ヲ免レンコトヲ謀リ、在朝ノ顯貴ハ之ヲ利用シテ奢侈ニ費ス財途ヲ得ルニ充ツ、而シテ此等ノ土地ヲ莊園(國司ノ支配ヲ受ケズ、朝廷ニ納稅セザル私領ノ稱ナリ)ト稱シ、其ノ所有主ヲ領家ト云ヒ、其ノ租賦ヲ司ル者ヲ莊司ト云ヘリ、此等莊園ノ増加スルニ從ヒ、國司ノ權力ハ次第ニ衰ヘテ竟ニハ其ノ任地ニモ赴カズ、單ニ目代ヲ遣ハシ之ヲ治メシムルニ至ル、情勢此クノ如クナリケレバ、盜賊ノ横行益々甚シク、人民其ノ堵ニ安ンゼズシテ私ニ生命、財産ノ保護者ヲ需ムルニ至リヌ、他

日源平二氏ノ起ルハ全ク此ニ胚胎セリ。

(三六)皇族賜姓ノ濫觴及ビ其ノ末葉ヲ問フ 皇族姓ヲ賜ハリテ臣下ニ列セシハ桓武ノ朝ニ始マリテ、在原、良峰等アリシガ、桓武ノ皇孫高望王女カモ子ニ至リ更ニ平姓ヲ賜ハリテ上總介ニ任ゼラレシヨリ、其ノ子孫多ク東國ニ土着シテ坂東ノ八平氏トナリヌ、北條、三浦、千葉、畠山等ハ皆其ノ後ナリ、又源姓ハ嵯峨帝ノ諸皇子ニ賜ヒシニ始マリテ、爾來皇族ノ賜姓ニハ必ず源姓ト定リシヨリ、嵯峨源氏、清和源氏、宇多源氏、村上源氏等ノ別アリキ、就中最モ著レシハ清和源氏ニシテ、コハ六孫王經基ノ末葉ナリトス、而シテ其ノ子孫諸國ニ分レシカバ、攝津源氏、甲斐源氏、常陸源氏等ノ稱アルニ至リヌ。

(三七)天慶ノ亂ノ顛末ヲ問フ 平將門ハ鎮守府將軍良將ノ子ナリ、曾テ攝政藤原忠平ニ仕ヘ、檢非違使タランコトヲ求メシニ省セラレズ、大イニ憤リテ下總ニ赴キ徒ヲ集メテ劫掠ヲ事トセリ、朱雀天皇ノ承平五年(紀元一五九五年)將門遂ニ其

ノ伯父常陸大掾國香ヲ攻殺シ、又叔父下總介良兼ヲ擊破シ天慶二年(紀元一五九九年)下總ニ據リテ公然叛旗ヲ掲ケ、遂ニ上野、下野、上總、武藏、相模ヲ侵略シテ僞宮ヲ下總ノ猿島ニ建テ、百官ヲ置キテ、自ラ新皇ト稱セリ、此ノ時、西國ニハ伊豫掾タリシ藤原純友、海賊ヲ招キ集メ、播磨、備前ノ介ヲ害シ、又讃岐、伊豫ヲ侵略シテ將門ニ呼應シケレバ、由々シキ天下ノ大事トハナリヌ、是ニ於テ朝廷參議藤原忠文ヲ征東大將軍トシテ將門ヲ討セシメラル、然ルニ忠文ノ着ニ先子、國香ノ子貞盛、下野押領使藤原秀郷ト共ニ將門ヲ誅セシカバ、忠文ハ途ヨリ歸リヌ、純友ハ其ノ翌年、山陽道追捕使小野好古、太宰權少貳源經基(即チ六基)ノ爲ニ誅セラレ、東西ノ亂一時ニ平定セリ、是ヲ天慶ノ亂ト云フ。

(三八)天曆ノ治蹟中著明ナル事實ヲ問フ 第六十二代村上天皇ハ精ヲ勵マシテ治ヲ圖リ給ヒシガ、曾テ一老吏ヲ召シテ、方今ノ政治ハ延喜ノ朝ト得失奈何ト問ヒ給ヒシニ、老吏答ヘテ卑賤ノ身何チカ存ジ候ハン、唯彼ノ世ニ異ナリト

覺ユルハ主殿寮ヨリ燒燭ヲ進ムルコト多キト、率分堂ニ草ヲ生ズルトニ候フト申シケル抑主殿寮ハ殿中ノ諸務ヲ掌ル所率分堂ハ大藏省ノ收納ヲ分チ貯フル所ナリ、蓋シ老吏ノ言ハ朝廷事多キト、用度ノ乏シキトヲ諷スルニ在リキ、帝大イニ愧ヂ給ヒ是ヨリ益々政治ヲ勤メ給ヒシカバ、後世政治ヲ言フ者必ズ延喜、天曆ヲ稱首トセリ、天曆ハ即チ村上ノ朝ノ年號ナリ。

(三九)安和ノ變及ビ其ノ原因ヲ問フ 第六十三代冷泉天皇ノ安和三年(紀元一六二九年)ニ、中務少輔橘繁延等、先帝ノ皇子爲平親王ヲ奉ジテ關東ニ奔リ、兵ヲ起サシメテ謀リシガ、事露レテ繁延等ハ流罪ニ處セラレ、親王ノ妃ノ父左大臣源高明モ連坐シテ大宰權帥ニ貶セラレ、右大臣藤原師尹タケノ代ツテ左大臣トナリヌ、是ヲ安和ノ變ト云フ、此ノ變ハ實ニ師尹ガ左大臣タランコトヲ希望セシニ起因セシトゾ。

(四〇)藤原氏同族爭權ノ狀ヲ問フ 第六十四代圓融天皇ノ朝、藤原兼通、豫

テ得タル皇太后ノ文書ヲ天皇ニ上リ、強ヒテ關白職ニ陞リシガ、弟兼家ト權ヲ爭ヒ、從兄賴忠ニ職ヲ傳ヘント欲ス、然ルニ當時大臣ニ缺員ナカリシヲ以テ、左大臣源兼明(源姓ヲ賜ハリテ臣下ニ列シタル皇子)ヲ更ニ二品親王トナシ、危篤ノ病ヲカメテ參朝シ、最後ノ除目ヲ行ハントテ賴忠ヲ關白トシ、兼家ヲ左遷シテ薨ジヌ、次ノ帝花山天皇ハ、聰明多藝ノ君ニシテ、外舅藤原義懷(カキ)之ヲ輔佐シ奉リ、紀綱漸ク張ラントセリ、時ニ兼家右大臣タリシガ、帝ヲ廢シテ己ガ姉妹ノ所生ヲ立テント欲シ、折リシモ帝ガ最愛ノ女御ヲ亡ヒテ悲慟シ給フヲ機トシ、兼家ノ子道兼、帝ヲ騙シテ遜位落飾セシメ奉リヌ、兼家乃チ一條天皇ヲ立テ、攝政トナリ、奢侈ヲ窮極セリ、兼家薨スルニ及ヒ、道兼父ニ功アリシヲ以テ心私ニ關白ヲ期セシニ、兄道隆職ヲ襲ギシカバ、道兼不平ニ堪ヘズ、父ノ喪中ニ在リテ毫モ戚容ナカリキ、實ニ淺マシキ限ト謂フベシ。

(四一) 武門ノ濫觴及ビ源氏ガ藤原氏ノ爪牙タリシ事實ヲ問フ 天慶ノ亂後ハ

京師ニ盜賊横行シテ禁中、衛府ニスヲ亂入シ、物ヲ掠メ人ヲ殺シナドセシニ、六衛モ追捕使モ之ヲ鎮定スル能ハザリシ程ナレバ、各地方ニモ盜賊繁カリシコト言フヲ俟タズ、時ニ經基ノ子滿仲、滿沖ノ子賴光、其ノ子賴信及ビ秀郷ノ子千晴等皆武術ヲ精研シテ剛勇ノ名世ニ高ク、其ノ家ノ子郎黨ニモ亦驍勇ノ士多カリケレバ藤原氏ハ毎ニ此等ノ人ノ力ヲ藉リテ世ノ亂ヲ靖メタリ、是リ内外ノ文武官ノ外ニ所謂武門ナル者ノ起レル濫觴ナケル、加之、源氏ハ毎ニ藤原氏ノ爪牙トナリテ、或ハ其ノ非行ヲ遂グルヲ輔ケ、或ハ藤原氏同族傾排ノ用ニ役セラレシ事實少カラズ、例ヘバ滿仲等ガ藤原氏ノ密囑ヲ受ケテ源高明ヲ搆陷セント云ヒ傳ヘラル、ガ如キ、花山天皇遜位ノ際、賴信其ノ道途ヲ警固シテ萬一ノ變ニ備ヘタリト云ヘルガ如キ、皆藤原氏ノ爪牙タリシ事實ヲ徵スルニ足レリ。

(四二) 藤原道長專横ノ狀ヲ問フ 道長、一條、三條、後一條ノ朝ニ立チテ樞機ヲ掌握スルコト三十四年、其ノ三女(彰子、研子、威子)ハ三代ノ后トナリ、其ノ二子(賴通)

通教)ハ三公ニ列シ、其ノ身ハ三帝ノ外祖父トシテ天下意ノ如クナラザルモノナク、廷臣皆其ノ權勢ニ阿附シテ唯其ノ意ニ忤ハンコトヲ恐ル、嘗テ歌ヲ詠ジテ曰ク、此世をばわが世とぞ思ふ望月の、かけたることもなしと思へバト、其ノ得意ノ狀想フベシ、又晚年法成寺ヲ建ツルニ際シ、諸國司ニ令シテ曰ク、寧ロ公務ヲ怠ルトモ此ノ役ヲ怠ルベカラズト、斯ク官人ヲ使役スルニ公私ヲ分タザリシハ眞ニ驕擅ノ極度ト云フベシ。

(四三)左ノ人々ノ著明ナル事蹟ヲ問フ。

- 甲 藤原百川
- 乙 僧 最澄
- 丙 僧 空海
- 丁 參議 篁
- 戊 菅 三品
- 己 後江相公
- 庚 巨勢金岡

(甲)藤原百川ハ光仁ノ朝參議ニ任ジ、忠誠比ナク、深ク帝ノ信任ヲ受ケタリ、帝、皇太子ヲ廢シ給フニ當リ、百川請ヒテ山部親王ヲ立テントス、時ニ衆議紛々タリシガ、百川固ク執ツテ勸カズ、帝起チテ内ニ入り給ヒシニ、百川聲

ヲ勵マシテ曰ク、聖斷ヲ承ケザレバ臣肯テ退カズト、殿前ニ立ツコト四十餘日、帝其ノ誠悃ニ感ジテ遂ニ請フ所ヲ許シ給ヒヌ、百川乃チ親王ヲ迎へ、立テ、皇太子トナス、太子尋イデ位ニ即キ給フ、桓武帝是ナリ。

(乙)最澄ハ近江ノ人ニシテ聰明絶倫、十二歳ノ時僧トナリ、桓武帝ノ延暦七年ニ根本中堂ヲ比叡山ニ創建シ、尋イデ入唐シテ天台山ニ登リ、教義ヲ道邃ニ學ビ、歸朝ノ後、天台宗ヲ弘ム、清和ノ朝ニ至リ、傳教大師ノ謚號ヲ贈ラル。

(丙)空海ハ讃岐ノ人ナリ、入唐シテ眞言ノ奧義ヲ慧果ニ學ビ、歸朝ノ後、嵯峨帝ノ弘仁七年、紀州ノ高野山ニ金剛峰寺ヲ創立シ、眞言宗ヲ弘ム、いろは歌ハ此ノ寺建立ノ際作レル所ナリト云ヒ傳フ、空海博學ニシテ特ニ書ヲ善クシ、又諸國ヲ巡歴シテ布教ノ旁民利ヲ興スコトヲ務メ、到ル處ニ其ノ靈跡多シ、空海又本地垂跡ノ説ヲ大成ス、醍醐ノ朝弘法大師ノ謚號ヲ贈ラル。

(丁)參議篁姓ハ小野、淳和ノ朝、清原夏野等ト令義解ヲ撰輯ス、仁明ノ朝、大使藤原常嗣ニ隨ヒ唐ニ使スルニ際シ、常嗣ノ乗レル船毀損シタリトテ、篁ノ船ニ換ヘントシケレバ、篁憤恚シテ病ヲ稱シ復船ニ乗ラズ、西道謠ヲ作りテ遣唐ノ事ヲ諷刺ス、其ノ言忌諱ニ觸レシカバ、帝怒リ篁ヲ免ジテ庶人トシ、隱岐ニ竄シ給ヒシニ、篁途ニアリテ謫行吟七十韻ヲ作ル時人之ヲ傳誦ス、數年ノ後召還サレテ本位ニ復セリ、嵯峨帝曾テ河陽館ニ幸シ、詩一聯ヲ賦シテ云フ、閉閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船、ト以テ篁ニ示シ給ヒシニ、篁曰ク、聖製甚ダ佳、然レドモ遙ヲ改メテ空トナサバ更ニ佳ナラント、帝愕イテ宣フ、是白樂天ノ句ニシテ遙ハ本、空ニ作レリ、朕聊カ以テ卿ヲ試ミルノミ、卿ノ詩情ハ乃チ樂天ト相同ジキカト、時ニ白氏ノ詩集ハ唯御府ニ藏セルノミニテ人未ダ之ヲ見ルヲ得ズ、故ヲ以テ大イニ帝ヲ稱賛ヲ得タリキ。

(戊)菅三品ハ即チ菅原文時ナリ、文時、村上ノ朝ニ文章博士トナリ、封事ヲ上リテ時政ノ失ヲ陳ベケルガ、其ノ言極メテ剴切ナリキ、文時詞藻富贍ナルコト一世ニ比ナク、帝嘗テ冷泉院ニ幸シ文人ヲ召シテ花光水上浮ノ題ヲ賜ヒシニ、文時之ガ序ヲ作り、文中ニ誰謂水無心、濃艶臨焉波變色、誰謂花不語、輕漾激焉影動唇ト時人以テ絶妙トナセリ、文時、天元四年ニ從三位ニ叙セラル、故ニ世之ヲ菅三品ト稱ス。

(己)後江相公トハ江相公即チ大江音人ニ對シテ朝綱ヲ稱スルノ號ナリ、朝綱、詞藻典麗ニシテ夙ニ文章生ニ舉ゲラレ、村上ノ朝ニ敕ヲ奉シテ新國史及ビ坤元錄ヲ撰ス、曾テ渤海使裴璆ヲ餞スル詩序ニ、前途程遠シ思チ雁山ノ暮雪ニ馳ス、後會期遙カナリ纓ヲ鴻臚ノ曉淚ニ霑スト、璆大イニ之ヲ歎稱セリ。

(庚)巨勢金岡ハ醍醐ノ朝、勅ヲ奉シテ紫宸殿ノ賢聖障子ヲ畫キタル名手ナリ、又其ノ畫ケル馬夜々出デ、田圃ヲ荒ラシタリト云フ怪談サヘアリキ、子孫相繼ギテ家ヲ成シ、後世日本畫ノ宗タリ。

(四四)平安朝ノ文學發達ヲ問フ 平安朝ノ初ニハ、大學ヲ獎勵セシガ上ニ、私學ノ設置モ亦多クシテ、和氣氏ノ弘文院、藤原冬嗣ノ勸學院、僧空海ノ綜藝種智院、橘氏ノ學館院、在原氏ノ獎學院、恆貞親王ノ淳和院、菅原、大江二氏ノ文章院等アリキ、何レモ漢學ヲ講究セシカバ、漢文ノ發達極メテ著シク、特ニ嵯峨、仁明ノ二帝ハ漢學ニ絶レサセ給ヒ、兼明、具平ノ二親王及ビ有智子内親王ノ如キハ、最モ詩賦ニ長ゼラル、其ノ他清原夏野、小野篁、都良香、紀長谷雄等何レモ漢學ニ精シク且詩文ヲ善クセリ、經國集、性靈集、菅家文集等ハ即チ其ノ詩文ヲ輯メタル者ナリ、斯ク延喜以前ニハ漢學極メテ盛ナリシガ、菅原道真ノ建議ニ因リテ遣唐使ヲ廢セラレシヨリ、留學生自ラ止ミテ漢學モ次第ニ衰ヘ行キ、此ヨリ先キ假名ノ創作アリテ、自在ニ國史ヲ綴ルコトヲ得ルニ至リシヨリ、國文隨ツテ漸ク發達シ、伊勢物語(在原業平ノ作ル所)竹取物語等ノ假字文世ニ現ル、ニ至リヌ、尋イデ一條帝ノ朝ニ至リテハ、有名ナル文學者陸續輩出シ、皇后ノ

侍女清少納言ハ枕草紙ヲ書キ、中宮ノ侍女紫式部ハ源氏物語ヲ作り、共ニ和文ノ双壁ト稱セララル、又和歌モ平安朝ニ至リテ益々發達シ、在原業平、小野小町ヲ初メトシテ延喜ノ朝ニハ紀貫之、凡河内躬恒特ニ和歌ニ絶レ、勅ヲ奉ジテ古今和歌集ヲ撰シ、就中貫之ノ草セル土佐日記ハ和學者ノ宗トスル所ナリ、尋イデ源順等ノ撰ベル後撰集、藤原公任ノ撰ベル拾遺集出デ、之ニ古今集ヲ合セテ三代集ト稱シキ。

(四五)平安時代ノ家屋構造及ビ衣装ヲ問フ 當時顯貴ノ第宅ハ屋ヲ檜皮ニテ葺キ、寢殿ヲ南面ニ構ヘ、其ノ左右ト後トニ對屋ヲ設ケ、各々長廊ヲ以テ之ヲ聯ネ、池ヲ掘リ島ヲ設ケ、池ノ畔ニ釣殿、泉殿ノ設アリ、庭前ニハ春花秋草ヲ植エテ之ヲ前栽ト稱シ、家ノ周圍ニハ築地ツイヂヲ繞ラシ、大門ノ内ニ侍所アリ、中門アリキ、而シテ室内ノ裝飾ハ最モ華美ヲ窮メ、國品ノミナラズ唐産ノ器物ヲ購ヒテ新奇ヲ競フニ至ル、衣服化粧ハ婦人最モ著シクシテ、白粉ヲツケ臙脂ベニヲ頬邊ニヌリ、

鐵漿モテ齒ヲ染メ、黛^{ヤノミ}モテ眉ヲ點シ、夏冬共ニ十二一重或ハ五襲^{イツカサネ}、七襲ナド云ヒテ單ノ衣ヲ幾枚トナク重襲シ、紅ノ袴ノ上ニ裳ヲ引キ纏ヘリ、男ハ鷹狩ニ着タル便服ヲ常用トシテ之ヲ狩衣ト稱シ、括リ緒ノ袴ヲ穿チテ常ニ烏帽ヲ被レリ、直衣^{ナホシ}、水干^{スミカン}、直垂^{ヒタレ}等ハ皆此ノ頃ヨリ始レル服ナルベシ。

(四六)同上音樂遊戲ヲ問フ 音樂ハ唐朝及ビ印度ヨリ我ニ傳ハリテ一層發達ヲ致シ、仁明、一條ノ二帝ノ如キハ特ニ音律ニ絶レサセ給ヒ、當時今様、朗詠ノ謳ヒモノ盛ニ行ハレシガ、一條帝、神樂東遊ヲ定メテ祭祀ニ用ヒ、催馬樂、風俗歌ヲ謙樂ニ用ヒシメラレタリ、舞樂モ夙ニ行ハレタリシガ、猿樂、由樂等モ亦此ノ時代ヨリ起リヌ、其ノ他遊戲ニハ、貝合、繪合、双六、圍碁、蹴鞠、鷹狩、競馬、賭弓^{カケユミ}等行ハレリキ。

(四七)同上繪畫、詩繪、彫刻等ヲ問フ 繪畫ニハ淳和帝ノ頃ニ百濟河成アリ、宇多帝ノ頃ニ巨勢金岡アリ、其ノ後藤原爲氏、基光等出デ、大和畫風ヲ起シタリ、其ノ他詩繪、平文、螺鈿等ノ技術愈々進歩シテ精巧ヲ極メ、佛像ノ彫刻亦盛ニシテ、定朝最モ名手ト稱セラル。

(四八)刀伊ノ賊來寇ノ始末ヲ問フ 天慶ノ亂後七十餘年間ハ海内無事ニシテ干戈ヲ動かスコトナカリシガ、後一條帝ノ寛仁三年^(紀元一六七九年)ニ刀伊^(古ノ肅慎)ノ賊ノ入寇アリキ、此ノ時賊ハ先ツ對馬ヲ侵シ、轉ジテ壹岐ヲ襲ヒ、其ノ國守ヲ殺シ、遂ニ進ミテ筑前ニ迫リ、我が國民ノ殺サレ或ハ虜ニセラレシ者頗ル多カリキ、時ニ藤原隆家太宰權帥タリシガ、前ノ大監大藏種材^{タチキ}等ヲ遣ハシテ之ヲ擊破ラシメタリ、隆家之ニ因リテ威望ヲ増シ、子孫肥後ニ土着シテ菊池氏トナリ、種材ノ後ハ筑前ニ居テ原田、秋月氏トナリヌ。

(四九)平忠常ノ叛亂始末ヲ問フ 後一條帝ノ長元元年^(紀元一六八年)上總介平忠常、下總ニ據リテ叛シ安房守惟忠ヲ殺ス、甲斐守源賴信勅ヲ奉ジテ之ヲ討ス、賴信諸軍ノ來會ヲモ待タズ、子賴義ト共ニ見兵ヲ帥キテ常陸ノ鹿島ニ至リシニ、忠常ガ

城ハ海ヲ隔テ、下總ノ海岸ニ在リ、要害甚ダ堅固ナリキ、賴信預テ淺瀬アルコトヲ知リ、直ニ海ヲ絶リテ攻入リシカバ、忠常狼狽シテ忽チ降リヌ。

(五〇)前九後三ノ役ノ頼末ヲ問フ 第七十代後冷泉天皇ノ永承七年(紀元一七二一年)陸奥ノ俘囚安倍賴時反ス、安倍氏世々陸奥ニ居リ俘囚ノ長タリシガ、賴時ニ至リテ勢威益熾ニ、衣川ノ地ニ據リテ貢賦ヲ輸サズ、國司之ヲ攻メテ克ツコト能ハザリキ、是ニ於テ朝議、源賴義ヲ陸奥守兼鎮守府將軍ニ任ジテ賴時ヲ討ゼシム、賴時流矢ニ中リテ死セシガ、其ノ子貞任慄悍ニシテ善ク戰ヒ、官軍屢利ヲ失フ、賴義ノ子義家驍武絶倫騎射神ノ如ク向フ所前ナカリシガ、敵軍強盛ナルヲ以テ雌雄久シク決セザリキ、然ルニ出羽ノ俘囚長清原光賴ノ弟武則論ニ從ヒ兵一萬ヲ率キテ來援セシカバ、共ニ力ヲ協セテ厨川ノ柵ヲ攻メ、遂ニ之ヲ陷レテ貞任ヲ斬リ、其ノ弟宗任ヲ降シテ邊境初メテ平ギヌ、此ノ戰九年ニ互リタルヲ以テ前九年ノ役ト云フ、武則功ヲ以テ鎮守府將軍ニ拜セラレ、孫貞衡ニ至リ、安倍氏

ノ故地ヲ領シテ勢頗ル盛ナリシガ、堀河天皇ノ寛治元年(紀元一七四七年)ニ至リ、異母弟家衡、兄ニ背キテ兵ヲ構ウ、叔父武衡又家衡ヲ助ケテ金澤柵ニ據リ、奥羽再ビ動亂ヲ起シヌ、時ニ義家、鎮守府將軍タリシガ、貞衡ヲ援ケテ家衡武衡ヲ攻メシニ利アラズ、然ルニ義家ノ弟義光(新羅三郎ト稱ス)京師ヨリ來會シ、藤原清衡、吉彦秀武又來降リシカバ、義家力ヲ得テ遂ニ金澤柵ヲ陷レ、家衡、武衡ヲ誅シテ奥羽悉ク平ギヌ、此ノ戰三年ニ互リシカバ後三年ノ役ト稱ス。

(五一)源氏東國ノ人心ヲ得シ原因及ビ大名小名ノ起リヲ問フ 源氏ハ、賴信將冑ヲ以テ忠常ヲ討平シ、威名ヲ東國ニ振ヒシヨリ賴義之ニ次ギテ益々人心ヲ收メ、殊ニ後三ノ役、朝議以テ私鬪ナリトシテ將士ノ功ヲ賞セザリシニ、義家私賞ヲ抛チテ其ノ勞ニ酬イシ等ノ事ヨリ、東國ノ武士益々源氏ノ恩威ニ服シ、爭ヒテ其ノ家人タランコトヲ希フニ至リヌ、是ニ於テ地方ニハ豪族武人ノ土地ヲ有シ、又家ノ子郎黨トテ多クノ族類臣隸ヲ擁スル者所在ニ起リヌ、其ノ領地ノ廣狹、族

黨ノ多寡ニヨリテ大名小名ノ稱ヲ分チ、而シテ源平二氏最モ勢力ヲ有シキ。

(五二)後三條帝ノ改革及ビ藤原氏衰微ノ始メヲ問フ 後三條天皇ノ御施政ハ

第一ニ藤原氏ノ權力ヲ抑ヘ、弊政ノ改革ヲ圖ラセ給フニ在リキ、因リテ源師房、

大江匡房等ヲ登用シ、記録所ヲ太政官ノ中ニ設ケ、莊園ニ關スル訴訟ヲ親裁シ、

寛徳二年(後朱雀帝ノ晩年)以後ノ新莊園及ビ證券不明ナルモノハ悉ク之ヲ沒收シ給ヘリ、

是ニ於テ藏人所ノ政務ハ復記録所ニ移リヌ、當時莊園諸國ニ増加シテ、國司ノ

支配スベキ土地僅ニ其ノ百分ノ一二過ギザリキト云フ、又國司ノ重任ヲ許スノ

風久シク行ハレシガ、帝之ヲ嚴禁セラル、其ノ他銳意果斷ノ政治ヲ施シ給ヒケ

レバ、關白藤原頼通及ビ弟教通ノ如キ、唯員ニ備ハルノミニテ更ニ權力ヲ用フ

ルニ由ナク、藤氏ノ威頓ニ地ニ墜チタリ。

(五三)院政ノ起元及ビ其ノ經過ヲ問フ 白河天皇(後三條帝ノ御子)剛健果斷ニシテ萬

機ヲ親裁シ給ヒ、相門手ヲ斂メニギ、帝、位ヲ堀河天皇ニ讓リ給ヒテ後法皇ト

稱シテ閑院ノ御所ニ院司ヲ置キ、別當、執事等ノ職ヲ設ケ、北面ノ武士ヲ置キ

テ院ノ警衛ニ備ヘ、政ヲ院中ニ聽キ給フコト堀河、鳥羽、崇徳ノ三代四十三年

ノ久シキニ及ビヌ、其ノ命令ヲ院宣ト稱シ、違フ者ハ違勅ヲ以テ論セラレシカ

バ、其ノ勢詔勅ヨリモ重クナリヌ、之ヲ院政ノ初メトシ、尋イデ鳥羽上皇亦院

政ヲ聽キ給フコト崇徳、近衛ノ二朝二十八年ノ間ニ彌リヌ、是ニ於テ政令ニ途

ニ出デ紀綱益々紊レ、遂ニ政權ノ武門ニ歸スル基トハナリヌ。

(五四)當時僧徒暴横ノ狀ヲ問フ 當時、諸國ノ社寺ニハ數多ノ私領ヲ有スル

モノ多ク、甲冑ヲ備ヘ兵仗ヲ蓄ヘ、強暴ナル舉動ヲ爲シ、モノモアリキ、就中

延曆寺、興福寺ノ如キハ其ノ尤モナル者ニシテ、賦役ヲ逋レンタメ圓顯縮衣ノ

姿トナレル奸徒等、多ク此ノ二寺ニ潛ミ、毎ニ騷亂ヲ起シケルガ、畢ニハ國

司ノ命ニモ攝關ノ諭ニモ服セズシテ、僧徒ノ間ニ不滿ノ事アレバ、叡山ハ日吉

ノ神輿ヲ奉ジ、興福寺ハ春日ノ神木ヲ荷ヒ、神威ト兵力トヲ恃ミテ攝關ニ迫リ、

朝廷ニ嗷訴セリ、サレバ朝廷ニテモ甚ダ之ヲ困マレ、白河法皇ノ如キハ嘗テ、天下朕ノ意ノ如クナラザル者ハ雙六ノ采ト、鴨川ノ水ト、山法師トナリト歎シ給フニ至リヌ、山法師ハ即チ叡山ノ僧徒ナリ。

(五五)保元ノ亂ノ顛末ヲ問フ 崇徳天皇、父鳥羽法皇ノ諭ニ由リ遽ニ位ヲ皇太弟ニ傳ヘ給フ是ヲ近衛天皇トス、時ニ御年甫メテ三歳、御母ハ法皇ノ寵姫美福門院ナリ、此ノ時藤原忠通關白タリシガ、其ノ弟左大臣頼長(悪左府ト稱セラル)博學ニシテ政務ニ長ゼルヲ以テ父忠實深ク之ヲ愛シ、氏ノ長者トナシ、又法皇ニ請ヒテ太政官ノ文書ヲ内覽セシメキ、帝御歳十七ニシテ崩ジ給ヒシニ、崇徳上皇ハ、親ヲ重祚スルカ、或ハ其ノ皇子重仁親王位ヲ繼グベシト思ヒ給ヘリ、然ルニ美福門院、近衛帝ノ早世ハ崇徳ノ呪咀ニ出ヅル所ナラントシ、忠通ト共ニ法皇ニ勸メテ皇子雅仁ヲ立テシム是ヲ後白河天皇トス、崇徳上皇痛ク憤恚シ給フ、保元元年(紀元一〇八六年)鳥羽法皇崩ジ給ヒシニ際シ、上皇遂ニ素志ヲ果サントテ、頼長

ト謀リ、源爲義其ノ子爲朝、平忠正等ノ武人ヲ召シテ白河殿ニ據リ給フ、時ニ爲朝夜討ノ策ヲ獻ゼシカド、頼長ノ爲ニ沮止セラレキ、天皇亦爲義ノ子義朝、平清盛等ヲ召シ、義朝ノ策ヲ用ヒテ即夜、白河殿ヲ襲ハシム、爲義、爲朝善ク防ギシカド、軍遂ニ敗レ、上皇ハ薙髮シテ仁和寺ニ入り後、讃岐ニ遷サル、頼長ハ流矢ニ中リテ薨ジ、爲義、忠正等ハ出デ降リテ竟ニ殺サレヌ、之ヲ保元ノ亂ト云フ。

(五六)平治ノ亂ノ顛末ヲ問フ 後白河天皇、位ヲ二條天皇ニ讓リテ政ヲ院中ニ聽キ給フ、時ニ藤原信西(憲通)多才ニシテ吏務ニ長ゼルヲ以テ大イニ寵任ヲ受ケ朝政ヲ專ラニシ威權比ナカリキ、中納言藤原信賴、後白河上皇ニ寵アリ、近衛大將タランコトヲ求メシニ、信西ノ爲ニ沮止セラレ、深ク之ヲ銜ミキ、平清盛、姻ヲ信西ニ結ビテ勢威義朝ノ右ニ出デシカバ、義朝亦不平ニ堪ヘザリキ、是ニ於テ信賴、義朝相結ビ、平治元年(紀元一一〇九年)清盛熊野ニ詣シテ不在ナルニ乘ジ

俄カニ兵ヲ舉ゲ大内ヲ圍ミテ上皇ヲ幽シ、天皇ヲ黑戸御所ニ遷シ、信西ヲ殺シ、信賴自ラ大臣大將トナリ、義朝ヲ播磨守トス、清盛變ヲ聞キテ京師ニ還リ、密ニ天皇ヲ其ノ第二迎ヘ奉リ、其ノ子重盛等ト信賴、義朝ヲ討ツ、義朝軍敗レテ尾張ニ走リシガ、家人長田忠致ニ殺サレ、信賴ハ降リテ斬ラレヌ、之ヲ平治ノ亂ト云フ。

(五七)平氏專横ノ狀ヲ問フ 平治ノ亂後ハ清盛ノ勢威頓ニ熾ニナリ、累リニ官爵ヲ進メテ、六條天皇ノ仁和二年ニハ遂ニ從一位太政大臣ニ陞リヌ、特ニ高倉天皇立ツニ及ビテハ、其ノ女德子(即チ建禮門院)ヲ納レテ申宮トナシ、長子重盛ハ内大臣兼左近衛大將トナリ、次子宗盛ハ右近衛大將トナリ、其ノ他一族顯官ニ在ル者六十餘人、采邑海内ニ半バセリ、後白河上皇、平氏ノ專横ヲ厭ヒ給ヒシガ、法皇ノ寵臣藤原成親、僧西光等亦深ク平氏ヲ妬ミ、俊寛僧都(シ、カガネ)ノ鹿谷別莊ニ會シテ密ニ平氏ヲ亡ボサンコトヲ圖リキ、既ニシテ謀泄レ、清盛大イニ怒リ、

同謀ノ者ヲ捕ヘ、成親、俊寛等ヲ流シ、西光ヲ斬ニ處セリ、清盛怒リ猶止マズ、法皇ヲ幽シ奉ルカ或ハ遠國ニ遷シ奉ラントセシガ、重盛ノ切諫ニヨリテ事僅カニ止ムヲ得タリ、重盛天資忠亮ニシテ常ニ父ノ專横ヲ憂ヘ、事毎ニ諫争セシカバ、其ノ兇暴甚シキニ至ラザリキ、然ルニ治承四年重盛薨ズルニ及ビ、清盛兵ヲ率キテ福原ヨリ上リ關白藤原基房ヲ罷メ、太政大臣藤原師長ヲ流シ、法皇ノ近臣三十九人ノ官職ヲ奪ヒ、遂ニ法皇ヲ鳥羽殿ニ幽シ奉リキ、帝亦怏々トシテ樂マザリシガ、翌年位ヲ皇太子ニ讓リ給フ是ヲ安徳天皇トス、平氏ノ專横此ニ至ツテ極レリ、

(五八)治承ノ亂ヲ問フ 安徳天皇ノ治承四年、以仁王(後白河法皇ノ皇子)源賴政ノ勸メニ由リ兵ヲ起シテ平氏ヲ討ゼラル、賴政久シク平氏ノ專横ヲ惡ミ、又平宗盛ヲ怨ムコトアリシガ、以仁王ノ人望アルヲ以テ遂ニ勸メテ關東ノ源氏等及ビ興福園城二寺ノ僧兵ニ令旨ヲ下セリ、然ルニ機未ダ熟セズシテ謀早ク泄レ、清盛兵

ヲ發シテ王ヲ攻ム、賴政手兵千餘ヲ以テ王ヲ奉ジテ奈良ニ走ラントシ、途上宇治ノ平等院ニテ平軍ト戰ヒシガ、衆寡敵セズ賴政ハ自殺シ、王ハ流矢ニ中リテ薨ゼラル、之ヲ治承ノ亂ト云フ。

(五九)賴朝、義仲等ノ擧兵ヨリ平氏滅亡ニ至ル迄ノ概況ヲ問フ 賴政敗レタリト雖モ、此ノ時、以仁王ノ令旨ヲ賜ハリタル者尙多シ、即チ源賴朝ハ伊豆ニ起リ、源義仲ハ信濃ニ起レリ、賴朝ハ平治ノ亂ニ伊豆ニ流サレシガ、東國ハ源氏舊縁ノ地ニシテ其ノ家人多カリシカバ、此ニ至リテ賴朝ニ應ズル者多シ、義仲ハ爲義ノ孫ニシテ賴朝ノ從弟ナルガ、信濃ノ豪族ニ養ハレ、是ニ至リテ同ジク兵ヲ擧ゲ、越後路ヨリ攻メ上リヌ、賴朝ハ北條時政ノ助ニヨリテ先ヅ伊豆ノ目代ヲ襲ヒ殺シ、次イデ石橋山ニ戰ヒテ敗レシガ、更ニ兵ヲ集メテ平氏ノ討手ト黃瀬川ニ對陣シ、戰ハズシテ敵ヲ走ラシム、此ノ時弟義經(幼名牛若丸)陸奥ヨリ來會セリ、義仲ハ行ク々々平氏ノ討手ヲ破リテ悉ク北國ヲ服シ、更ニ平軍ヲ加賀、越

中ノ界ナル礪波山ニテ烈シク破リ、勢ニ乘ジテ近江ニ入り延曆寺ニ據リシニ、法皇夜潜カニ延曆寺ニ幸シ給フ、時ニ清盛既ニ薨ジテ宗盛京師ニ在リシガ大イニ怖レ、帝及ビ神器ヲ奉ジテ西海ニ走ル、義仲乃チ京師ニ入り、以仁王ノ子北陸宮ヲ立テントシテ成ラス、法皇遂ニ後鳥羽天皇ヲ踐祚セシメ給ヒシカバ、義仲憤恚シテ、天皇及ビ法皇ヲ幽シ奉リ、公卿ノ官爵ヲ削奪シ、自ラ院別當トナルナド頗ル暴横ヲ極メタリ、賴朝之ヲ聞キ、二弟範賴(備冠者ト稱ス)義經ヲシテ西上セシメ、義仲ヲ近江ノ粟津ニ破リテ之ヲ殺セリ、此ノ時、平氏ハ九州、南海ヲ從ヘ、攝津ノ須磨ニ據リケルガ、源氏ハ追討ノ院宣ヲ受ケ、義經間道ヨリ鴨越ノ嶮ヲ越エテ背後ヨリ敵ヲ襲ヒ、難ナク城ヲ陷レシカバ、宗盛等、安徳帝ヲ奉ジテ讃岐ノ屋島ニ逃レヌ、是ニ於テ範賴ハ兵ヲ豊後ニ進メ、義經ハ風波ヲ冒シテ阿波ニ渡リ、進ミテ屋島ヲ攻陷シ、亡グルヲ逐ヒテ平軍ヲ長門ノ壇浦ニ蹙メシカバ、清盛ノ後室二位局、帝ヲ抱キ奉リテ海中ニ沈ミ、平氏ノ一族概チ此ニ殲

キヌ、時ニ壽永四年即チ紀元千八百四十五年ナリ。

(六〇)左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ

甲 源賴光 乙 藤原實資 丙 大江匡房

(甲)源賴光人トナリ驍勇ニシテ射ヲ善クシ、圓融、華山、一條、三條、後一條ノ五朝ニ歴事シ、左馬權頭ニ任ジ内昇殿ヲ聽サル、而シテ其從者ニハ綱、季武、公時、貞道ノ四天王アリキ、賴光曾テ市原野ニ於テ鬼同丸ヲ射斃シ、又大賊酒顛童子ヲ大江山ニ勦平セシ談話ハ、人口ニ膾炙スル所ナリ。

(乙)御堂關白道長ノ威權隆赫ナルニ當リテヤ、廷臣皆之ニ媚附シ、敢テ其ノ意ニ忤フ者ナカリキ、獨リ藤原實資侃然色ヲ正シテ回避スル所ナシ、三條帝、女御城子ヲ冊シテ皇后ニ立テ給フヤ、廷臣皆其ノ道長ノ意ニ非ザルヲ以テ、冊立ノ日一人モ皇后宮ニ赴ク者ナク、悉ク中宮妍子(道長ノ女)ノ許ニ往キ、勅召ニスラ應ズル者ナカリシニ、實資適ク病アリシヲカメテ入内シテ朝曾ニ預リシ

カバ、帝深ク之ヲ徳トシ給ヘリ、其ノ權勢ニ屈セザリシコト率ネ此ノ類ナリ。

(丙)大江匡房ハ頓悟人ニ絶レ、四歳ニシテ始メテ書ヲ讀ミ、八歳ニシテ史漢ニ通ジ、十一歳ニシテ詩ヲ賦ス、世稱シテ神童ト爲セリ、後三條帝ノ東宮ニ在ラセ給フヤ、匡房之ガ侍講トナリ、帝位ニ即クニ及ビ、即日匡房ヲ擧ゲテ藏人ニ補シ給ヘリ、承曆中、高麗ヨリ國醫ヲ請ジケルガ、廷議其ノ無禮ナルヲ以テ遣ラズ、匡房ヲシテ報牒ヲ作ラシム、其ノ詞ニ云ヘルアリ、「双魚鳳池ノ浪ニ達シ難ク、扁鵲豈ニ鷄林ノ雲ニ入ランヤ」ト世傳ヘテ之ヲ稱ス、匡房太宰權帥兼大藏卿トナリ天永年中ニ薨ズ、著ス所江家次第第二十一卷アリ。

第三篇 鎌倉時代 幕府ノ創立ヨリ北條氏滅亡ニ至ル

(一)鎌倉幕府ノ創立ヲ問フ 安徳天皇ノ治承四年(紀元一一八四〇年)八月賴朝居テ鎌倉ニ定ムルヤ、先ヅ侍所ヲ置キ和田義盛ヲ別當トシテ、軍事及ビ警察ノ事ヲ掌ラ

シム、後更ニ政務ニ練達セル朝臣大江廣元、中原親能、三善康信等ヲ招キ、壽永三年(紀元一八四四年)公文所ヲ設ケ、廣元ヲ別當トシ、親能ヲ寄人トシテ政事ヲ掌ラシメ後ニ政所ト改稱セリ、又問注所ヲ置キ、康信ヲ執事トシテ訟獄ヲ聽カシム、是ヲ鎌倉幕府ノ創立トス。

(二)頼朝、義經ノ不和ヨリ藤原泰衡討滅ニ至ル迄ノ概蹟ヲ問フ 義經既ニ平氏ヲ討滅シテ後ハ其ノ威望頓ニ高ク、法皇亦之ヲ信任シテ檢非違使判官トナシ京師ヲ鎮護セシメ給ヒキ、然ルニ頼朝、義經ノ驕擅不遜ナルヲ嫉ミ、且ツ梶原景時ノ讒ヲ信ジ、義經ガ平氏ノ俘虜ヲ將テ鎌倉ニ入ラントセシ時卻ケテ面會ヲ聽サズ、義經京師ニ還リテ後、土佐坊昌俊ヲ遣ハシテ之ヲ襲ハシメシガ、昌俊却テ義經ノ爲ニ殺サル、是ニ於テ義經、源行家ト共ニ法皇ニ逼リテ頼朝追討ノ院宣ヲ受ク、頼朝大イニ怒リ、兵ヲ率キテ西上セシガ、義經等ノ出奔ヲ聞キ軍ヲ旋シ、更ニ北條時政ヲ京師ノ守護ニ定メ、法皇ニ逼リテ義經追討ノ宣旨ヲ請ヒヌ、義經ハ奥州ニ走リテ藤原秀衡ニ依リ、行家ハ後ニ和泉ニテ殺サル、頼朝、更ニ義經ヲ奥州ニ討ゼントシケルガ、時ニ秀衡病死シテ其子泰衡、鎌倉ヲ怖レ遂ニ義經ヲ襲ヒテ之ヲ殺シ、首ヲ鎌倉ニ送レリ、然ルニ頼朝尙軍ヲ興シテ泰衡ヲ討滅シ、陸奥ノ守護職、奥州奉行ヲ置キテ東北ノ鎮トナシヌ。

(三)大權鎌倉幕府ニ歸セシ原因ヲ問フ 初メ義經、行家ノ奔竄スルヤ、頼朝其ノ搜索ニ困シミケルガ、大江廣元ノ策ヲ用ヒ、諸國ノ國司、領家ノ外別ニ守護、地頭ヲ置キ、又常賦ノ外ニ段別五升ノ兵糧米ヲ課シテ軍用ニ備ヘ、守護、地頭ヲシテ之ヲ徵收セシメント請ヒ之ヲ允サル、乃チ家臣ヲ分遣シテ守護、地頭ニ任ジ、己之ヲ總管シテ日本總追捕使トナレリ、斯クテ守護ハ漸ク國司ノ職務ニ干涉シ、遂ニハ國司無用ニ屬シ、又領家ノ莊園ハ地頭ニ押領セラレ、天下ノ權全ク鎌倉幕府ニ歸スルニ至レリ。

(四)頼朝ノ功過ヲ問フ 頼朝巧ミニ朝權ヲ奪ヒタルヲ以テ世ノ歴史家之ヲ咎

ムル者多シ、然レドモ頼朝、時世ニ適當セル政府ヲ立テ天下泰平萬民安堵ナラシメタルノ功ハ昭々乎トシテ蔽フベカラズ、加之爾來暗黒騷亂ノ世トナリテモ、皇室ハ超然トシテ塵世ノ外ニ立チ、永ク神聖ヲ保チ給ヒシモ亦武政ノ一得ト云ハザルベカラズ。

(五)頼家襲職ヨリ源氏滅亡ニ至ル迄ノ概要ヲ記シ併セテ之ニ説ヲ附セヨ 頼朝、建久三年(紀元一八一八年)ヲ以テ征夷大將軍ニ任ゼラレ、正治元年ニ薨ジ、長子頼家職ヲ襲ギシガ、政務ハ總ベテ母政子(尼將軍ト稱セラレ)ト北條時政トノ手ニ出ツ、頼家妻父比企能員ト北條氏ヲ滅サントシテ成ラズ、伊豆ノ修禪寺ニ幽セラレ尋イデ殺サル、頼家ノ弟實朝、將軍職ヲ襲ギテ、從二位右大臣ニ累進シ、拜賀ノ禮ヲ鶴岡ノ祠ニ行フニ際シ、頼家ノ子公曉ノ爲ニ弑セラレ、三代三十五年ニシテ頼朝ノ後絶エタリ、斯ク源氏ノ早ク滅ビタルハ、北條時政、義時等ノ詐謀誦計ニ出デントハ云ヘ、抑又頼朝猜忌ノ心深クシテ、二弟義經、範頼ヲ殺シ、及ビ功臣上總介忠常ヲ誅スル等、自ラ羽翼ヲ殺ギ、家勢ヲ弱メタルノ致ス所ニ非ズンバアラズ。

(六)承久ノ亂ノ顛末ヲ問フ 實朝弑セラレテ後ハ、北條義時、攝政藤原道家ノ子頼經ヲ京師ヨリ迎ヘテ將軍トセリ、時ニ年僅カニ二歳、而シテ幕府ノ實權ハ全ク北條氏ノ手ニ在リ、時ニ後鳥羽上皇政ヲ院中ニ聽キ給ヒシガ、常ニ幕府ノ專横ヲ憤リテ朝權ノ回復ヲ圖ラント思ボシ、新ニ西面ノ武士ヲ増置シ、親ラ武技ヲ講ジ、或ハ刀劍ヲ鍛ヒテ大イニ士氣ヲ鼓舞シ給ヘリ、然ルニ義時益々專横ヲ極メテ院宣ニ違フコト屢ナリシガハ、愈々東征ノ志ヲ決シ給ヒヌ、承久三年(紀元一八一八年)順徳天皇、位ヲ仲恭天皇ニ讓リ給フ、是ニ於テ一時ニ三上皇アリ、後鳥羽上皇ヲ本院ト稱シ、土御門上皇ヲ中院ト稱シ、順徳上皇ヲ新院ト稱ス、本院新院主トシテ事ヲ謀リ給フ、此ノ歳五月遂ニ院宣ヲ下シテ義時ノ官爵ヲ削リ、兵ヲ五畿七道ニ徵シテ之ヲ討ゼシム、義時、其ノ子泰時及ヒ弟時房等ヲシテ大

兵ヲ率キテ西上セシム、官軍之ヲ宇治、勢多ニ防ギテ利アラズ、泰時遂ニ京師ニ入り、謀ニ與レル公卿六人ヲ斬リ、天皇ニ迫リテ位ヲ後堀河天皇ニ傳ヘシメ、本院ヲ隱岐ニ、中院ヲ土佐(後ニ阿波ニ)、新院ヲ佐渡ニ遷シ奉リ、又本院ノ二皇子ヲ流シ、公家武家ノ領地三千餘箇所ヲ沒收シテ、鎌倉ノ武士ニ分與セリ、之ヲ承久ノ亂ト云フ。

(七)兩六波羅府ノ起元ヲ問フ 承久ノ亂後、泰時、時房京師ニ留リテ府ヲ南北六波羅ニ開キ、鎌倉ト氣脈ヲ通ジテ近畿西國ノ事ヲ掌リ、併セテ朝廷ヲ牽制セリ、之ヲ兩六波羅府ノ起元トス。

(八)北條泰時、時頼ノ政治ヲ問フ 泰時執權トナリ、專ラ儉素ヲ務メ、清廉ヲ以テ政ヲ執リ、仁愛ヲ主トシテ民利ヲ興シ、十數年ノ間職ニ在リシガ、大小ノ政務總ベテ評定衆(泰時ノ置ク所)ノ合議ニヨリテ施行シ、敢テ自ラ恣ニセズ、夙ニ三善康連ト討議シテ貞永式目五十一條ヲ制定シ、以テ守護地頭ノ職權ヲ定メ、且

ツ以テ訟獄ヲ聽斷スルノ標準トナシキ、之ヲ武家法度ノ初メトス、泰時ノ子時氏、孫經時早ク死シ、經時ノ弟時頼嗣ギテ執權トナリシガ、當時政治稍衰ヘシヲ以テ、自ラ節儉ヲ行ヒ、大イニ百姓ヲ賑恤シ、又廉潔ノ士青砥藤綱ヲ登庸シテ引附衆トナシ、其ノ言ニ從ヒテ奸吏ヲ罰シ、使ヲ諸國ニ遣ハシテ民ノ疾苦ヲ問ハシメ、晩年ニハ自ラ行脚僧ニ扮シテ諸國ヲ巡察セシカバ、吏ハ其ノ職ニ稱ヒ、民ハ其ノ業ニ安ンゼリ、時頼最明寺ヲ營ミテ此ニ老セシヲ以テ世ニ最明寺殿ト稱ス。

(九)南北朝分立ノ遠因ヲ問フ 第八十九代後深草天皇、位ヲ皇弟龜山天皇ニ讓リ給フ、此ノ朝ニ北條時頼卒シ子時宗執權トナル、次ハ後宇多天皇、龜山天皇ノ御子ナリ、初メ後嵯峨上皇、深ク龜山天皇ノ英資アルヲ愛シ給ヒ、其ノ御子孫永ク皇位ヲ承ケ給フベキ由遺詔アリキ、然ルニ時宗ノ計ヒトシテ、後深草、龜山御兄弟ノ御子更ル々々立子給フベキニ定メヌ、後深草ノ御子孫ヲ持明院殿

ト云ヒ、龜山ノ御子孫ヲ大覺寺殿ト云フ、是北條氏ガ持明院流ノ御心ヲ取り置キ、他日京、鎌倉ニ事ノ生ゼン時ニ備ヘントテノ深謀ニ出デタリ、不幸ニシテ此ノ謀圖ニ應ジ、竟ニ南北朝ノ分立ヲ見ルニ至リシハ浩歎ニ堪ヘザル所ナリ。

(一〇)元寇ノ顛末ヲ問フ 龜山天皇ノ文永五年(紀元一九二八年)元主忽必烈、高麗ヲ媒下シテ通好ヲ我ニ求メシム、時ニ忽必烈既ニ四方ヲ征服シテ遂ニ支那宋朝ヲ滅シ國號ヲ立テ、元ト云ヒ、其ノ餘威ニ乘ジテ我が國ヲモ懾服セシメント欲セシナリ、朝廷其ノ答書ヲ草シテ鎌倉ニ下サレシニ、時宗、彼ノ書辭無禮ナリトテ之ニ報ゼズ、元屢使ヲ遣ハシテ答書ヲ促シタレドモ更ニ報答セザリシカバ、後宇多天皇ノ文永十一年、元兵二萬五千、壹岐、對馬ヲ襲ヒ、進ンデ筑前ニ至ル、鎮西ノ豪族少貳、大友、菊池、原田等討チテ之ヲ却ク、爾後元、使ヲ遣ハスコト再度ニ及ビシガ、時宗皆之ヲ鎌倉ニ斬リ、北條實政ヲ筑紫ノ探題トシ、京師ノ大番ヲ止メテ筑紫ニ送り、又西海ニ命ジテ益海防ヲ嚴ニセシム、元主使者ノ殺

サレタルヲ聞キ、大イニ怒リ、弘安四年(紀元一九四一年)五月、范文虎ヲ將トシ兵十餘萬ヲ率テ來寇セシム、先ヅ壹岐、對馬ヲ侵シ、進ンデ筑前ニ迫ル、我が將河野通有等能ク防ギテ虜逐ニ上陸スル能ハズ、偶々閏七月颶風俄ニ起リテ虜艦多ク破壊シ或ハ沈没セリ、少貳景資機ニ乘ジテ殘兵ヲ掩撃シ殆ンド之ヲ塵ニセリ、此ヨリ元復我が國ヲ窺ハザリシハ時宗ノ力ナリ。

(一一)鎌倉時代佛法隆盛ノ原因及ビ佛教新派ノ起リヲ問フ 當時佛法ノ隆盛ナリシハ主トシテ、上流社會ノ人々佛ヲ信ゼシニ因レリ、而シテ其ノ佛ヲ信ゼシ原因ハ、北條義時陰謀ヲ以テ源氏ノ宗親功臣ヲ殲盡シ、承久ノ亂ニハ父子三帝ヲ絶海ニ遷シ奉リシ如キ惡逆ヲ犯シ、故、深ク應報ヲ恐レテ、數佛事ヲ修メ僧徒ニ施シ、ニ起レリ、而シテ時頼ノ如キハ其ノ節儉ニ似氣ナク巨費ヲ投ジテ建長寺ヲ創建シ、時宗ノ如キモ亦圓覺寺ヲ建ツルニ至レリ、又佛教ノ新派ハ後鳥羽ノ朝、僧榮西、宋ヨリ歸リテ禪宗ヲ弘メ、上下共ニ之ニ歸依スル者多シ、此

ノ朝又法然上人出デ、淨土宗ヲ弘メ、其ノ徒弟親鸞上人ハ順徳ノ朝ニ淨土眞宗一名一向宗ヲ弘メ、時頼ノ頃ニハ日蓮上人出デ、法華宗ヲ弘メタリ、此ノ三宗ハ皆簡易ヲ主トシテ無學ノ武士百姓ニ入り易カリシカバ、歸依スル者漸ク多カリキ。

(一)藤原氏ノ五攝家ヲ問フ 初メ頼朝攝關ノ權ヲ分タンガ爲、藤原氏ヲ二派ニ分チシガ、北條時頼更ニ之ヲ近衛、鷹司、九條、一條、二條ノ五派ニ分チ互ニ相制セシム、之ヲ五攝家ト云フ。

(二)元弘ノ變ノ顛末ヲ問フ 第九十六代後醍醐天皇ハ大覺寺統ヲ以テ花園天皇ノ後ヲ承ケ立タセ給ヒケルガ、天資英邁ニシテ夙ニ王權ノ回復ヲ企圖シ、即位ノ初メ、記録所ヲ開キテ親政ヲ行ヒ、文學ヲ獎勵シテ人材ヲ登庸シ給ヘリ、是ノ時ニ當リテ北條高時執權タリシガ、性昏愚ニシテ政ヲ恤ヘズ、鬪犬田樂等ノ遊戯ニ耽リ、内管領長崎高資權ヲ擅ニシテ私曲ヲ行ヒシカバ、頗ル關東ノ士

心ヲ失ヘリ、帝此ノ機ニ乘ジテ北條氏ヲ討ゼンコトヲ圖リ、中納言日野資朝、藏人頭日野俊基ヲシテ潛カニ諸國ニ遊ビ地理民情ヲ探リ、武人ヲ糾合セシメ給フ、然ルニ高時之ヲ覺リ、與謀ノ武人ヲ殺シ、資朝、俊基ヲ捕ヘ、遂ニ廢立ヲ行ハントス、帝誓書ヲ賜ヒ事僅ニ解クヲ得タリ、而シテ帝ノ御志愈々切ニ、南都北嶺ノ僧力ヲ藉リテ事ヲ果サント思ボシ、乃チ其ノ皇子尊雲(大塔宮)尊澄ノ二法親王ヲ天台座主トナシ、又屢々諸寺ニ幸シテ僧徒ヲ懷ケ給ヘリ、然ルニ謀復泄レ、高時承久ノ故事ヲ用ヒ帝ヲ流シ且尊雲法親王ヲ害シ奉ラントス、元弘元年(紀元一九)八月、高時、二階堂貞藤ヲシテ兵ヲ率キ西上セシム、帝乃チ大塔宮ノ謀ヲ用ヒ、叡山ニ幸スル爲シテ潛カニ笠置ノ山寺ニ行幸シ、近國ノ武士ヲ招キ給フ、此ノ時河内ノ人楠正成聖諭ニ感激シ、身ヲ以テ安危ニ任センコトヲ誓ヒ赤坂城ヲ築キテ之ニ據リ、帝ヲ迎ヘ奉ラントス、賊兵專ラ叡山ヲ攻メシガ、帝ノ笠置ニ在マスヲ聞キ、六波羅ノ府帥北條仲時、時益等來リテ笠置ヲ攻メ陷

シ、帝ヲ捕ヘテ六波羅ニ幽シ奉リヌ、此ヨリ先キ高時、後伏見ノ皇子量仁親王ヲ擁立ス是ヲ光嚴天皇トス、此ニ至リ帝ニ迫リテ神器ヲ新主ニ傳ヘント請フ、帝乃チ新器ヲ作りテ之ニ授ケ給フ、之ヲ元弘ノ變ト云フ、翌年高時帝ヲ隱岐ニ遷シ奉リヌ。

(一四)兒島高德、聖駕ヲ奪還セントセシ事實ヲ問フ 備前ノ人兒島高德(備後三郎)後醍醐帝ノ隱岐ニ遷サレ給ハントスルヲ聞キ、一族郎從ヲ集メテ聖駕奪還ノ計ヲ決シ、之ヲ舟坂山ニ要シケルニ、御道筋變リテ山陰道ニ向フ由聞エケレバ、更ニ美作ノ杉坂ニ出デタリ、然ルニ風聲既ニ通過ノ後ナリシカバ、遺恨ヤル方ナク、即夜院莊ノ御旅館ニ忍入り、庭前ノ櫻樹ヲ削リ天堯ト云空ト云勾踐ト云時非レ無ニ范蠡ト云ト云ヘル二句ノ詩ヲ書シタリ、翌朝警護ノ武士共之ヲ見タレド解スル能ハズ、此ノ由奏上シケルニ、帝之ヲ覽テ心密ニ勤王ノ士アルヲ喜ビ給ヘリ。

(一五)勤王ノ義舉續出及ビ北條氏滅亡ノ概蹟ヲ問フ 護良親王(大塔官還俗後ノ御名)兵

ヲ集メテ吉野ノ城ニ據リ、赤松則村、親王ノ令旨ヲ奉ジテ義兵ヲ播磨ニ擧グルニ當リ、元弘三年(紀元一九九三年)高時更ニ大佛高直、二階堂貞藤等ヲ將トシ、大擧西上セシメ、赤坂ヲ攻落シ、尋イデ吉野ヲ陥レ、東軍八十萬悉ク正成ノ籠レル金剛山千窟城ニ萃マリ攻メヌ、正成寡兵ヲ以テ之ニ當リ、屢々奇計ヲ運ラシテ東兵ヲ困シメタリ、此ノ時ニ當リ赤松則村ハ軍ヲ京師ニ進メントシ、土居、得能ハ伊豫ニ、菊池、阿蘇ハ鎮西ニ、各々義兵ヲ擧ゲテ正成ニ呼應セリ、天皇隱岐ニ在マシ、勤王ノ軍四方ニ起レリト聞召シ、源忠顯ヲ從ヘテ潛カニ伯耆ニ遁レ給フ、地方ノ豪族名和長年、帝ヲ船上山ニ奉ジテ隱岐ノ守護佐々木清高ノ軍ヲ擊卻セリ、高時、京師危シト聞キ、名越高家、足利高氏ヲ將トシ、大軍ヲ率キテ赴キ援ハシメシニ、高氏ハ官軍ニ降り、高家ハ則村ト戰ヒテ敗死ス、尋イデ官軍六波羅ヲ陥レ、仲時、時益近江ニ走リテ自殺セリ、關東ニテハ上野ノ豪族ニ新田義貞アリ、護良親王ノ令旨ヲ奉ジテ義兵ヲ擧グ、陸奥ノ結城宗廣ト相合シテ

鎌倉ノ虚ヲ襲ヒシカバ、高時力盡キテ一族郎從九十四人ト共ニ自殺シ、北條氏
 茲ニ亡ビヌ、時ニ元弘三年五月廿二日ナリ、鎌倉幕府ノ創立ヨリ殆ド一百五十
 年ニシテ政權一旦朝廷ニ歸シ、建武中興ノ御世トハナリヌ。

(一六)鎌倉時代ノ租税法ヲ問フ 賴朝大イニ税率ヲ改ムル所アリシガ、猶租
 税ハ收穫ノ半以上ニ當リ、課役亦頗ル多カリキ、然ルニ泰時執權タルニ及ビ、
 租税ハ概ネ五公五民ヲ諭ユルコトナク、課役ヲモ亦頗ル輕減セリ、當時所謂五
 公五民トハ水田一段ニ粃二石ヲ生ズルモノト見做シ、其十分ノ五卽チ一石ヲ徵
 收スルナリ、之ヲ金納ニスレバ粃五石價一貫文ニ當リ、五段ノ税モ亦卽チ一貫
 文ニ當ルモノトス、武家ニテ所領何貫ト稱スル所謂貫高ノ名稱ハ此ニ起レリ。

(一七)鎌倉時代文學ノ一斑ヲ問フ 幕府創立以來、鎌倉ニハ勤儉尙武ノ風盛
 ニシテ、禮儀ヲ尙ビ名節ヲ重ンズル武士道ト云フ者起リシガ、武士ハ概シテ不
 學無術ニシテ、文學ノ事ハ舉ゲテ緇徒ノ手ニ歸セリ、サレド實朝ノ如キハ頗ル

和歌ニ長ジ、北條顯時又金澤文庫ヲ建テ、講學ノ便ヲ與ヘタリ、漢文ハ此ノ頃
 廢リニ廢レテ、今ノ書翰文體ノ如キモノトナリ、國文モ亦漢語佛語ヲ交ヘテ一
 種ノ文體ヲ成シ、戰亂ノ有様ヲ記セル物語類世ニ出デヌ、保元平治物語、平家
 物語、源平盛衰記等是ナリ、此ノ外、鴨長明ノ方丈記、阿佛尼ノ十六夜日記等
 ハ、文體稍優美ナレドモ、厭世ノ趣味ヲ帶ベルハ此ノ時代ニ於ケル文學ノ特徴
 ナリトス、和歌モ亦頗ル盛ニシテ、藤原俊成、其ノ子定家、僧西行藤原家隆等
 何レモ名手ト稱セラル。

(一八)鎌倉時代工藝美術ノ概要ヲ問フ 繪畫ハ此ノ時代ノ初ニ、土佐光長、住
 吉慶思等ノ倭畫盛ナリシガ、後更ニ禪僧ヨリシテ宋元ノ畫風ヲ傳ヘタリ、佛像
 ノ彫刻ニハ運慶及ビ其ノ子湛慶最モ名匠ト稱セラレ、運慶ノ孫康圓、宋人陳和卿
 ト共ニ鎌倉彫ヲ創メタリ、陶器ハ尾張ノ人加藤景正、貞應中、僧道元ニ隨ヒテ
 支那ニ渡リ、製陶ノ術ヲ究メテ、歸朝後、瀬戶燒ヲ尾張ニ始メタリ、又此ノ時

代ニ特ニ發達セシハ刀劍鍛冶ノ術ニシテ、名工各地ニ輩出シ、就中粟田口吉光、五郎正宗及ビ其ノ弟子郷義弘其ノ技ニ精絶ス世ニ之ヲ三作ト稱ス。

(一九)鎌倉時代風俗ノ一斑ヲ問フ 禪寺ノ建築ハ專ラ宋風ヲ模シ、武人ノ邸宅モ此ノ影響ヲ受テ、玄關、書院、床ノ間等ヲ設クルニ至リヌ、又衣裝ハ士人ハ皆烏帽、直垂ヲ裝ヒ、或ハ大紋ヲ布直垂ニ着ケ、中間小者ハ、四布袴ニ脛巾ヲ纏ヘリ、武家ハ一般ニ綾蘭笠ヲ被リ、女ハ概シテ打掛ヲ着、道ヲ行クニハ、むしのたれぎぬヲ着ケタル笠ヲモ被レリ。

第四篇

南北朝時代

建武中興ヨリ南
北合一ニ至ル

(一)建武中興ノ治蹟及ビ其ノ衰頹ノ原因ヲ問フ 元弘三年(紀元一九)六月、後

醍醐帝ハ伯耆ヨリ京師ニ還御シ給ヒ、詔シテ光嚴帝ヲ廢シ、正慶ノ年號ヲ止メ

テ元弘ニ復シ、乃チ流竄ニ遭ヘル皇子公卿ヲ召還シ、護良親王ヲ征夷大將軍ニ

任ジ、雜訴決斷所ヲ置キ、評定員ヲ定メテ知行ノ事ヲ處決セシメ、足利高氏ニ

御諱ノ一字ヲ賜ヒテ尊氏ト改メシメ、公武ノ功臣ヲ國守ニ任ジ、皇子成良親王

ヲ關東管領トシ、足利直義之ニ副タリ、義良親王ヲシテ陸奥ヲ鎮セシメ、北畠

顯家之ニ副タリ、朝廷ニハ關白、太政大臣ヲ置カズシテ卿ノ任務ヲ重クシ、新

田義貞ヲ武者所ノ頭トシ、年號ヲ建武ト改メ、新錢ヲ鑄造シ紙幣ヲ發行シテ國

用ニ充テ、諸國ニ課シテ大内ヲ造ラセ給フ、斯クシテ建武中興ノ業ハ成リタレ

ドモ、天皇漸ク政ニ倦マセ給ヒ、藤原廉子寵ヲ專ラニシテ内謁盛ニ行ハレ、近

臣宮人多ク所領ヲ得テ武人ヲ輕侮シ、有功ノ將士却テ賞賜ニ漏レ或ハ所領ヲ奪

ハレタル者ナドアリテ、漸ク王政ヲ厭ヒ、幕府ノ再興ヲ希フ者アルニ至リヌ、

是中興ノ業終リテ全ウセザル所以ナリ。

(二)足利尊氏ノ謀叛顛末ヨリ其ノ西奔ニ至ルマデノ事略ヲ問フ 足利尊氏ハ

元來野心勃々タル武人ナレドモ、深ク後醍醐帝ノ寵任ヲ辱クシテ中興ノ元勳ニ

擢デラレ、聲望却テ新田義貞(源氏)ノ上ニ在リキ、然ルニ護良親王、尊氏ノ異志アルヲ察シテ之ヲ除カントセラレシニ、尊氏、帝ノ寵姫藤原氏ト結托シテ親王ヲ讒シ、之ヲ鎌倉ニ遷シテ幽閉セリ、既ニシテ北條高時ノ第二子時行、兵ヲ擧ゲテ鎌倉ヲ攻ム、直義防戦シテ利アラズ、護良親王ノ時行ト力ヲ合センコトヲ恐レテ之ヲ弑シ、成良親王ヲ奉ジテ西走セシカバ、時行即チ鎌倉ニ據レリ、時ニ尊氏、京師ニ在リシガ、鎌倉ノ敗ヲ聞キ、自ラ請ウテ東征ス、武士ノ朝廷ヲ怨望スル者雲ノ如ク集リテ之ニ從ヘリ、尊氏、直義ト共ニ時行ノ軍ヲ破リ、鎌倉ニ據リテ還ラズ、遂ニ謀叛ニ決心シ、恣ニ征夷大將軍、東國管領ト稱シ、預テ義貞ト隙アルヲ以テ之ヲ伐ツヲ名トセリ、朝廷大イニ驚キ、義貞ニ詔シテ之ヲ討ゼシメ給フ、義貞、弟脇屋義助ト共ニ尊良親王ヲ奉ジテ東ス、朝廷更ニ源顯家ニ詔シテ義貞ノ軍ニ會セシム、義貞連戦敵ヲ破リテ箱根ニ抵ル、然ルニ義助ノ軍竹ノ下ニ敗レシヨリ官軍大イニ亂レテ退キ、尊氏、直義追躡シテ遂ニ

京師ニ入り、天皇叡山ニ幸シ給フ、既ニシテ顯家、奥羽ノ兵ヲ率キテ西上シ、義貞亦正成、長年等ト力ヲ合セテ尊氏ヲ攻メシカバ、兩旬ヲ出デズシテ京師ヲ復シ、尊氏、直義遂ニ九州ニ奔レリ。

(三)尊氏東上ヨリ京師再陷ニ至ルマデノ略蹟ヲ問フ 尊氏一旦九州ニ落チ延ビシカド、幾程モナク九州ノ兵ヲ糾合シテ東上シ、途ニシテ光嚴上皇ノ院宣ヲ賜ハリ、錦旗ヲ翻シテ海陸並ビ進ミケレバ、遠近ノ將士風ヲ望ミテ來リ屬スル者多ク、水軍ハ七千餘艘、陸軍ハ二十萬ト號セリ、義貞、義助退キテ兵庫ヲ守ル、天皇正成ニ命ジテ赴キ援ハシメ給フ、正成策ヲ獻ジテ曰ハク、車駕暫ク叡山ニ幸シ、賊ヲ縱ツテ京師ニ入ラシメ、然ル後其ノ糧道ヲ絶チテ義貞ト共ニ之ヲ夾撃セント、朝議其ノ策ヲ納レズ、正成乃チ意ヲ決シテ櫻井驛ニ到リ、子正行ニ遺訓スルニ後事ヲ以テシ、進ミテ攝津ノ湊川ニ陣シ、直義ノ軍ヲ防ギケルガ、衆寡敵セズ、遂ニ弟正季ト共ニ自裁セリ、義貞モ亦水軍ヲ防ギ大イニ敗レ

テ逃レ歸リ、天皇復叡山ニ幸シ給ヒ、尊氏等京師ニ入ル、時ニ延元元年(紀元一
九九六年)五月ナリキ。

(四)南北朝分立ニ至ル前後ノ事實ヲ述ベ、併セテ南北兩朝ノ系統ヲ圖記セヨ。
尊氏ノ京師ニ入ルヤ、後伏見上皇ノ皇子、光明天皇ヲ擁立シ、北陸道ヲ絶チテ
叡山ヲ困シメ、僞リテ誓書ヲ上リ、後醍醐帝ヲ迎ヘ奉リヌ、天皇乃チ皇太子ヲ
義貞ニ添ヘテ北陸ニ赴カセ、尊澄法親王ヲ北畠親房ニ添ヘテ伊勢ニ赴カセ、御
親ヲハ都ヘ還ラセ給ヒシニ、尊氏、天皇ヲ華山院ニ幽シ、強ヒテ神器ヲ新主ニ
傳ヘンコトヲ請フ、天皇乃チ僞器ヲ授ケ、親ヲ神器ヲ擁シテ密ニ吉野ニ逃レ給
フ、楠正行、和田正朝等兵ヲ率キテ行宮ヲ護ル、實ニ延元元年十二月ナリ、此
ヨリ吉野ヲ南朝ト稱ヘ、京師ヲ北朝ト呼ビ、對立スルコト五十七年、其ノ間政
令ニ所ヨリ出デ、年號モ亦ニ様ノ稱ヲ見ルニ至リヌ。

南北兩朝ノ系統表

南朝即チ大覺寺統

●後醍醐 九六

●後村上 九七

●長慶 九八

●後龜山 九九

北朝即チ持明院統

後伏見

光嚴

崇光

光明

後光嚴

後圓融

●後小松 一〇〇

(五)南朝不振ノ事由ヲ問フ。南朝ニテハ、新田義貞、脇屋義助、北畠親房及
ビ顯家、楠正行等力ヲ殫シテ興復ヲ圖リタレドモ、時、非運ニ際セシニヤ、北
國ニ於テハ足利高經、越前ノ金ヶ崎城ヲ陷レテ、皇太子恒貞親王ヲ捕ヘ、尊良
親王、新田義顯等ハ自殺セリ、義貞又高經ヲ越前ノ足羽城ニ攻メシガ、流矢ニ
中リテ戰歿ス、顯家ハ義良親王ヲ奉ジテ鎌倉ヲ攻メ、足利義詮ヲ走ラシテ西上
セシガ、高師直ト和泉ノ堺浦ニ戰ヒテ敗死セリ、幾モナク後醍醐帝ハ吉野ノ行宮
ニ崩シ、後村上天皇ヲ踐ミ給フ、此ノ時ニ當リ正行屢兵ヲ出シテ賊ヲ破リシ

が、正平三年(紀元二〇八年)正月、高師直、師泰ノ軍ト四條畷ニ戦ヒ、衆寡敵セズシテ亦戦歿シ、親房、義助ハ前後相踵イテ病死セリ、斯リケレバ、南風愈々競ハズシテ南朝ハ漸ク孤城落日ノ逆境ニ淪ミヌ。

(六)正行戦死以後ニ於ケル南朝ノ大勢ヲ問フ。正行戦死以後、南北朝合一ニ至ル四十餘年ノ間ハ、南朝諸國ノ官軍或ハ起リ或ハ仆レ、勝ツアリ敗ル、アリ、其ノ事蹟頗ル錯雜セリト雖モ、今其ノ大要ヲ記セバ、楠氏ハ畿内ニ在リ、新田氏ハ武藏、越後、上野ノ間ニ出沒シ、菊池氏ハ九州ニ威ヲ振ヒ、伊勢ニ北畠氏、四國ニ河野氏アリ、然レドモ海内ノ過半ハ既ニ足利氏ニ歸セリ。

(七)筑後川ノ戦ヲ略記セヨ。正平十四年七月菊池武光、征西大將軍懷良親王ヲ守護シテ八千ノ兵ヲ率キ、少貳頼尙ノ大軍ト筑後川ニ戦フ、此ノ役ヤ武光奮戦激闘シテ馬倒レ冑破レタレドモ勇氣益々加ハリ、敵ヲ斫リテ冑ヲ取り、馬ヲ奪ヒテ之ニ騎リ、再ビ縱横無盡ニ敵中ヲ驅ケ回リタル勢ニ、敵軍散々ニ敗績シ、

菊池氏ノ威名頓ニ九國ニ震ヘリ。

(八)足利尊氏ノ政策ヲ問フ。尊氏、光明帝ヲ擁立シ、既ニ兵馬ノ權ヲ握リテ後、建武式目ヲ制定シテ施政ノ方針ヲ定メ、延元三年(即チ北朝ノ曆應元年、年紀元一九九八年)八月、征夷大將軍トナリ、幕府ヲ京都ニ開キヌ、抑、尊氏ノ霸業ヲ成ヌヤ、專ラ權謀術數ヲ事トシ、最初賊名ヲ避ケンガ爲メ、光明帝ヲ立テ陽ニ之ヲ尊崇セシト雖モ、已ニ志ヲ得ルニ及ビテハ、公卿ノ領邑ヲ奪ヒ、供御ノ缺乏ヲモ顧ミザルニ至リヌ、部下ノ將士モ亦之ニ倣ヒテ驕慢甚シカリシガ、尊氏常ニ其ノ歡心ヲ失ハザランコトヲ務メキ、是ヲ以テ、諸將、尊氏ノ威ヲ懼レズシテ叛服常ナク、内亂踵ヲ接シテ起レリ。

(九)尊氏、義詮ノ代ニ於ケル内訌ノ事略ヲ問フ。尊氏ノ弟直義、兄ノ霸業ヲ成スニ與リテ殊功アリ、尊氏將軍タルニ及ビ、直義ハ副將軍トナリテ幕政ヲ執リ、威權隆赫ナリシカバ、時人、尊氏ト並稱シテ兩御所ト云ヒキ、尊氏ノ執事

高師直、師泰又南朝ノ諸將ヲ亡ホシテ功勞多ク、尊氏ノ信任ヲ得テ勢力直義ヲ凌ギケレバ、直義之ヲ嫉ミテ除カントセシニ、師直却テ尊氏ヲ脅カシテ直義ヲ斥ケシム、時ニ尊氏ノ子直冬、直義ノ養子タリシガ、鎮西ニ在リテ兵勢大イニ振ヘリ、是ニ於テ父子兄弟ノ争トナリ、尋イデ師直師泰殺サレ、政權再ビ直義ノ手ニ歸セリ、然ルニ尊氏、直義再ビ隙ヲ生ジテ遂ニ直義ヲ毒殺スルニ至リヌ、其ノ他桃井直常、石堂頼房、上杉憲顯等ノ徒叛服常ナク、尊氏正平十三年ヲ以テ卒シ、義詮繼イデ將軍タリシガ、其ノ世ヲ終フルマデ畠山國清、細川清氏、仁木義良等亦叛服常ナクシテ幕府ノ威令殆ド行ハレザリキ。

(一〇)南北朝合一ノ事實ヲ問フ 南朝ニテハ後村上天皇崩ジテ、長慶天皇繼ギ給ヒシガ、久シカラズシテ位ヲ後龜山天皇ニ譲リ給フ、北朝ニテハ光明帝ヨリ崇光、後光嚴、後圓融ノ三帝ヲ經テ、後小松天皇位ヲ繼ギ給ヘリ、時ニ足利義滿、將軍タリシガ、大内義弘ヲ南朝ニ遣ハシテ兩朝和睦ノ事ヲ後龜山帝ニ請ハシメ、奏シテ曰ク車駕京ニ入り、神器ヲ北朝ノ天子ニ傳ヘ給ハ、太上天皇ノ尊號ヲ上リテ兩統更立ノ約ニ從ハント、帝之ヲ許シテ京師ニ還リ、父子授受ノ禮ヲ以テ神器ヲ後小松帝ニ傳ヘ給フ、是ニ於テ南北始メテ合一ス、時ニ紀元二千〇五十二年ナリキ。

(一一)足利氏歴史中ノ最大美事ト稱スベキ者ヲ問フ 足利氏ノ最大美事ト稱スベキハ、地租輕減ノ一事ナリ、初メ後醍醐帝、地頭ノ收入二十分一ヲ徵シ給ヒシテ、尊氏之ヲ減ジテ五十分一トス、其後義滿ノ代ニ當リ、細川頼之大イニ心ヲ民政ニ用ヒ、亂世無法ノ課賦ヲ止メテ四公六民ノ租法ヲ行ヘリ、然レドモ當時封建ノ勢既ニ成リ、諸大名各驕擅ヲ極メタレバ、此等ノ仁政モ蓋シ將軍直轄ノ地ニ限り、實行セラレタル者ザラン。

(一二)南北朝時代ノ文學ノ一斑ヲ問フ 文學ハ騷亂ヲ經テ一般ニ衰頹セリト雖モ、尙、公卿ニハ二條良基等一兩人アリ、細流ニハ卜部兼好、北畠玄慧アリ

テ、何レモ和文和歌ニ精シカリキ、其ノ他軍記ノ類ニハ太平記出デ、其ノ著者ハ小島法師ナラント云フ、特ニ比類ナキ良書ト稱スベキハ、北畠親房ノ神皇正統記ニシテ、皇統一系萬古渝ラザル故ヲ述ベ、神器ヲ受傳ヘザル者ハ眞ノ天子ニ非ラザル由ヲ示シ、南朝ノ正統ナルコトヲ世ニ明カニセリ。
(一三)左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ

甲 萬里小路藤房

乙 花山院師賢

丙 菊池入道寂阿

(甲)萬里小路藤房姓ハ藤原、後醍醐帝ニ仕ヘテ官、中納言正二位ニ至ル、元弘元年、北條高時、兵ヲ遣ハシテ京師ヲ犯サントスルニ當リ、護良親王急使變ヲ上リシカバ、藤房、帝ニ勸メテ笠置ニ潛幸セシメ給フ、此ノ際君臣艱難流離ヲ極メテ、帝和歌ヲ詠マセ給ヒ、藤房亦之ニ廣ギシ事ハ世ノ知ル所ナリ、建武中興ニ當リ、藤原實世勅ヲ奉シテ論功行賞ノ事ヲ掌リシガ、之ヲ措辨スルコト能ハズ、因ツテ更ニ藤房ニ命ジテ之ヲ代掌セシム、藤房能ク眞偽ヲ

甄別シテ擬授略一定リタルニ、内旨特ニ下リテ偏頗ノ恩賜多カリシカバ、藤房其ノ諫ムベカラザルヲ知リ、病ト稱シテ朝セザリキ、鹽谷高貞、千里ノ馬ヲ獻ズルニ當リ、藤房、故事ヲ援キ及ビ時ノ非政ヲ陳述シテ、帝ノ反省ヲ乞ヒシカド、其ノ言遂ニ納レラレザリシカバ、建武元年藤房官ヲ棄テ、逃レ、北山ノ岩藏ニ入りテ僧トナリヌ、帝大イニ驚キ、人ヲ遣ハシテ之ヲ召サシメ給ヒシニ、藤房和歌ヲ詠ジテ之ニ答ヘ、遂ニ去ツテ終ル所ヲ知ラズト云フ、

(乙)藤原師賢ハ家ヲ花山院ト稱ス、後醍醐帝北條氏ヲ圖リ給フニ當リ、師賢亦其ノ謀ニ參カリシガ、事洩レテ高時京師ヲ犯サントス、師賢乃チ藤原藤房ト帝ヲ奉ジテ夜禁中ヲ出デ三條河原ニ至リシニ、帝師賢ニ命ジ、袞衣ヲ着、御輿ニ乘リ、詐リテ帝ト稱シテ延曆寺ニ赴カシメ、而シテ帝ハ潛カニ笠置ニ遁レ給フ、師賢已ニ延曆寺ニ到レバ、僧徒奉迎シテ護衛甚ダ謹シミ、賊兵來リ攻ムルニ及ビ、撃ツテ之ヲ却ケシガ、遂ニ帝ノ眞ニ非ザルヲ覺リテ解散セリ、

師賢乃千逃レテ笠置ニ赴キシガ、笠置陥ルニ及ビ、虜ニ就キテ下總ニ流サレタリ。

(丙)菊池武時削髮シテ入道寂阿ト號ス、元弘ノ亂ニ首トシテ勤王ノ義旗ヲ擧グ、九州ノ豪傑ヲ糾合シテ探題北條英時ヲ攻メシニ、少貳大友ノ二氏約ニ背キテ敵ニ内通シ、俄ニ兵ヲ出シテ敵ノ後援ヲナシ、カバ、武時、子武重ニ遺訓シテ故郷ニ返シ、自身ハ目覺シキ合戰シテ討死セリ。

第五篇 足利時代 足利義滿ノ代ヨリ 群雄割據ニ至ル

(一)足利幕府ノ組織ヲ問フ 室町氏ノ組織ハ義滿ニ至リテ初メテ完備セリ、其ノ職制ハ概ネ鎌倉ノ古制ニ倣ヒテ政所、問注所、侍所ヲ置キタレド、唯執權ヲ廢シテ管領ヲ置キタルト、奉行ノ數トナ異ニセルノミ、職制ノ第一タル管領ハ斯波、畠山、細川ノ三氏更ル々々之ニ任ジテ二管領ト稱ス、侍所司ハ山名、

一色、佐々木、赤松ノ四氏更ル々々之ニ任ジテ四職ト稱ス、其ノ他評定衆アリ、四職ノ者亦更ル々々之ニ補ス、又引付衆アリ、管領、評定衆ト共ニ機務ノ評議ニ參與ス、別ニ政所執事アリ、錢穀租稅ノ事ヲ掌リ、而シテ侍所司ハ專ラ京師ノ訟獄警察ノ事ヲ掌理セリ、奉行ニハ寺社、恩賞等三十六奉行アリテ諸般ノ事務ヲ分掌シ、而シテ地方ニハ鎌倉ニ關東管領アリテ執事之ニ隸屬シ、奥羽鎮西ニハ各探題アリ、諸國ニ守護地頭アルコト鎌倉時代ニ同ジカリキ。

(二)足利義滿驕僭ノ狀ヲ問フ。 義滿既ニ職ヲ其ノ子義持ニ讓リテ後、清盛ノ故例ヲ引キテ太政大臣ニ陞リ、諸將ニ課シテ金閣ヲ北山ニ營シ、輪奐華麗ヲ極メテ自ラ此ニ居リ、政務ヲ裁決セシヲ以テ、世ニ北山殿ト稱シキ、此ヨリ先キ義滿削髮シテ天山道義ト號シ、出入ノ儀衛總ベテ行幸ニ擬シ、關白公卿ヲモ皆前後ニ躡ラセ、驕僭ナルコト遙カニ清盛ニ浮ギヌ、サレバ諸將モ亦之ニ倣ヒ驕傲ヲ極メ、中ニモ大内義弘ハ其ノ富強ヲ恃ミテ自立ヲ圖リ、鎌倉ノ管領滿兼ト

謀ヲ通シテ兵ヲ擧ゲシガ、義滿討ツテ之ヲ滅シ、滿兼ト和睦セリ、是ヨリ義滿ノ驕僭愈々甚ダシク、明國ニ通ジテ日本國王ノ封冊ヲ受クルニ至リヌ。

(三)鎌倉公方ノ滅亡事實ヲ問フ。足利義持ノ子義量嗣ギテ將軍トナリシガ、早世シテ嗣ナシ、管領畠山滿家、義持ノ弟僧義圓ヲ迎ヘテ將軍トナシ名ヲ義教ト改ム、時ニ鎌倉ノ管領持氏兵力ヲ恃ミテ驕傲ナリ、吾豈ニ還俗將軍ニ屈センヤトテ、自ラ將軍タランコトヲ希望セリ、執事上杉憲實切諫スレドモ聽カズ、遂ニ之ヲ殺サントス、義教之ヲ聞キ、大軍ヲ發シテ持氏ヲ討滅セリ、時ニ後花園天皇ノ永享十一年(紀元二〇九九年)ナリキ。

(四)嘉吉ノ變ヲ問フ。赤松滿祐(即村曾孫)常ニ將軍義教ニ怨ミヲ懷キシガ、其ノ領地ヲ沒セラレントスルニ至リ、大イニ憤リテ、饗宴ニ托シ將軍ヲ其ノ邸ニ招キテ之ヲ弑シタリ、管領細川持之、義教ノ子義勝ヲ立テ、將軍トナシ、山名持豐ヲシテ滿祐ヲ白旗城ニ攻メテ之ヲ誅セシム、時ニ後花園天皇ノ嘉吉元年ナリ、故ニ之ヲ嘉吉ノ變ト云フ。

(四)應仁ノ亂源ヨリ其ノ結局ニ至ル迄ノ概要ヲ問フ。應仁ノ亂源ハ頗ル複雑ナル相續ノ争ヨリ起リテ、終ニ細川、山名二氏ノ一大戰亂トハナリヌ、初メ義政職ヲ襲ギテ後、徒ニ宴安遊樂ヲ事トシテ政ヲ恤ヘズ、既ニシテ務ニ倦ミ職ヲ去ラント欲セシモ、嗣子ナキヲ以テ其ノ弟義視(僧トナレル者)ヲ還俗セシメテ嗣トナシ、縱ヒ將來實子ヲ擧グルコトアルモ必ず僧トナスベシト約セリ、然ルニ義政ノ夫人富子義尙ヲ生ムニ及ビ、僧トナスニ忍ビズ、遂ニ義視ヲ廢セント欲ス、然レドモ時ノ管領細川勝元、義視ノ傳タリシヲ以テ之ヲ憚リ、更ニ勝元ニ拮抗スベキ山名宗全ヲ撰ビテ其ノ事ヲ托セリ、宗全之ヲ諾シ、更ニ畠山義就ヲ引イテ其ノ羽翼トス、義就ハ持國ノ子ナリ、此ヨリ先キ持國子ナカリシカバ、弟持高ノ子政長ヲ養子トシケルニ、後義就生マレシヲ以テ、更ニ政長ヲ廢セントス、然ルニ勝元、政長ヲ援ケテ義就ヲ逐ヒシカバ、義就乃チ宗全ニ黨シ、而シテ政長ハ勝元ニ與セリ、

此ノ時、斯波氏ニモ亦家督爭アリ、義敏、義廉互ニ黨ヲ立テ、相爭ヒシガ、此ニ至リテ義敏ハ勝元ニ屬シ、義廉ハ宗全ニ屬シヌ、後土御門天皇應仁元年(紀元二二七二年)義就京師ニ歸リ政長ト戰端ヲ開カントス、義政諸將ニ命シテ局外中立ヲ守ラシメシニ、宗全竊カニ義就ヲ輔ケテ政長ヲ破リシカバ、世人勝元ノ義氣ナキヲ誹リヌ、勝元之ヲ愧ヂ、乃チ潛カニ族ヲ集ム、兵來リ會スル者凡ソ十六萬人、室町ノ東ニ陣セリ、宗全之ヲ聞キ亦兵ヲ集ムルコト凡ソ十一萬餘人、幕府ノ西ニ屯ス、兩軍遂ニ開戰シテ互ニ勝敗アリシガ、偶々流言アリテ勝元、義政ヲ廢シテ義視ヲ立テントスト傳ヘシカバ、義政西軍ニ投ゼントス、勝元計ヲ以テ義視ヲ西軍ニ走ラシメ、義政ヲ其ノ營ニ迎ヘ、更ニ帝及ビ上皇ヲモ其ノ陣中ニ迎ヘ奉リヌ、宗全己ニ義視ヲ擁シ、又小倉宮ノ王孫ヲ奉ジテ南朝ノ殘黨ヲ勝ヒ、兩軍ノ戰爭數年ヲ經テ雌雄尙決セザリシニ、文明五年宗全、勝元相尋イデ病死セリ、然ルニ兩軍尙對陣シテ退カズ、同九年(紀元二二七九年)ニ至リ、義視ハ美濃ニ走リ、兩

黨初メテ兵ヲ收メテ國ニ歸リヌ、京師兵馬ノ區タリシコト十一年、其ノ間宮殿寺院若シクハ歷代ノ典籍寶器等概ニ灰燼ニ歸セシ者少カラズ、之ヲ應仁ノ亂ト云フ。

(五)堀越御所及ビ古河御所トハ何ゾ 義政ノ世、京師ニ大亂アリシノミナラズ關東ニモ亦兵亂絶エザリキ、鎌倉ノ管領持氏滅ビテ後、兩上杉氏管領タリシガ、東國荐リニ安カラズ、持氏ノ遺孤成氏、東國ノ諸侯ニ推サレテ上杉氏ト和シ、鎌倉ニ入り、義政ノ許シテ得テ管領タリシガ、舊怨ヲ上杉憲實ノ子憲忠ニ修メントシテ之ト戰フコト數年ニ彌リキ、上杉氏乃チ幕府ニ請ヒ、義政ノ弟政知ヲ迎ヘテ主ト爲シ、カド、歸屬スル者甚ダ寡ク、政知ハ伊豆ノ堀越ニ留リテ堀越御所ト稱セリ、既ニシテ成氏ノ軍利アラズ、鎌倉ヲ遁レテ諸處ニ流寓センガ、終ニ上杉氏ト和シ、下總ノ古河城ヲ保チテ古河御所ト稱セリ。

(六)義政ノ奢侈及ビ足利氏ノ所謂德政ヲ問フ 義政京師ノ荒廢、人民ノ流離

ヲ顧ミズ、日夜聲色ニ耽リ、奢侈ヲ事トシ、曾テ高倉邸ノ障子ヲ造ルニ一間ノ價二萬錢ヲ費ヤスニ至レリ、當時米一石ハ大凡永樂百錢ニ當ルヲ以テ、二萬錢ハ卽チ米二百石ノ價ナリ、加之義政職ヲ其ノ子義尙ニ讓リテ後、北山ノ金閣ニ據シテ銀閣ヲ東山ニ起シ、珍玩奇好ヲ蒐メ、數々茶會ヲ催シテ風流ノ歡ヲ極メキ、サレバ義滿ノ定メタル四六ノ税法モ何時カ破レテ、諸國ニ段錢、京都ニ棟別錢等ノ増稅ヲナシ、モ、尙足ラズシテ、義滿ノ世ニハ一年四回徵スルニ過ギザリシ倉役(畿内豪戶ノ錢ヲ借リ上クルヲ云フ)モ、義政ニ至リテハ一月八九回ノ多キニ及ビ、到底辨償ノ見込立タザルトキハ、公私一般ノ貸借無勘定ノ令ヲ布キタリ、之ヲ名ケテ德政ト云フ、サレバ德政ハ文字ノ上ヨリ解スレバ、頗ル美ナルガ如シト雖モ、實ハ社會ノ秩序ヲ紊スベキ暴政タルニ過ギザリキ。

(七) 足利時代ノ外交ヲ問フ 紀元二千二十八年(足利義滿ノ將軍職ヲ襲キシ年)支那ニハ明ノ太祖朱元璋既ニ元ヲ滅シテ國號ヲ明ト改メニキ、高麗モ南北朝統一ノ翌年李成桂、

王ト爲リテ國號ヲ朝鮮ト云ヘリ、此ヨリ先キ尊氏ノ時、毎年二艘ノ交易船ヲ元ニ遣ハシ、ガ、元喪ビ明興ルニ及ビ、四國九州ノ武士等、弘安來寇ノ怨ヲ復セントニヤ、屢、明國等ノ沿海ニ出沒シテ掠奪ヲ縱ニセリ、然ルニ明主ハ飽クマデ通交ヲ求メントテ、屢、使ヲ遣ハシ、ガ、西征將軍ノ宮其ノ書辭無禮ナルヲ惡ミテ使僧ヲ拘ヘシニヨリ、明主怒リテ兵力ニ訴ヘント嚇シ、カド、征西府ハ毫モ屈セズシテ斷然之ヲ斥ケタリ、其ノ後足利義滿ニ至リ、筑前ノ商人肥富某コエツミノ勸誘ヲ納レ、禪僧祖阿ヲ副ヘ、臣ト稱シテ明主ニ通好ヲ求メシカバ、明主大イニ懼ビ、義滿ヲ日本國王ニ封ズルノ冊書ヲ贈リ、十年毎ニ來聘スベキヲ約シヌ、此ヨリ彼我ノ交通漸ク盛ニナリ、義滿死シテ後、一旦交通絶エシテ、義教ノ時ニ至リ、更ニ臣ト稱シテ使聘ヲ送リヌ、義政奢侈ヲ窮ムルニ及ビ、帑庫空竭シテ費用給ラズ、乃チ明ニ告ゲテ救恤ヲ乞ヒ、明ノ通用錢鉅萬ヲ得テ費途ニ充テキ、所謂永樂錢是ナリ、斯ク足利氏ト明トノ修好ハ頗ル厚カリシカド、猶我が西陲ノ商人

等、貿易上ニ不利アルトキハ、海賊ト心ヲ協セ、往々明ノ沿海ヲ侵シテ騷擾絶エザリキト云フ、當時我カ國ヨリ明ニ渡航セシ貿易船ハ、古書ニ三千斛積ト記シタレバ頗ル巨大ノモノナルベケレド、其ノ構造世ニ傳ハラズ。

(八)足利時代ノ謠曲及ビ連歌ヲ問フ 鎌倉幕府ノ頃ヨリシテ田樂、猿樂共ニ行ハレシガ、室町時代トナリテハ猿樂特ニ流行セリ、義滿ノ時、結崎清次(觀阿彌)其ノ子元清(世阿彌)ト共ニ之ヲ改良シテ謠曲ヲ作りシガ、當時大イニ行ハレテ後世徳川氏ノ世ニ至リ、武家ノ式樂トナリヌ、又連歌ハ舊クヨリ行ハレシガ、此ノ時代ニ至リ特ニ流行シテ上下一般消閑ノ具トナリ、随ツテ其ノ道ノ名匠輩出シ、就中宗砌、心敬、宗祇、宗長等巨擘タリキ。

(九)足利時代美術工藝ノ發達ヲ問フ 義政一世風流ヲ事トセシヨリ、點茶、聞香、插花等ノ遊技大イニ發達シテ工藝美術ノ進歩ヲ促シ、コト少カラズ、禪宗ノ弘布セシヨリ繪畫ニモ亦禪味ヲ交ヘテ高雅ナル墨畫行ハレタリ、義持ノ頃

ニ禪僧明兆(兆殿)巧ニ佛仙ヲ畫キ、義政ノ時ニハ禪僧雪舟明ニ渡リ畫法ヲ學ビテ別ニ一派ヲ開キヌ、古法眼元信ハ和漢ノ畫法ヲ折衷シテ狩野家ノ一派ヲ起シタリ、繪畫ノ隆盛ナルコト前後其ノ比ヲ見ズ、金屬ノ彫刻ニハ後藤祐乘最モ奇巧ニ名アリ、其ノ子孫代々金工トナリテ刀劍ノ裝飾等ヲ刻スルニ精妙ナリキ、陶器漆器モ亦此ノ時代ニ頗ル發達シ、殊ニ蒔繪ノ如キハ、土佐光信(狩野元信ノ妻父)ガ下繪ヲ描シ、ヨリ、植物ノ外ニ山水ナドヲモ巧ニ畫キ初メ、五十嵐ト云ヘル名工モ出デキ、陶器師祥瑞(シヨシキ)五郎太夫ガ支那ヨリ歸リテ肥前ノ唐津ニ製磁ノ業ヲ開キタルモ亦義政ノ世ヲ去ルコト遠カラズ。

(一〇)足利氏ノ末路將軍及ビ權臣相爭ノ狀並ニ足利氏滅亡ニ至ルマデノ事略ヲ問フ 義政ノ子義尙職ヲ嗣ギシガ、早世セシヲ以テ、義政乃チ義親ト和シ其ノ子義植ニ職ヲ嗣ガシメ、畠山政長ヲ管領トセリ、後、政長、義植ヲ奉シテ同族義就ノ子義豐ヲ攻メシニ、細川勝元ノ子政元、義豐ヲ援ケテ政長ヲ攻ム、政長

ハ敗レテ自殺シ、義植ハ周防ニ出奔シテ大内義興ニ依リヌ、政元乃チ義政ノ姪
 義澄ヲ立テ、將軍トシ自ラ管領トナレリ、時ニ畠山、山名ノ二氏既ニ衰ヘテ幕府
 ノ權力專ラ細川氏ニ歸セリ、然ルニ政元子ナキヲ以テ九條澄之ヲ養子トシ、更
 ニ同族澄元、高國ノ二人ヲ養子トシケルニ、家臣相爭ヒテ遂ニ政元ヲ殺シヌ、澄
 元ノ傅三好長輝其ノ亂ヲ平ゲ、澄元ヲ立テ、管領トス、此ヨリ細川氏ノ權力
 ハ轉ジテ三好氏ニ移リヌ、後柏原天皇ノ永正五年(紀元二二六八年)大内義興、義植ヲ奉
 ジテ東上シ、細川高國ト共ニ京師ニ入り、將軍義澄近江ニ逃ル、ニ及ビ、義植
 再ビ職ニ復シテ義興ヲ管領トセリ、十餘年ヲ經テ義興周防ニ歸リ、高國管領ト
 ナリシガ、義植ヲ逐ヒ、義澄ノ子義晴ヲ迎ヘテ將軍トセリ、斯クテ高國權ヲ專
 ニセシガ、三好元長(長輝ノ孫)細川晴元(勝元ノ子)ヲ奉ジテ京ニ入ルニ及ビ、高國之ト戰
 ヒテ戰死シ、晴元代ツテ遂ニ當リシガ、讒ヲ信ジテ元長ヲ殺シキ、其ノ後元長
 ノ子長慶、高國ノ黨ト結ビテ晴元ヲ逐ヒ、復京師ニ入りヌ、此ヨリ先キ將軍義

晴職ヲ子義輝ニ讓リシカバ、長慶乃チ義輝ヲ迎フ、此ヨリ三好氏獨リ權ヲ擅ニ
 シ、長慶ノ死後其ノ家臣松永久秀遂ニ將軍ヲ弑シテ義榮ヲ立テ三好氏ニ代リテ
 幕政ヲ執リヌ、義輝ノ弟義昭、尾張ニ走リテ織田信長ニ依リ、其ノ助ヲ得テ京
 ニ還リ將軍トナリシガ、後信長ト隙ヲ生ジテ河内ニ走リ足利氏茲ニ亡ブ、時ニ
 正親町帝ノ天正元年(紀元二二三年)ナリキ。

(一) 皇室式微ノ狀及ビ回復々次第ヲ問フ 足利氏ハ元來皇室ヲ尊崇スルノ
 志念ナク、一時北朝ノ天子ヲ擁立シテ陽ニ尊崇ノ意ヲ示シ、ハ、只是己ガ私ヲ
 遂ゲントスルニ外ナラザルナリ、サレバ歲ヲ逐ヒテ殿上ノ公卿等ハ次第ニ其ノ
 領邑ヲ掠メラレ、終ニハ衣食ノ資ヲ得ル途スヲナキニ至リ、當時京樣ヲ學ブニ
 汲々タリシ大内氏ノ領邑山口ニ移リ住ム者頗ル多ク、爲メニ山口ハ殷繁ヲ極メ
 タリ、斯カル有様ナレバ、皇室ノ御衰微ハ次第ニ甚シク、申スモ畏ケレド、後土御
 門天皇崩御ノ際ニハ費用ナクシテ葬儀ヲ行フヲ得ズ、四十日ヲ經テ僅カニ葬ル

ヲ得タリキ、又後柏原天皇ノ即位ノ大禮ハ、踐祚ノ後二十餘年ヲ經テ、本願寺ノ僧光兼ノ獻資ニ依リ、初メテ之ヲ擧グルヲ得、後奈良天皇ノ即位ハ大内義隆ノ獻金ニ依リテ僅カニ此ノ典ヲ行フヲ得タル程ノ仕誼ナリキ、斯カリケレバ大内ハ頽廢スレドモ修理スルニ由ナク、夜ハ三條橋頭ヨリ内侍所ノ燈光ヲ望ムベク、晝ハ紫宸殿ノ前ニ市人茶店ヲ出スニ至リ、供御空竭スレドモ給スル者ナカリシカバ、御宸筆ノ色紙短冊ヲ賣リテ、其ノ費ニ充テ給ヒキトゾ、然ルニ佐々木高頼、毛利元就、織田信秀同信長等ノ尊王家前後輩出シテ資ヲ上リ物ヲ獻ジタルニヨリ、後陽成天皇ノ時ニ至リテハ皇室再ビ尊嚴ニ復シテ海内復日月ノ光華ヲ瞻仰スルニ至レリ、サスガニ君臣ノ關係淺カラヌ徵ニシテ、是我ガ國體ノ萬國ニ秀絶スル所以ナリ。

(一) 足利時代ノ風俗殊ニ衣食ニ關スル概況ヲ問フ 衣服ノ物料ハ絹ヲ上品トシ、通例ハ麻布葛布等ナリキ、錦ノ類ハ防長九州若シクハ堺ノ商人等ガ外國ト貿易スルノミニシテ、其ノ用ハ大抵袋物表裝等ニ止マリキ、而シテ衣服ノ製モ簡短ニ傾キ、素襖ノ袖ヲ省キテ上下ト云フ禮服ヲ着始メ、素襖ノ袴ハ長袴ナリシヲ、後年其ノ裾ヲ截チテ半袴ト稱ヘタリ、小袖ノ物料ニハ、編織最モ貴重セラレタリ、又食物ハ頗ル料理法ニ工夫ヲ凝ラシテ、種々ノ新味出デシノミナラズ、義滿義政等ガ奢侈ノ結果トシテ料理法及ビ食禮等漸々ニ緻密ニ赴キ、佐々木道譽ガ方五尺ノ折敷ニ山海ノ佳味盛設ヲ連ネシハ軍書ニ著シキ事實ナリ、彼ノ羊羹饅頭等ノ菓子ヲ始メ、種々ノ魚鳥料理法此ノ時代ニ創作セラレシコト當時ノ書籍ニ見エ、又食器ニハ重箱三方等ノ器具モ見エ、料理専門ノ家柄モ見エタリ。

(二) 群雄割據ニ於ケル關東及ビ北國ノ狀況ヲ問フ 關東ニハ伊豆ノ堀越公方政知其ノ長子茶々丸ノ爲メニ弑セラレシニ當リ、伊勢長氏(新九郎)茶々丸ヲ殺シテ、伊豆ヲ取り、氏ヲ北條ト改メテ、韭山ニ移リ、後ニ薙髮シテ早雲ト號ス、長氏豪邁ニシテ謀略アリ、尋イデ兩上杉氏ノ内訌ニ乘ジ相摸ヲ略シテ小田原ニ移

リシガ、其ノ子氏綱孫氏康ノ世ニ至リ、兩上杉氏ノ地ヲ奪ヒ、安房ノ里見氏ヲ破リテ勢八州ニ雄視セリ、北條氏ト領地ヲ接シテ甲斐ニ武田晴信アリ、入道シテ信玄ト號ス、信玄將略ニ富ミテ士馬盛強ナリ、信濃ヲ略セントテ村上義清ヲ攻メシニ、義清逃レテ越後ノ上杉輝虎(別號シテ謙信ト號ス)ニ依リシヨリ、轉ジテ武田、上杉間ノ兵爭トナリ、互ニ雌雄ヲ爭フコト十二年ノ久シキニ彌リテ決セズ、其ノ間ニ著名ナル川中島ノ合戰アリキ。

(一四)群雄割據ニ於ケル奥羽ノ狀況ヲ問フ 奥羽ニハ葦名、伊達、南部、最上等ノ諸雄アリテ久シク相爭ヒ、互ニ勝敗アリシガ、終ニ伊達氏最モ強大トナリ、政宗ニ至リテ武名益々著レタリ。

(一五)群雄割據ニ於ケル東海東山ノ狀況ヲ問フ 駿遠ニハ今川氏アリ、貞世以來其ノ名漸ク著レシガ、義元ニ至リテ士馬強盛、武威遠近ニ振ヒキ、而シテ尾張ニハ斯波氏衰ヘテ織田氏ノ勢漸ク盛ニナリ、徳川氏參河ニ據リシガ勢尙微

弱ナリキ、又美濃ニハ齋藤秀龍新ニ起リ、近江ニハ六角、京極等ノ舊族衰ヘテ淺井氏ノ名漸ク顯レタリ。

(一六)群雄割據ニ於ケル中國、四國、九州ノ狀況ヲ問フ 出雲ノ尼子氏ハ夙ニ石見ノ鹽冶氏ヲ滅シ、因幡ヲ定メテ武名山陰ニ振ヒシガ、晴久ノ世ニ至リテ毛利氏ニ滅サレヌ、周防ノ大内氏ハ族望頗ル高クシテ義興ノ時最モ盛強ヲ極メシガ、其ノ子義隆ニ至リ文弱ニ流レテ國政ヲ顧ミザリシカバ、遂ニ其ノ臣陶晴賢ノ爲ニ弑セラレキ、然ルニ義隆ノ部將毛利元就、晴賢ヲ討滅シテ大内氏ノ地ヲ併セ、又尼子氏ヲ滅シテ遂ニ山陰山陽十餘國ヲ領シタリ、九州ニハ大友宗麟、南蠻ト交易シ、富強鎮西ニ冠タリシガ、島津義久、伊東氏ヲ逐ヒ、龍造寺氏ヲ破リテ終ニ九州ヲ風靡スルニ至リヌ、又四國ニハ細川氏衰ヘテヨリ河野氏興リシガ、尋イデ土佐ノ長曾我部氏更ニ起リテ之ニ代リ、武威ヲ四國ニ耀カセリ。

(一七) 宗教一揆ノ起因及び其ノ割據區域ヲ問フ。 宗教一揆ハ一向宗及び法華宗ノ一揆ヲ最モ著シトス、元來此等ノ一揆ノ起リタル原因ノ一ハ、僧徒ガ亂世ノ風潮ニ誘ハレ、佛法保護ヲ名トシテ黨ヲ立テ威ヲ張リ以テ私慾暴横ヲ逞ウセントスルニ起リ、一ハ人民ガ賦税ノ重キニ堪ヘズシテ一揆ニ加盟シ以テ納税ヲ逋レントスルニ起レリ、而シテ此等一揆ノ心ヲ固結セシメシハ實ニ宗教ノ力ナリトス、偕一揆ノ重ナル者ハ一向宗ノ本山タル本願寺ノ石山城即チ今ノ大坂ヲ始メ、畿内五國ニ蔓延セル一向宗徒ニシテ之ニ次グルハ加賀、能登、越中ノ一向宗徒ナリ、其ノ他京ニ法華宗ノ二十一大寺アリシ故、此ノ宗徒モ亦畿内近國ニ多カリキ。

(一八) 此ノ時代ニ於ケル西洋人ノ交通及び耶蘇教傳來ノ事實ヲ問フ。 應永ノ頃即チ足利義滿ノ時代ニ伊太利人ころんぶす初メテ亞米利加大洲ヲ發見シテヨリ、尋イデ亞弗利加洲ヲ廻リテ印度ニ通ズルノ航路モ開ケ、西班牙ハふいりつひん群島ヲ、葡萄牙ハまらつかヲ占領セリ、是古來交通杜絶シタル東西ノ二洋ニ始メテ航路ノ開ケタル時ナリキ、天文十年(紀元三三〇一年)葡國ノ商船豐後ニ漂着シ、後二年又種子ガ島ニ漂着セシヨリ、大友、島津ノ二氏通商ノ約ヲ結ビテ鐵砲、大砲ナドノ火器ヲ傳ヘヌ、此ヨリ葡國ノ商船、豐後肥前等ノ瀕海ニ入來リテ貿易ノ業愈々盛ニナリヌ、西人南洋ヨリ來リ、其ノ商船黒色ナルヲ以テ世ニ南蠻ト云ヒ、又黒船ト呼習ヘリ、此ノ頃島津氏ノ臣半四郎ト云フ者罪ヲ犯シテ臥亞^{ウラ}ヘ渡リ、ちえしゆういと(耶蘇教)宗ノ宣教師ざういえーニ就キテ教ヲ受ケシガ、半四郎之ニ本邦ニ布教センコトヲ勸メシカバ、天文十七年(紀元三三〇八年)ざういえー鹿兒島ニ渡來シ、次ギテ肥前ヨリ山口、府内ニ入リテ大友大内二氏ノ信仰ヲ受ケ、此ノ教漸ク西國ニ弘布スルニ至リヌ、世ニ之ヲ切支丹ト云フ。

(一九) 左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ。

甲 細川頼之、 乙 吉田兼俱、 丙 一休和尚

(甲)細川頼之ハ足利將軍ノ庶流ナリシガ、義詮ノ遺託ヲ受ケテ義滿ノ傅トナリ、百方心ヲ盡シテ之ヲ輔導シ、後年幕政ノ頗ル舉リシハ實ニ頼之ノ力多キニ居ル、義滿一旦讒ヲ信ジテ頼之ヲ退ケシガ、後其ノ功勞ヲ念ヒ更ニ其ノ職(管領)ニ復セリ、頼之退職ノ時詠シタル人生五十愧無功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅拂難去、起將禪榻臥清風ノ詩ハ世ノ知ル所ナリ。

(乙)吉田兼俱ハ父祖以來世々吉田ノ祠官タリ、兼俱本朝ノ古傳ヲ説キ狂ダテ儒佛ノ説ニ附會シケルガ、明治ノ世ニ至ルマデ天下ノ神職大抵兼俱ヲ宗トシテ各自ニ吉田家ノ門流ト稱セリ。

(丙)一休和尚ハ高名ノ禪僧ニシテ其ノ滑稽頓智ハ世ノ徧ク知ル所ナリ、一休ハ京ノ紫野大徳寺ヲ開基シタリ。

(二〇)謙信、信玄、氏康ノ三雄ガ將略ヲ比較的ニ述ベヨ 凡ソ兵ヲ用フルコト神速勇猛ナルハ當時謙信ニ及ブ者ナク、信玄ハ僅カニ訓練ノ精妙ヲ以テ之ニ

敵シ、氏康ハ唯持重ノ策ヲ用ヒテ巧ニ其ノ鋒ヲ避ケシノミ、然レドモ謙信ハ性急ニ過ギ、義俠ニ過ギ、嚴酷ニ過ギタルヲ以テ、國ヲ富マシ民ヲ安ンジ、地ヲ拓キ、豪傑ヲ服スルノ術ハ、信玄氏康ニ及バザリキ。

第六編

織豊時代

織田氏ノ經略ヨリ關ヶ原ノ戰ニ至ル

(一)織田信秀ガ尊王ノ事實ヲ問フ 織田氏ハ平重盛ノ後裔ニシテ初メ越前ニ居リ後、尾張ニ移リシガ、信秀ニ至リテ遂ニ此ノ國ヲ押領セリ、信秀夙ニ尊王ノ志深ク、後奈良天皇ノ朝ニハ禁垣ヲ修繕シ、又伊勢外宮ノ假殿ヲモ造營セシ事アリキ。

(二)織田信長ガ一世經略事蹟ノ概要ヲ問フ 信長ハ信秀ノ子ナリ、倜儻ニシテ大志アリ、信秀ノ時ヨリ今川氏ト參河ヲ争ヒシガ、永祿二年(正徳町帝二二二〇年)今川義元大舉來攻シテ連リニ諸城ヲ陷ルニ方リ、信長寡兵ヲ以テ風雨ニ乘ジ、義元ヲ

桶峽ニ襲ヒテ之ヲ斬リシヨリ威名四隣ニ振ヘリ、此ノ時京師ニハ三好松永ノ徒暴横ナリシカバ、正親町天皇密旨ヲ信長ニ下シテ撥亂ノ事ヲ托シ給フ、信長乃チ武田信玄徳川家康ト交ヲ結び、先ヅ齋藤龍興ヲ亡ボシテ美濃ヲ略シ、近江ノ淺井長政ニ其ノ妹ヲ妻セ以テ上洛ノ計ヲナス、會々將軍義輝弑セラレテ弟義昭來リ投ゼシカバ、信長之ヲ奉ジテ近江ノ六角義賢ヲ破リ京師ニ入ル、尋イデア三好松永等信長ニ降り、京畿略定リシカバ、乃チ義昭ヲ立テ、將軍トナシキ、信長尊王ノ志亦厚ク此ノ時ニ於テ皇居ヲ修メテ舊制ニ復シ、米ヲ都下ニ貸シ其ノ息ヲ以テ皇室ノ費用ニ充テ、公卿ノ領地ヲ復シ、又伊勢ノ神宮ヲ改造シ、其ノ臣羽柴秀吉ヲシテ京師ヲ警衛セシメキ、信長大イニ四方ヲ經略セントシテ伊勢ノ北畠氏ヲ伐チ、轉ジテ越前ノ朝倉義景ヲ伐チシニ、近江ノ六角承禎、淺井長政、朝倉氏ヲ援ヒシカバ、信長姉川ニ激戰シテ大イニ之ヲ破レリ、此ヨリ先キ叡山ノ僧徒暴横ニシテ淺井氏等ト謀ヲ通ゼシカバ、信長痛ク之ヲ憎ミ、遂ニ叡

山ヲ圍ミテ堂塔ヲ焚キ僧徒ヲ鑿殺シテ其ノ領地ヲ收ム、此ヨリ叡山勢ヲ失ウテ單ニ宗旨ヲ傳フルニ過ギザリキ、尋イデア信長ハ淺井朝倉等ノ諸氏ヲ亡ボシ、漸ク近畿ヲ平定セリ、斯クテ信長從二位右大臣ニ任ジ右大將ヲ兼ネ威權日ニ熾ニ近江ノ安土ニ宏大ナル城郭ヲ築キテ之ニ居リ、柴田勝家ヲシテ北陸ヲ經略シテ上杉氏ニ當ラシメ、羽柴秀吉ヲ播磨ニ封ジテ中國ヲ謀ラシメ、丹羽長秀ヲシテ四國ヲ略セシメ、自ラ徳川家康ト兵ヲ併セテ武田勝頼ヲ伐チ、終ニ之ヲ甲斐ノ天目山ニ滅ボシメ、乃チ駿河ヲ家康ニ與ヘ、瀧川一益ヲシテ上野ニ居リテ關東ヲ制セシメタリ、是ノ時ニ當リ秀吉中國ヲ略シ毛利氏ヲ伐チテ備中ノ高松城ヲ圍ミタルニ、毛利輝元來援セシカバ、秀吉モ亦信長ノ後援ヲ乞フ、信長乃チ西下シテ之ニ會セントスルニ當リ、部將明智光秀叛シテ信長ガ居館ナル本能寺ヲ襲ヒテ之ヲ弑シ、併セテ其子信忠ヲ二條城ニ弑ス、時ニ天正十年(紀元二三)六月ナリキ。

(三) 信長ノ人トナリヲ論評セヨ 信長ハ材武英果ニシテ義理ニ明カニ、軍法ニ通ジ、又善ク人ヲ識リテ巧ニ之ヲ御使シ、殊ニ皇室ヲ尊崇シテ殆ド撥亂ノ功ヲ遂ゲタルハ、近古英雄中其ノ比ヲ見ザル所ナリ、然レドモ將士ヲ待スルコト往々峻刻ニ過ギ侮慢ヲ極メ、遂ニ修飾ヲ好ム光秀ノ如キ輩ノ怨ヲ買ヒタルハ、實ニ惜シムベキコトナリ。

(四) 豊臣秀吉出身ノ初メヨリ征韓前マデノ事略ヲ問フ 秀吉ハ尾張國中村ノ人ニシテ足輕木下彌右衛門ノ子ナリ、幼クシテ父ヲ喪ヒ、同村ノ童坊竹阿彌ニ養ハル、十六歳ノ時、家ヲ出デ遠州久能ノ城主松下之綱ノ家奴トナリシガ、故アリテ尾張ニ歸リ、木下藤吉郎ト稱シテ織田信長ニ仕ワ、秀吉事ニ臨ミテ敏捷機慧ナルコト往々人ノ意表ニ出ヅ、信長其ノ才ヲ器トシ漸ク之ヲ寵任シ、遂ニ擢ンデ、部將トセシニ屢戰功アリキ、秀吉、信長ノ驍將柴田勝家、丹羽長秀ノ勇名ヲ慕ヒ、自ラ姓ヲ羽柴ト改ム、信長、淺井氏ヲ滅ボスニ及ビ長濱城二十二

萬石ヲ賜フ、秀吉、信長ノ命ヲ奉ジ、西毛利氏ヲ伐ツテ高松城ヲ圍ムニ當リ、會主君殺害ニ遭フノ變報到リシカバ、急ニ毛利氏ト和シテ東上シ、山崎ノ一戰ニ逆臣明智光秀ヲ誅シタリ、秀吉功ヲ以テ左近衛少將ニ任ゼラレ威權漸ク熾ナリキ、然ルニ柴田勝家、瀧川一益其ノ威名ヲ嫉ミ、信長ノ遺孤神戸信孝ヲ奉ジテ秀吉ヲ除カントス、秀吉攻メテ一益ヲ降シ、信孝ヲ自殺セシメ、勝家ト賤ヶ岳ニ戰ヒテ大イニ之ヲ破リ、長驅シテ勝家ヲ越前北莊ニ圍ミテ之ヲ殺シ、北國ヲ經略シテ還リヌ、秀吉更ニ參議ニ任ジ、威望益盛ナルニ及ヒ、信長ノ遺孤北畠信雄、秀吉ト隙ヲ生ジ、徳川家康ノ援ヲ得テ秀吉ト小牧山ニ戰ヒシガ、秀吉ノ別軍長湫ニ大敗シテ遂ニ信雄、家康ト和ヲ講ゼリ、天正十二年秀吉長曾我部氏ヲ四國ニ攻メテ之ヲ降シ、同十三年越中ニ入り佐々成政ヲ攻メテ之ヲ降シ、轉ジテ越後ニ入り上杉景勝ト和シテ悉ク北陸ヲ定ム、同十五年兵ヲ九州ニ出シ先ツ龍造寺氏ヲ降シ、更ニ薩摩ヲ攻メテ島津氏ヲ降シ悉ク鎮西ヲ平定セリ、同

十八年相摸ニ入り北條氏ヲ滅ボシ、及ビ奥羽諸族ノ降ヲ納レテ悉ク東國ヲ定メ、抑我ガ國古來豪傑ノ世ニ出デシコト少カラズト雖モ、多クハ累代ノ餘業ニ藉リ、或ハ祖先ノ德澤ヲ資トスルニ過ギズ、而カモ身一介ノ奴僕ヨリ起リテ遂ニ海内ヲ戡定シ、天下ノ實權ヲ握ルニ至リタル英雄ハ、二千五百有餘年ノ歴史上前後唯一ノ秀吉アルノミ。

(五)秀吉大阪築造ノ事實ヲ問フ 秀吉、柴田氏ヲ滅ボスノ後、京畿ニ居リテ政ヲ執リシガ、此ノ時諸國ニ課シテ巨石大材ヲ運搬セシメ、攝津ノ大阪ニ築キテ居城トス、其ノ構造ノ宏壯偉大ナルコト海内第一ト稱セラル、此ノ地ハ古ノ難波津ニシテ中國樞要ノ海津タリシガ、此ヨリ百貨輻湊ノ地トナリヌ、今ノ大阪市即チ是ナリ。

(六)秀吉關白ニ任ジ并ニ豊臣ノ姓ヲ賜ハリシ事實ヲ問フ 秀吉微賤ヨリ起リテ元ト姓氏ナシ、初メニハ平氏ト稱シ、中頃ヨリ藤原氏ヲ稱セシガ、天下ノ實權ヲ握ルニ及ビ、征夷大將軍タランコトヲ欲セリ、然ルニ將軍ノ任ハ古來源氏ノ外ニ例ナケレバトテ、右大臣今出川晴季ト謀リテ關白トナリ、從一位ニ叙シ、太政大臣ニ進ミ、新ニ豊臣ノ姓ヲ賜ヒヌ、晩年職ヲ秀次ニ讓ルニ及ビ、更ニ自ヲ太閤ト稱セリ。

(七)後陽成天皇聚落行幸及ビ秀吉尊王ノ事實ヲ問フ 秀吉已ニ九州ヲ平ゲテ後、京師ノ内野ニ第宅ヲ營ミ壯麗華奢ヲ極メ聚落ト名ク、天正十六年四月、秀吉、聚落第二後陽成帝及ビ上皇(正親町上皇)ノ臨幸ヲ請ヒテ盛饗ヲ張リ、駐駕五日ニ及ベリ、此ノ時秀吉、諸大名ヲシテ皇室ヲ尊ビ、關白ノ命ニ背カザランコトヲ誓ハシム、又皇室ノ經費ヲ豊カニシ、廷臣ノ采邑ヲ増シ及ビ金帛ヲ朝廷ニ獻ゼシコト前後算ナク、且諸侯ニ課シテ京師ヲ修理セシメキ。

(八)豊臣氏ノ五奉行及ビ五大老ノ制ヲ問フ 秀吉已ニ海内ヲ統一スルノ後、淺野長政、石田三成、増田長盛ヲシテ法令、土木、訟獄ノ事ヲ掌ラシメ、長東

正家ヲシテ錢穀ノ事ヲ掌ラシメ、前田玄以ヲシテ京都所司代トナリ、市政及ビ社寺ノ事ヲ掌ラシム、之ヲ五奉行ト云フ、又徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家ハ専ラ機務ヲ參決ス、之ヲ五大老ト稱シキ。

(九)豊臣氏ノ田制、量制及ビ幣制ヲ問フ 秀吉ガ實施セシ新法中最モ著シキ者ハ田制、税法、幣制等ナリトス、抑田制ハ足利時代ヨリ一段三百歩ノ定メアリシヲ、秀吉取リテ一般ノ制トナシ、後世之ニ因レリ、石高ヲ以テ田祿ヲ數フルコトモ亦此ノ頃ヨリ始マレリ、石高ハ收穫ノ畝ノ石數ニシテ平均上田一步ヨリ畝一升ヲ生ズル者ト見做シテ定メタル者トス、而シテ收穫ノ三分二ヲ納メシムルヲ一般ノ税法トナシキ、所謂二公一民ノ法ナリ、當時有名ノ算術家長東正家。古制ノ宣旨樹ヲ改正シテ方四寸九分深サ二寸七分ト定ム、今ノ京樹是ナリ、又貨幣ハ從來永樂錢ノ外、砂金、板金等行ハレシガ、是等ハ秤量分割等ノ手數ヲ要スルヲ以テ、天正年中、大判小判ヲ造リ、永樂錢一貫文ヲ小判一枚即

チ金一兩ニ換ヘ、小判十枚ヲ以テ大判一枚ニ換フルノ制トナシキ、此ノ頃毛利氏、石見金山ヲ領シ、上杉氏、佐渡金山ヲ領セシガ、慶長年中皆官府ノ手ニ屬シ、伊豆金山ト共ニ採掘頗ル盛ニナリ、隨ツテ種々ノ金銀貨ヲ發行スルニ至リヌ、所謂慶長金是ナリ、

(一〇)秀吉征韓ノ顛末概要ヲ問フ 秀吉素ヨリ朝鮮、支那ヲ征服スルノ志アリ、海内己ニ統一スルニ及ビ、更ニ武ヲ海外ニ耀サントテ先ヅ明國ヲ伐ツニ決シ、乃チ對馬國主宗義智ニ命ジ、朝鮮王李昭ニ諭シテ嚮導タラシメントス、李昭明ヲ怖レテ從ハズ、秀吉怒リテ更ニ朝鮮ヲ征スルニ決シ、職ヲ從子秀次ニ讓リ、文祿元年(後陽成帝二二五二年)行營ヲ肥前ノ名護屋ニ置キ、西國ノ兵ヲ徵發シ、諸將ヲ遣リテ朝鮮ニ入ラシム、兵凡ソ十三萬、浮田秀家元帥タリ、加藤清正、小西行長先鋒タリ、舳艫相衝ミテ釜山浦ニ至ル、九鬼嘉隆、藤堂高虎等別ニ水軍ニ將トシテ海陸並ニ進ムニ向フ所前ナク、遂ニ王城ヲ陷レシカバ、李昭義州ニ走り援ヲ

明ニ乞フ、時ニ明ハ神宗ノ世ニシテ國勢頗ル衰ヘシガ、之ヲ聞キテ大イニ愕キ、祖承訓ヲ將トシ大軍ヲ以テ來リ援フ、行長迎ヘテ之ヲ破リヌ、明更ニ李如松ヲ將トシテ來リ援ヒ、行長ノ軍利アラザリシガ、小早川隆景等更ニ如松ト碧蹄館ニ戰ヒテ大イニ之ヲ破レリ、此ヨリ先キ明恐怖ヲ懷キ説士沈惟敬ヲシテ和ヲ議セシメントシケルガ、此ニ至リ惟敬、行長ニ就キテ和ヲ議シ、七事ヲ約シテ我が兵ヲ解キヌ、然ルニ惟敬間ニ居テ辭命ヲ變ジ、明ノ使伏見ニ至リテ秀吉ニ謁シ冊書ヲ呈シテ、秀吉ヲ日本國王ユ封ズト云フニ至リテ、秀吉烈火ノ如ク怒リテ冊書ヲ扯裂シ、明使ヲ逐ヒ、再ビ軍ヲ起シ、小早川秀秋ヲ以テ元帥トシ、兩先鋒ハ舊ニ依リ、兵凡ソ十二萬再ビ朝鮮ヲ征ス、明兵復來リ援ヒ相持シテ年ヲ踰ユ然ルニ慶長三年(紀元二二五八年)秀吉病ニ罹リテ京ニ薨ズ年六十三、遺命シテ征韓ノ軍ヲ撤回セシム、在外ノ諸將既ニ役ニ倦ミタルニ、會此ノ命ニ接セシカバ、各兵ヲ解キテ歸リヌ、此ノ役實ニ前後七年ニ彌レリ。

(一一)關ヶ原ノ戰ノ顛末ヲ問フ 秀吉ノ薨後ハ五大老ノ中、徳川家康ノ權力最モ熾ナリ、五奉行ノ一人タル石田三成機畧材幹人ニ絶レシニヨリ、秀吉ノ在時深ク寵遇ヲ受ケシガ、此ニ至リ家康ガ豊臣氏ニ利セザルヲ名トシテ陰ニ私利ヲ逞ウセンコトヲ謀リ、前田利家薨ジテ後ハ上杉、毛利、浮田等ノ諸將ト結ビテ、專ラ家康ヲ除クノ謀ヲ運セリ、慶長四年上杉景勝ハ三成ト明年ヲ以テ東西一時ニ兵ヲ擧ゲンコトヲ約シ、父祖ノ法會ヲ營ムニ托シテ領地會津ニ還ル、家康其ノ西上ヲ勸ムレドモ期ヲ踰エテ至ラズ五年(紀元二二六〇年)家康遂ニ其ノ臣鳥居元忠ヲ伏見城ニ留メ、自ラ大兵ヲ帥キテ東セシニ、三成虛ニ乘ジテ毛利輝元、浮田秀家、小早川秀秋、島津義弘、小西行長、大谷義隆等四十餘侯ト合シ、輝元ヲ盟主トシテ兵ヲ擧グ、其ノ勢凡ソ十二萬八千餘人、先ヅ伏見城ヲ陥レテ元忠ヲ殺シ、進ンデ美濃ノ大垣ニ至ル、時ニ家康下野ノ小山ニ在リ、變ヲ聞キテ乃チ庶長子秀康ヲシテ景勝ニ當ラシメ、直チニ軍ヲ回シテ自ラ東海道ヨリ進ミ、世子秀

忠ヲシテ東山道ヨリ進マシム、衆七萬五千人、福島正則、淺野長政、黒田孝高等三成ヲ惡ム者皆家康ニ屬セリ、九月十五日東西ノ兩軍美濃ノ關ヶ原ニ會戦ス、勝敗未ダ決セザリシニ、西軍ノ將小早川秀秋、約ニ背キテ大谷吉隆ヲ攻メ、東軍勢ニ乘ジ鼓譟シテ進ム、西軍遂ニ大イニ敗レ、秀家、三成、行長等或ハ自殺シ或ハ捕斬セラレ、輝元、義弘等出デ降リヌ、家康大坂ニ入り大イニ賞罰ヲ行ヒ、秀家ヲ流シ、輝元ノ封六國ヲ削リテ周防長門ヲ與ヘ、景勝ノ封百萬石ヲ收メテ米澤三十萬石ニ代ヘ、秀頼ハ與リ知ラザル所ナリトテ攝河泉ノ六十五萬石ヲ與フ、其ノ他賞罰差アリ、此ノ役後天下ノ權全ク家康ニ歸シタルヲ以テ世ニ之ヲ天下分ケ目ノ戰ト稱ス。

第七編 德川時代 德川幕府ノ創立ヨリ
大政奉還ニ至ル

(一) 德川氏ノ祖先世系ヲ問フ 德川氏ハ新田義重(源義家ノ孫)ノ裔ニシテ世々上野

國德川村ニ居リシガ、八世ノ孫親氏初メテ參河ニ來リテ松平氏ヲ冒セリ、其ノ孫信光、西參河ヲ略シテ安祥ノ城主タリ其ノ玄孫清康殆ド東參河ヲ略シテ岡崎城ニ居ル、其ノ子廣忠、廣忠ノ子ハ即チ家康ナリ。

(二) 江戸幕府ノ創立ヲ問フ 慶長八年(紀元二三三三年)家康征夷大將軍ニ拜セラレ、右大臣ニ累遷シ、淳和獎學兩院ノ別當兼源氏長者ニ補セラル、(爾來德川氏各代皆此ノ職ヲ世襲ス)家康乃チ幕府ヲ江戸ニ開キヌ、尋イデ職ヲ其ノ子秀忠ニ讓リ自ラ駿府ニ老シ、本多正純ヲ執政トシ、軍國ノ大事ハ總ベテ決テ駿府ニ取レリ。

(三) 豊臣氏滅亡ノ顛末ヲ問フ 慶長十九年四月、此ヨリ先キ家康ガ秀頼ニ勸メテ再建セシメシ所ノ方廣寺ノ銅佛落成ス、然ルニ其ノ鐘銘ニ、國家安康ノ句アリトテ家康大イニ憤リ、是我ガ名ヲ截斷シテ呪咀スルモノナリトシ、其ノ落成式舉行ヲ停ム、秀頼ノ老臣片桐且元憂懼措ク能ハズ、百方陳謝シテ家康ノ怒ヲ解カンコトヲ努メシカド、淀君(秀頼ノ生母)ノ寵臣大野治長輕卒無謀ニシテ、唯大

坂城ノ堅固ト秀吉ノ餘威トヲ負ミ、秀頼ニ勸メテ徳川氏ト衡テ争フニ決シ、頻リニ諸國浮浪ノ士ヲ召募ス、而カモ諸侯ハ一人モ之ニ應ズル者ナカリキ、慶長十九年(紀元二二七四年)十月家康、秀忠兵十五萬ヲ率キテ大阪城ヲ圍ム、攻守數十日ニシテ和ヲ議シ、城ノ外湟ヲ埋ムルコトヲ約ス、家康誤レルマネシテ内湟ヲモ埋メシメタリ、此ノ役十二月ニ至リテ平グ、故ニ大阪冬陣ト云フ、豊臣氏ノ將士愈々憤怨シ、翌元和元年(紀元二二七五年)五月再舉テ謀ル、會スル者浪士十五萬人、家康父子更ニ大軍ヲ率キテ西上シ、戦争三日、大阪ノ良將、木村重成、眞田幸村後藤基次等皆戰死シテ城遂ニ陥リ、秀頼母子城中ニ自盡シ、豊臣氏亡ビヌ、此ノ役四五ノ兩月ニ彌リタルヲ以テ世ニ之ヲ大阪夏陣ト云フ。

(四)徳川氏諸侯配置ノ政略ヲ問フ 家康深ク鎌倉、室町ノ利弊ニ鑒ミ、諸侯配置ノ政略ニ於テハ、用意頗ル周密精到ヲ究メタリ、先ヅ諸侯ヲバ譜第トヤ外様ノ二種ニ分チ、父祖以來奉仕セル者ヲ譜第トシ、關原ノ役以後服從セシ者ヲ外様

トナシキ、而シテ關八州ヲ根本ノ地ト定メ、東海東山ヨリ畿内ニ至ルマデハ、親藩若シグハ譜代諸侯ヲ置キ、外様諸侯ハ一般ニ偏陬ノ地ニ移シ、尙譜代諸侯ヲ其ノ間ニ錯置シテ犬牙相制スルノ勢ヲ爲サシメ、而シテ各要所ハ幕府ノ直轄トナシテ、郡代代官ヲ置キ、城壘ニハ城代ヲ置ケリ親藩ハ即チ家康ノ子弟ノ封ニ就ケル者ニシテ、第六子義直ハ尾張ニ、第七子頼宣ハ紀伊ニ、季子頼房ハ常陸ノ水戸ニ封ゼラル、之ヲ三家ト稱ス、其ノ他庶長子秀康ハ越前ヲ領ス、之ヲ家門ト云フ、諸侯ヲシテ領内一城ヲ築クニ過グルテ得ザラシメ、萬石以上ヲ大名トシ、之ニ及バザル者ヲ旗ハタモト下ト稱シテ幕府ノ麾下ニ隸セシメタリ。

(五)徳川氏當初ノ外交事情ヲ問フ 家康ハ外交ニ付キテ頗ル識見アリシ者ノ如シ、其ノ豊臣氏ニ代ルヤ、首トシテ朝鮮ノ俘虜ヲ返シテ韓國ト好ミヲ結ビケルガ、朝鮮之ヲ徳トシテ爾後來聘永ク絶エザリキ、又琉球ヲ媒トシテ書ヲ支那帝ニ贈リ、貿易ヲ尋ガント欲スルノ意ヲ致シ、ニ、支那政府之ニ答ヘザリシカ

ド、商船ハ舊ニ依リテ互ニ來往セリ、慶長ノ初年ニ安南、あやむ、るずん、か
んぼぢや等南洋諸國ノ商船來リ、又亞米利加洲ニ於ケル西班牙ノ殖民地ナルの
びすばんノ船モ來リシガ、家康之ニ遣ハシ、返翰ニ「物産ノ交通ハ最モ希望ス
ル所ナリ、但シ宗教ニ於テハ我が國自ラ國教アリ、且ツ國禁アルヲ以テ之ヲ謝絶
ス」ト云ヘリ、當時京堺等ノ豪商等官許ノ船舶ヲ以テ彼ノ諸國ニ通商シ、之ヲ
御朱印船ト云ヒキ、駿河ノ人山田長政ガ、あやむ王ヲ佐ケテ威ヲ印度支那ニ振
ヒシハ、實ニ此ノ頃ノ事ナリ、尋イデ阿蘭陀及ビ英吉利ノ船モ亦來リテ通商ヲ
求メシニ、家康吏員ヲ遣ハシ、是等ノ西洋人ニ就キテ、五洲ノ形勢ヲ聞取り、
益々通商ノ望ヲ懷キ、人ヲ歐羅巴ニ派遣シテ宗教風俗等ヲ調査セシメキ、此ノ頃
又伊達政宗ハ支倉常長ヲ羅馬ニ遣ハシテ好ヲ通ゼリ。

(六)三代將軍家光ノ時徳川氏威權ノ確立セシ事由ヲ問フ 家光、英邁果斷ニ
シテ銳意治ヲ圖レリ、一日、外様大名ヲ營中ニ延キ、之ニ告ゲテ曰ク、我が祖

考ハ嘗テ卿等ト同僚タリシヲ以テ特ニ待遇ノ禮ヲ厚フセリ、今予ハ襁褓ヨリシ
テ既ニ將軍タルヲ以テ自ラ祖考ト異ナル所アリ、自今卿等ヲ待ツコト當ニ譜代
ト同ジウスベシ、尙心ニ慊ラズハ、宜シク各國ニ就キテ思考スベシ、家光旗鼓
ヲ以テ相見エルヲ辭セズト、諸侯唯々トシテ命ヲ奉ゼリ、徳川氏威權ノ確立セ
シハ、實ニ此時ヲ以テ起元トス。

(七)武家法度及ビ參觀交代ノ制ヲ問フ 元和元年大坂落城ノ後、家康、武家
法度十三條ヲ布キ、文武ノ政ヲ勵マシ、大名ノ參觀ヲ怠ラザシメ、新ニ城郭
ヲ築キ、私ニ兵ヲ動カシ、黨ヲ結ビ、及ビ姻ヲ通ズルコトヲ禁ジタリ、參觀交
代ハ慶長中、前田利長江戸ニ至リテ將軍ニ謁セシヲ初メトシテ、諸侯間ニ至ル
者アリシガ、家光ノ時更ニ其ノ制ヲ布キ、隔年ニ江戸ニ至ラシメ、毎年四月ヲ
期シテ交代セシム、又諸侯ノ妻孥ノ領國ニ在ル者ハ、盡ク此ノ年ヲ以テ江戸ニ
至ラシム、即チ人質トスルノ策ナリ。

(八)徳川幕府ノ職制ヲ問フ 幕府ノ職制ハ家光ニ至リテ頗ル整ヒ、八代將軍吉宗ニ至リテ更ニ完備セリ、幕府ノ内閣ヲ用部屋ト云ヒ、將軍政ヲ親ラシ、大老、老中、若年寄コ、ニ會ス、大老ハ常置ノ職ナラズ、老中ハ大抵五人ニシテ、重大ナル政務ヲ處決シ、朝廷及ビ大名ノ事ヲ掌ル、若年寄ハ老中ニ副ヒ、幕府麾下ノ士ヲ統ブ、次ニ三奉行アリ、寺社奉行ハ社寺并ニ神官僧侶ヲ管督シ、勘定奉行ハ會計及ビ幕府直轄ノ地ノ訟獄ヲ理シ、町奉行ハ江戸市中ノ政務ヲ掌リ、大事アレバ三奉行評定所ニ會シテ之ヲ處決ス、其ノ他目付、大目付アリ、老中、若年寄以下及ビ旗下ノ士ノ非違ヲ監察ス、此等ヲ幕府ノ重職トス、而シテ地方ニハ京師ニ所司代アリテ禁裡ヲ守護シ、京都ノ市政ヲ掌リ、又近畿關西ヲ控制ス、伏見、大阪、奈良、堺、長崎、佐渡ニハ城代若シクハ奉行ヲ置ケリ。

(九)家光ノ外交處置ヲ問フ。 家光ノ外交政略ハ全ク家康ニ反對セリ、家光ハ耶穌教徒ノ内國ヲ亂スノ機アルヲ察シ、斷然鎖港ノ政略ヲ取り、寛永十二年南洋西洋諸國ノ船舶渡來ヲ拒絕セリ、サレド蘭國ハ其ノ國耶穌新教ヲ奉ジ、葡國ノ教義トハ全ク異ナル旨ヲ辨明セシカバ、支那商船ト同ジク長崎ニテ貿易スルヲ許サレタリ、内國ニテ大船巨舶ヲ造ルコトヲ禁止シタルモ、亦家光ノ令スル所ナリキ。

(一〇)鄭芝龍及ビ鄭成功ノ事實ヲ問フ。 當時支那ニテハ明朝、滿清ニ滅ボサレントシ、明ノ民往々我が國ニ歸化シケルガ、鄭芝龍ト云フ者肥前ノ平戸ニ寓シテ平戸一官ト稱シ、日本人ヲ娶リテ鄭成功ヲ生ム即チ國姓爺是ナリ、後二人本國ニ歸リテ義兵ヲ擧ゲ、明朝ヲ恢復セントテ、援ヲ我ニ請ヘリ、當時紀伊大納言賴宣行カンコトヲ請ヒシカド、幕府ハ之ヲ援フノ義務ナシトシテ之ヲ允サザリキ。

(一一)天草一揆ノ顛末ヲ問フ 當時耶穌教ノ弘布セシ地ハ四國、九州、京、大阪、仙臺等ニシテ、就中九州最モ盛ナリキ、關原ノ役ニ亡ビタル小西、大友

ノ餘黨ニシテ、耶蘇教ヲ信奉スル者所在ニ潜伏セシガ、是等ノ徒、肥前島原ノ人民ガ領主ヲ怨ムニ乗ジ、寛永十四年(明正天皇二 二九七年)同地ノ民ヲ煽動シ、天草島ニ據リテ亂ヲ起セリ、家光乃チ板倉重昌ヲ將トシテ西國ノ諸侯ヲ節度シ以テ之ヲ討ゼシメシニ、一揆等老幼婦女ニ至ルマデ防戰甚ダカメ、討手屢、利ヲ失ヒケレバ、家光更ニ松平信綱ヲ大將トシテ差遣スルニ至リ、重昌慍リテ孤軍城ニ登リ遂ニ戰死シタリ、信綱モ輒ク之ニ勝チ難キヲ見テ、僅カニ兵糧攻ノ策ニ頼リ一揆ヲ窘シメ、且蘭船ニ應援ヲ乞ヒテ大砲ヲ發射セシメナドシテ、辛クモ城ヲ陥レ、一揆四萬人ヲ屠リ殲シヌ、此ノ亂後、耶蘇教ノ禁愈、嚴酷トナリ、村々莊屋ノ前ニ建ツル所ノ制札ニモ「切支丹耶蘇宗門堅ク御停止」ノ旨ヲ記シ、又奴婢ヲ傭フニモ、保證人ヲシテ、本人切支丹宗ニ非ザル趣ヲ證書ニ記載セシムルニ至レリ。

(一二)家光ノ時ノ大工事及ビ東叡山創建ノ深意ヲ問フ 家光ハ江戸城及ビ日

光廟ノ建築ヲ諸侯ニ課シテ大土工ヲ起セリ、日光廟ノ壯麗偉大ナルコトハ言フヲ俟タズ、當時左甚五郎ナル者アリテ彫刻ノ妙ヲ極ムル等、一般ニ建築術、彫刻術等ハ著シク進歩セリ、家光又僧天海ノ勸ヲ容レテ江戸ノ東北ナル忍岡ニ東叡山寛永寺ヲ創建シ以テ京ノ比叡山ニ擬シ、且法親王ヲ申シ降シテ日光山ノ座主トシ、東叡山ヲ兼掌セシメ、輪王寺宮ト稱ス、是北條氏が親王ヲ鎌倉ニ申シ下シタル類ノ用意ナリト云フ。

(一三)當時佛教宗派ノ盛衰ヲ問フ 佛教宗派ハ法相、真言、律、天台、禪(曹洞、臨濟)黃蘗、淨土、一向、融通念佛、法華、時宗ニシテ、就中一向宗最モ盛ニ行ハレヌ、後水尾上皇禪ヲ信ジ、明僧隱元ヲ招聘シ給ヒ、四代將軍家綱亦之ニ歸依シテ、爲メニ萬福寺ヲ山城ノ宇治ニ建ツ、此ヨリ禪宗ニ黃蘗ノ一派アリ、降ツテ寛政ノ頃ニ至リテハ、全國ニ通シテ寺院ノ數四十六萬九千餘アリキト云フ。

(一四)徳川幕府ノ皇室ニ對スル所置ヲ問フ 家康、皇室ニ供御料ヲ獻リ、百

官ノ采邑ヲ定メ、又大名ニ課シテ皇居ヲ修ムル等陽ニ尊崇ノ意ヲ表セシト雖モ、陰ニハ巧ニ皇室ヲ抑制シ奉レリ、即千元和元年、關白ニ條昭實ト謀リ、武家法度ト共ニ禁中條目十七條ヲ選ビ、天子ハ專ラ和歌ヲ學ビ、現任三公ハ親王ノ上ニ班シ、武家ノ官位ハ員外トスベシナド規定セリ、又常ニ京都所司代ヲシテ宮廷ノ動靜ヲ監察セシムル等專ラ抑制ノ處置ヲ施シタリ。

(一五)後光明天皇ノ果斷及ビ火葬廢止ノ事由ヲ問フ 後光明天皇、英明ニシテ學ヲ好ミ、又武ヲ講ジ、舊例ヲ破リテ四書ノ新註ヲ講ゼシメ給フ等、果斷ノ御振舞頗ル多カリキ、帝常ニ擊劔ヲ學ビ給ヒシニ、所司代板倉重宗、幕府ノ嫌疑ヲ來サンコトヲ説キテ、之ヲ諫メシニ、帝色ヲ正シクシテ之ヲ斥ケ給フ、幕府之ヲ聞キテ疑懼セシトゾ、帝又聖廟ヲ建テ、大學寮ヲ復シ、廢典ヲ興シ、風俗ヲモ矯正センコトヲ圖ラセ給ヒシガ、不幸ニシテ病ニ罹リ早ク崩ジ給ヘリ、大葬ハ持統帝以來火葬ヲ用ヒシガ、此ノ時京都ノ魚買六郎兵衛ト云フ者、帝ノ

遺志ナリトテ、公卿ノ間ニ周旋シ、火葬ヲ停メンコトヲ請フ、廷議遂ニ之ヲ納レ、爾後大葬ニハ火葬ヲ廢スルコト、ナリヌ。

(一六)由井正雪ノ變亂ヲ問フ 後光明帝ノ慶安四年、將軍家光薨ジ、子家綱繼グ、駿河ノ人由井正雪、喪ニ乘ジテ亂ヲ作シキ、正雪ハ楠氏ノ苗裔ナリト稱シ、楠流ノ軍學ヲ以テ名ヲ得タリ、槍術家丸橋忠彌及ビ諸國浮浪ノ徒之ニ與シ、正雪ハ駿府ニ赴キ、忠彌ハ江戸ニ在リテ東西一時ニ燒討ノ策ヲ運ラシケルガ、事覺レテ、正雪ハ自殺シ、忠彌ハ捕ヘラレテ磔刑ニ處セラレタリ。

(一七)家綱ノ世ニ海運開通セシ事實ヲ問フ 京及ビ關東間ノ海路ハ、豐公小田原攻ノ時ヨリ開ケタレド、奥羽ヘノ海路ハ未ダ通ゼザリキ、然ルニ徳川三代ノ太平ニテ、江戸漸ク殷繁ニ赴キ、人口從ツテ増加シ、到底西國ノ物産ノミニテ、其ノ衣食ヲ給スルニ足ラザルガ故ニ、更ニ仙臺米ヲ始メ、奥羽ノ物産ヲ回漕シテ之ニ充ツルノ策ヲ取り、乃チ事業家河村瑞賢ヲシテ之ヲ處理セシメ、事

成ルニ及ビテ都鄙共ニ其ノ便ヲ喜ビキ、元來奥州ノ物産ハ東海廻シナルガ、此ニ至リ羽州ノ物産ハ北海ヨリ長州下ノ關ヲ廻リ、瀬戸内海ヲ經テ江戸ニ達スルコト、ナレリ。

(一八)下馬將軍トハ何ゾ 將軍家綱、晩年政ニ倦ミ、機務ヲ舉ゲテ大老酒井忠清ニ委セリ、忠清威福ヲ擅ニシ、請託賄賂公ニ行ハル、其ノ邸江戸城ノ下馬牌ニ近カリシカバ、世人呼ンデ下馬將軍ト云ヘリ。

(一九)五代將軍綱吉ノ明斷及ビ尊王ノ美譽ヲ問フ 綱吉嚴明ニシテ果斷ナリ、襲職ノ初メ、親藩高田侯松平光長、家亂レテ、老臣小栗政矩奸謀ヲ逞ウセシガ、綱吉親ヲ審理裁決シテ光長ノ封ヲ奪ヒ、政矩ニ死ヲ賜ヒシカバ、中外皆其ノ明斷ニ服セリ、綱吉又貞享四年十一月(東山天皇ノ朝)ヲ以テ、大嘗會ヲ復シ、尋イデ又賀茂祭ヲ復セリ、歷代天皇ノ山陵ハ、喪亂ヲ經テ概テ荒廢ニ屬シ、加之所在不明ノ者少カラザリシガ、綱吉、細井廣澤ノ議ヲ用ヒテ、山陵ヲ探求シ、神武帝以

下、崇光帝ニ至ルマデ六十六陵ヲ得テ、之ヲ修補セリ、其ノ他禁裡仙洞ノ御料ヲ増進スル等頗ル尊奉ノ意ヲ盡クシタリ。

(二〇)家康ヨリ綱吉ノ世ニ至ルマデノ文教興隆ノ狀ヲ問フ 家康、喪亂ノ後ヲ承ケテ、大イニ文教ヲ興スニ意アリ、元和偃武ノ後ハ、清原秀賢、藤原肅、林道春等ヲ召シテ、屢、經史ヲ講ゼシメ、活字ヲ以テ舊典ヲ刊行スル等只管文學ヲ獎勵セシカバ、絶エテ久シキ儒學再ビ興隆ヲ見ルニ至リヌ、降ツテ秀忠、家光ノ世ニハ、著シキ進歩ヲ視ザリシガ、綱吉ノ時ニ及ビテハ、儒學更ニ大イニ興レリ、綱吉素ヨリ經典ニ通ジ、屢、列侯諸司ヲ召シテ自ラ經書ヲ講ジキ、此ヨリ先キ林信勝(道春)ガ建ツル所ノ忍岡ノ聖廟ヲ湯島臺ニ移シテ官祀トナシ、祭田ヲ置キテ毎歲春秋ニ釋奠ノ儀ヲ修シ、又學舎ヲ設ケ林信篤(信勝ノ孫)等ヲシテ書ヲ講ゼシム、昌平齋是ナリ、儒學久シク緇徒ノ手ニ歸セシヨリ儒者モ亦僧侶ト姿ヲ同ジウセシガ、爰ニ至リテ信篤ニ蓄髮セシメ、從五位下大學頭ニ叙任シ以テ世襲ト

セリ、諸國ノ儒臣皆之ニ効ヒ、争ウテ髮ヲ蓄フルニ至ル、是ニ於テ文教ハ竿頭更ニ竿ヲ進メ、蔚然トシテ勃興セリ。

(二一)江戸時代ノ儒學門派ヲ問フ 藤原惺窩首トシテ程朱ノ學ヲ唱ヘシガ、其ノ門ニ林信勝、松本遐年等アリ、寛永ノ頃、近江ノ人、中江藤樹、明ノ王陽明ノ說ヲ唱ヘ、德行ヲ以テ稱セラル、其ノ門ニ熊澤蕃山アリ、經濟ノ術ニ長ジ、備前侯池田光政ニ仕ヘテ、大イニ治績ヲ舉ゲタリ、京都ノ人山崎闇齋ハ初メ程朱學ヲ悅ビシガ、後ニ神道ニ歸シ、易理ヲ以テ之ヲ說キ、垂加流ノ神道ヲ唱ヘ、大イニ世ニ行ハル、蕃山ト同時ニ京都ノ人伊藤仁齋、宋學ヲ排斥シテ古學ヲ立テ、京都ニ堀川塾ヲ開ク、其ノ子東涯博識ノ名高カリキ、當時江戸ノ人荻生徂徠、仁齋ニ拮抗シテ明ノ李千鱗、王世貞ニ倣ヒ、古文辭ノ學ヲ立ツ、其ノ門ニ太宰春臺、服部南郭等アリ、此ヨリ先キ京都ノ人木下順庵、松本遐年ノ門ヨリ出デテ、其ノ學唐宋ヲ派別セズ、博通不變ヲ以テ旨トス、其ノ門ニ新井白石、

室鳩巢等アリ。斯ク儒者各主說ヲ異ニセシニ由リ、其ノ間ニ自ラ門派ノ争越リヌ。

(二二)徳川光圀ノ事蹟ヲ問フ 光圀ハ水戸藩主頼房ノ子ニシテ幼ヨリ岐嶷、兄ヲ踰エテ封ヲ襲ギシガ、年十八ノ時、史記ノ伯夷傳ヲ讀ミテ大イニ感ズル所アリ、修史ノ志ヲ起シ、明曆ノ初、彰考館ヲ江戸駒込ノ邸ニ開キ、三宅緝明、栗山愿、安積覺等ノ俊才ヲ聘シテ典籍ヲ蒐集シ、國史編纂ニ從事ス、元祿十年帝王本紀成リシガ、紀中弘文天皇ヲ本紀ニ掲ゲ、南北兩朝ノ正閏ヲ正シ、及ビ神功皇后ヲ后妃列傳ニ收メテ本紀ニ加ヘザリシガ如キ、皆光圀ノ卓見ニ出デタリ、其ノ他禮儀類典五百十卷、扶桑拾遺集三十卷等有益ノ撰著多シ、光圀曾テ楠正成ノ湊川ノ墳墓ヲ修メ、碑ヲ建テ自ラ題シテ嗚呼忠臣楠子之墓ト云ヒキ、光圀常ニ大義名分ヲ說キ、學問ヲ獎勵セシカバ、一藩ノ士風皆之ニ薰化シ、王政維新ノ鴻業此ニ淵源スルモノ少ナカラズ、元祿十二年光圀薨ジテ後、子孫修

史ノ遺志ヲ紹ギ、列傳ヲ編纂シ、合セテ二百四十三卷トス、大日本史即チ是ナリ。

(二三) 綱吉ノ租税法ヲ問フ 從來田ハ上中下ノ三等ニ分レ、歷代收穫ノ見積リハ皆其ノ上田ヲ標準トシケルガ、綱吉ノ時ニ至リ、上々田及ビ下々田ノ二等ヲ増シ、上田ノ見積ハ、豐臣氏ノ如ク一坪一升トシ、上々田ニハ一坪一合トシタリ、是見積ノ苛酷ニ失スルニ非ズ、實際農業進歩シテ收穫増加シタルニ由ルナラン。

(二四) 犬公方トハ何ゾ 綱吉子ヲ亡ヒテ嗣ナシ、僧隆光、ソハ前生多殺ノ報ナレバ、殺生ヲ禁ゼザルベカラズ、而シテ將軍ノ生歲ハ戌ニ在リ、宜シク犬ヲ愛重スベシト説キシニ、綱吉之ヲ信ジ、殺生禁斷ノ令ヲ布キ、犬ヲ集メテ之ヲ養シ、犬ヲ殺ス者ハ處スルニ極刑ヲ以テス、士民大イニ困シミキ、犬公方ノ稱此ニ起ル。

(二五) 綱吉ノ惡幣制ヲ問フ 綱吉、晩年ニ嬖臣柳澤吉保等ヲ寵用シテ奢侈度ナク、數々遊行ヲ事トシ、及ビ能樂ヲ張ル等ヨリシテ府帑空竭シ、終ニハ日光社參ノ費用ダニ辨シ難キ程ニナリケレバ、貨幣ニ他金ヲ混ジテ其ノ數ヲ二倍ニセントノ議ヲ採用シ、乃チ金貨ニハ銀、銅、銀貨ニハ銅、錫各、半量以上ヲ混ジテ改鑄シタリ、元祿ニ鑄タルハ元字金、寶永ニ鑄タルハ寶字金トテ、結局金貨ノ純金量僅カニ四分一マデニ減ゼリ、幕府ハ之ヲ慶長金同様ニ通用センコトヲ勸告シタレド、民間ニテハ辛ウジテ五分一ノ相當ニテ通用シタリ、是ヨリ物價漸ク騰貴シテ人民困難ヲ極メタリ。

(二六) 元祿時代ノ風俗ヲ問フ 貞享元祿ノ頃ハ、世上ノ風俗一般ニ改マリ、昔ハ女ノ帶甚ダ狹カリシガ、今ハ幅八九寸ニ及ビ、昔ハ振袖ノ長サ七八寸ナリシガ、今ハ二尺以上ニ及ビ、其ノ他男子ノ肩衣モ漸々廣クナル等、專ラ華美ノ風ヲ成シタリ、サレバ後世之ヲ元祿風ト稱ヘテ、風俗變遷ノ一模式トナセリ。

(二七)元祿時代ノ文藝技術ノ發達ヲ問フ。 文藝ニハ俳諧盛ニ行ハレ、松永貞徳、西山宗因、松尾芭蕉等ノ名匠輩出シ、小説モ亦頗ル盛ニシテ、天和貞享ノ頃、井原西鶴アリ、尋イデ八文字屋自笑、江島其碩アリテ所謂八文字屋本ヲ著セリ、之ト同時ニ近松門左衛門出デテ院本戯曲ヲ作り、何レモ巧ニ人情ヲ描シ出シタリ、故ニ後世稱シテ元祿文學ト云フ。

繪畫ハ此ノ時代ノ頃ニ狩野探幽(守信)出デテ丹青ノ妙ヲ擅ニシ、元祿ノ頃尾形光琳出デテ光琳派ヲ立テ、英一蝶、狩野派ヨリ出デテ亦一派ヲ成セリ、浮世畫ハ此時代ノ初ニ岩佐又兵衛アリ、尋イデ菱川師宣、鳥居清信等出デテ妙手ノ名高カリキ。

漆工ハ、増上寺、日光ノ靈屋建設ノ頃ヨリ著シク進歩シテ、本阿彌光悅最モ此ノ術ニ名アリシガ、元祿ノ頃ニハ名士頻々輩出シ、就中青海勘七最モ著ル、當時ノ漆器ハ總テ常憲院(編吉ノ説)時代物トテ後世甚ダ之ヲ尙ビキ、殊ニ蒔繪ハ、尾形光琳一機軸ヲ出シテ風致優美ヲ極メタリ。

陶磁器ハ此ヨリ先キ、既ニ薩摩、有田、唐津、京、九谷等種々ノ燒物發明セラレシガ此ノ時代ニ益々發達セリ。

織物ハ、既ニ縹子、紋紗、金襴、縮緬等ノ絹布、薩摩木綿、小倉織等ノ綿布アリシガ、元文ノ頃更ニ薩摩カスリ飛白ヲ織出シタリ。

(二八)左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ

甲 保科正之、乙 松平信綱、丙 池田光政、丁 契沖阿闍梨、

(甲)會津中將保科正之ハ、將軍秀忠ノ第四子ナリ、賢明ニシテ學ヲ好ミ、嘗テ家訓十五條ヲ定メ、又輔養編、心録等ノ書ヲ撰ス、將軍家光薨ズルニ際シ、正之遺託ヲ受ケテ四代將軍家綱ヲ輔佐シ、松平信綱、阿部忠秋等ノ名臣ト共ニカヲ協セテ治ヲ圖リシカバ、政績頗ル觀ルベキ者多カリキ、正之晩年、山崎闇齋ヲ聘シテ性理學ヲ受ケ且士民ヲシテ之ヲ學バシメタリ。

(乙)松平信綱(伊豆守)が幼時、家光ノ侍盃トナリ爲メニ雀兒ヲ捕ラントテ、誤ツテ内庭ニ失墜シ、拷掠ニ逢フモ牢乎トシテ其辭ヲ易ヘザリシ美談ハ人ノ知ル所ナリ、後來家光ヲ輔佐シテ要路ニ當リ、裁斷流ル、ガ如ク、庶績頗ル舉ガリキ、家光薨ジ、家綱職ヲ襲グノ初ニ當リ、明曆ノ大火アリテ江戸市中大半灰燼ニ歸シ、加フルニ由井正雪ノ逆ヲ謀ルアリテ、都下人心恟々タルニ際シ、信綱措置機敏ニシテ宜シキニ合ヒ、日ナラズシテ闕都ヲ舊觀ニ復シ、人心ヲ安堵セシメタリ、此ノ際江戸米價極メテ貴ク、市民其ノ生ヲ聊セザリシニ、信綱、倉廩ヲ開キ、價金ヲ倍シテ米ヲ糶レシカバ山東諸州之ヲ傳聞シ、争ヒテ米穀ヲ江戸ニ運輸セシニ由リ、米價遂ニ平準ヲ得テ、民疾ヲ救フコトヲ得タリ、其ノ事ニ臨ミ奇策ヲ出スコト概子此ノ類ナリ、故ニ世ノ人信綱ヲ智慧伊豆下稱シキ。

(丙)池田光政ハ新太郎ト稱ス、寛永三年左近衛權少將ニ任ジ、同五年備前岡山ニ移封セラル、光政學ヲ好ミ、學校ヲ藩内ニ建設シ、名儒熊澤了介ヲ擧ゲテ之ニ任ジ、教化大イニ行ハル、嘗テ封内大イニ饑エシトキ、光政倉廩ヲ發キ賑濟スルモ遍キコト能ハズ、因ツテ之ヲ了介ニ詢リシニ、了介曰ク緩議日ヲ曠シウセバ民將ニ餓死セントス、臣請フ江戸ニ赴キ、之ヲ將軍ニ哀訴セン、光政之ニ從ヒ、遂ニ四萬金ヲ幕府ニ借ルコトヲ得テ、悉ク之ヲ封内ニ散ゼシカバ、民賴ツテ活クルヲ得タリ。

(丁)契沖、名ハ空心、俗姓ハ下河、今里ノ妙法寺ニ住シ、後難波ノ東高津ニト居シ、圓珠庵ト號ス、契沖幼ニシテ頓悟、長ズルニ及ビテ益々學ヲ好ミ、和漢古今ノ典籍涉獵セザル所ナク、殊ニ思ヲ和學ニ覃ウシ、曾テ萬葉代匠記二十卷總釋二卷ヲ作リテ、水戸公光園ニ上リシニ、光園其ノ卓見ヲ稱シテ措カズ、金千兩絹三十匹ヲ賜ヒテ其ノ勞ニ酬ユ、契沖悉ク散ジテ貧困者ヲ賑ヒ、且以テ寺院ノ修繕ニ充テ、一モ之ヲ私用セズ、後光園、契沖ガ著シ、古今餘材

抄ヲ讀ミテ益之ヲ奇トシ、切ニ一見センコトヲ求メシニ、契沖辭シテ應ゼズ、元祿十四年五月ヲ以テ歿セリ、年六十二。

(二九)新井白石ノ顯著ナル事業ヲ問フ 白石博學多才ノ資ヲ以テ、將軍家宣ガ世子タリシ時ヨリ師傅ノ任ヲ擔ヒテ、大イニ信任セラレ、家宣登職ニ及ビ、間部詮房ト共ニ將軍ヲ輔佐シ、大イニ幕府ノ弊政ヲ釐革シケルガ、其ノ事業ノ最モ顯著ナル者ハ、第一、從前皇室ニ於テハ、東宮ノ外總ベテ皇子皇女ヲ佛寺ニ入ル、ノ例ナリシガ、此ニ至リ白石建議シテ、皇子ハ悉ク親王トナシ、皇女ハ降嫁アラシメント請フ、家宣之ヲ嘉納シ、奏請シテ皇弟直仁ヲ親王トス、開院宮是ナリ、是ニ於テ伏見、京極、有栖川ノ三家ト合セテ四親王家ト稱シキ、第二、白石又朝鮮使節ノ待遇ヲ卑クシ、其ノ接見ヲ對馬ニ於テセント請ヒシニ、家宣之ヲ納レ、未ダ實行ニ及バザリシガ、十一代家齊ニ至リテ其ノ議遂ニ行ハレタリ、第三、白石ハ、幣制ヲ改革シテ、前代以來ノ財政困難ヲ救フノ策ヲ立

テ、先ヅ貪汚ナル勘定奉行萩原重秀ヲ黜ケ、粗惡ノ貨幣ヲ改鑄セリ、所謂乾字金はナリ、白石又財政窮乏ノ原因ハ長崎貿易ニヨリテ金銀ノ濫出スルニ在ルヲ察シ、海外貿易船ノ數ヲ減ゼリ。

(三〇)八代將軍吉宗ガ刑獄ニ於ケル治績ヲ問フ 享保ノ初メ、吉宗、目安箱ヲ評定所ノ門外ニ設ケテ言路ヲ開キ、且ツ以テ冤枉ヲ伸ブルノ途ヲ得シメ、又大岡忠相ヲ擧ゲテ町奉行トナシケルガ、忠相明敏ニシテ善ク訟獄ヲ斷ゼリ、吉宗殊ニ意ヲ刑律ニ留メ、公事方定書百箇條ヲ定ム、此ノ律寬保年間ニ成リタルヲ以テ世ニ寬保律ト云フ、當時幕府ノ刑法ニハ、死、流、追放、敲、黥、晒、鬪所等アリテ、更ニ死ヲ鋸、磔、獄門、焚殺、斬等ニ分チシガ、吉宗ニ至リ、務メテ寬典ニ從ヒ、古ノ贖法ヲ復シテ子弟連坐ヲ停メキ、又斷獄ノ吏ヲ戒メテ、凡ソ罪人犯罪ノ證據已ニ明白ナルニ、猶強辨スル者ノ外ハ、拷問ヲ加ヘザラシメタリ。

(三一)吉宗將軍足高ノ制トハ何ゾ 幕府家士ノ祿制ハ、其ノ職進ム毎ニ、祿ヲ

増シテ之ヲ世襲セシムルノ法ナリシカバ、歳出次第ニ増加シテ到底之ニ應ズベクモアラザルニ至レリ、是ニ於テ吉宗法ヲ按ジ、只在職ノ間ノミ、之ニ相當スル祿高ヲ増シ、退職スルトキハ舊祿高ニ復スルノ制ヲ親メタリ、之ヲ足高ト云フ。

(三二)吉宗ノ幣制、税法及ビ米將軍ノ名ヲ得タル所以ヲ問フ 貨幣ハ、家繼ノ時既ニ改鑄シテ稍純良トナリシガ、吉宗ニ至リテ更ニ之ヲ改鑄シ、品質秤量共ニ慶長ノ舊ニ復セシノミナラズ、却テ之ニ優ル者トナシタリ、世ニ之ヲ文字金銀又ハ享保金ト云フ、此ヨリ先キ田租ノ法ニ定免、見取ノ二法アリシガ、吉宗之ヲ改メテ、盡ク定免法ヲ行ヘリ、貨幣已ニ改良セラレテ、米價從ツテ賤シク、時トシテハ百姓困難ニ陥ルコトアリシヲ以テ、吉宗毎歲數十萬石ノ米ヲ、相當ノ價ニテ買入レシメ、以テ市場ノ下落ヲ支ヘタリ、世因テ吉宗ヲ稱シテ米將軍ト云ヒキ。

(三三)吉宗、學藝技術ヲ獎勵セシ事實ヲ問フ 吉宗、一般教育ノ普及ヲ圖リ、

碩儒室鳩巢ニ命ジテ六論衍義ノ大意ヲ假名文ニ譯セシメ、之ヲ庶民習字ノ手本トセシメタリ、吉宗又天文ニ精シク、大イニ曆學ヲ獎勵シ、又僻地ニ良醫ノ乏シキヲ憂ヘ、醫療ノ書ヲ平易ニ記シテ世ニ行ハシメタリ、此ノ時吉益東洞ナド云フ名醫アリテ一派ノ流義ヲ立テシ程ナルガ、外科ニ於テハ、蘭家漸ク世ニ顯レタリ、家光ノ世ニ洋書舶載ヲ嚴禁セシヨリ、西洋ノ事情ヲ知ルハ、唯通詞ノ口傳ニ依ルノミナリキ、然ルニ吉宗、大イニ泰西ノ學藝ニ悟ル所アリ、享保中、洋書輸入ノ禁ヲ弛ベ、宗教ニ關セザル書籍ハ講讀スルヲ許シ、尙青木文藏(書物奉行)ヲシテ蘭書ヲ講究セシメタリ。

(三四)徳川氏ノ御三卿トハ何ゾ 吉宗、徳川氏ノ繼嗣益廣カランヲ欲シ、其ノ子宗武ヲ田安邸ニ、宗尹ヲ一橋邸ニ置キ、各廩米ヲ給セシガ、家重亦其ノ第二子重好ヲ清水ノ邸ニ置キ、共ニ格三家ニ亞ギテ永ク將軍ノ家族ニ列セシム、之ヲ御三卿ト云フ。

(三五)十代將軍家治ノ時ノ弊政ヲ問フ 家治ノ世ニハ田沼意次老中トナリテ威福ヲ擅ニシ、賄賂公ニ行ハレ、奢侈風ヲ成シ、隨ツテ賦歛重キヲ加ヘ、上下甚ダ困シミキ、田沼氏ノ定紋ハ九曜ノ星ナルガ、當時和蘭人ハ日本人此ノ紋ヲ好ムト爲シ、九曜紋散ラシノ細工品ヲ特ニ多ク舶載セリト云フ一事ニテモ、田沼氏ニ賂遺スル者ノ多キヲ徴スルニ足レリ、サレバ財貨ヲ出シテ官職ヲ得ルノ惡風モ起リ、士大夫皆縁ヲ求メテ權門ニ奔走シ、又ハ勢家ノ執事ヲ響應スル等佞媚俗ヲ成シ、江戸武士ノ風頓ニ衰ヘヌ。

(三六)明和天明ノ災異ヲ問フ 明和九年ヨリ安永、天明ノ間ニ涉リテ諸國災異荐リニ臻リ、江戸ノ大火、關東及ビ上、信ノ地震ヲ初メトシ、關東ノ海嘯、大島、櫻島、淺間、草津ノ噴火、利根川ノ暴漲等ニテ諸國ノ人民死亡シ、村落田圃ノ滅亡スル者連年其ノ數ヲ知ラズ、遂ニ天明ノ大飢饉トナリ餓殍道ニ滿チキ、世人因テ明和九年ヲめいわくノ年ト讀ミ、天明ヲ天命ト書クニ至レリ。

(三七)寛政ノ政績ヲ問フ 十一代將軍家齊、白河侯松平定信(越中守)ヲ舉ゲテ老中トシ幕政ヲ輔ケシム、時ニ前代弊政ノ後ヲ承ケ、加フルニ凶荒相踵ギテ施政頗ル困難ナリシガ、定信、博學ニシテ才略ニ富ミ、首トシテ節儉ヲ行ヒ、武備ヲ嚴ニシ、奸邪ヲ斥ケ、賢良ヲ舉ゲ、銳意治ヲ圖リシカバ、幕政復振ヘリ、此ノ時旗下ノ士負債ニ困シム者多カリシカバ、定信之ヲ濟ハンガ爲メ、債主ヲシテ六年前ノ貸金ヲ棄捐セシメ、以テ償還ノ途ヲ立テ、更ニ町會所ヲ設ケ、江戸市中ノ費ヲ節シテ剩金ヲ儲ヘシメ、又米價賤シキ時ニ、多額ノ糶ヲ蓄ヘシメテ以テ凶歉ニ備ヘ、公事方定書ヲ修正シテ所謂寛政律ヲ定ムル等施設スル所甚ダ多ク、殊ニ心ヲ風俗ノ矯正ニ用ヒ、專ラ儉素ヲ獎メシカバ、幕府ノ財政再ビ裕カニナレリ、サレバ世ニ之ヲ寛政ノ治ト稱シテ、家齊一世六十年ノ間ハ、徳川氏ノ隆昌正ニ其ノ極ニ達セリ。

(三八)松平定信ガ執政中ノ尊號事件トハ何ゾ 第一百十八代光格天皇ハ、御生

父典仁親王ニ太上天皇ノ尊號ヲ奉ラントテ、議奏中山愛親等ヲ下シテ其ノ旨ヲ幕府ニ傳ヘシメ給ヒシニ、定信固ク執ツテ不可トナシ、事遂ニ寢ミヌ、世多クハ之ヲ以テ定信ヲ尤メタレド、當時家齊ノ生父一橋治濟ヲ尊ビテ大御所トナシ、陰ニ政務ニ干與セシメント謀ル者アリ、定信死ヲ以テ之ヲ爭ヒシ折柄ナレバ、其ノ苦心亦察スベキ者ナキニ非ズト云フ。

(三九)寛政異學ノ禁及ビ當時著名ノ藩學校ヲ問フ 松平定信在職ノ間、大イニ學政ニ留意シ、昌平黌ノ制ヲ改メテ専ラ旗下家人ヲシテ就學セシメ、日講所ヲ開キテ庶民ノ參聽ヲ許シ、而シテ其ノ學說ハ程朱ヲ主トシ、異學ヲ禁ジタリ、當時諸藩ニモ亦多ク學校アリシガ、就中著名ナルハ、熊本ノ時習館、萩ノ明倫館、鹿兒島ノ造士館、米澤ノ興讓館、水戸ノ弘道館、岡山ノ學館、名古屋ノ明倫堂、佐賀ノ弘文館等ナリトス。

(四〇)洋學ノ起源ヲ問フ 初メ新井白石、采覽異言、西洋紀聞ヲ著シケルガ、是邦人ニシテ泰西ノ事ヲ著述セシ始メナリ、享保中、將軍吉宗洋書ノ禁ヲ解キ、長崎ノ譯官西喜三郎、吉雄幸右衛門、洋書ヲ讀ムコト能ハザルヲ慨キ、幕府ノ許ヲ得テ横文ヲ習フ、是ヲ蘭書ヲ讀ムノ始メトス、尋イデ青木文藏等ヲ長崎ニ遣ハシテ横文ヲ習ハシメ、明和中、前野良澤、杉田玄白、桂川甫周等殊ニ思チ和蘭醫學ニ覃ウシ、蘭書翻譯ニ從事セリ、爾來蘭學漸ク世ニ行ハレテ、今日洋學隆盛ノ基ヲ成セリ。

(四一)家齊時代外交困難ノ狀況ヲ問フ 此ヨリ先キ、千島、樺太ハ既ニ我ニ從屬シ、我が有志ノ士屢其ノ地ヲ探究セシカド、開拓尙行ハレザリシヲ以テ、露西亞ハ之ニ乘ジテ樺太ノ北端ヨリ開拓ニ着手シ、更ニ千島ノほとろふ島ニ來リテ恣ニ標柱ヲ建テタリ、幕府乃チ近藤守重ヲ遣ハシテ之ヲ拔キ、「大日本ほとろふ」ト記セシ標柱ニ代ヘシメタリ、斯クテ寛政文化ノ間、露西亞ノ船屢我が漂民ヲ送り來リテ交易ヲ請ヒシカバ、幕府之ニ食糧薪水等ヲ給シテ答謝トシ、

且交易ハ國禁ナルヲ以テ固ク謝絶セリ、然レドモ露亞西人強ヒデ之ヲ請ヒ、遂ニ我が蝦夷地ニ寇シ、尋イデ英吉利ノ船、長崎ノ民家ヲ剽掠シ、其ノ勢ニ乘ジテ亦交易ヲ請ヒキ、是ニ於テ幕府ハ令シテ益々海防ヲ嚴ニシ、外國船ト見ナバ、直チニ擊拂フベシト命ジタリ。

(四二) 徳川幕府ノ末路ヲ來シタル原因ノ重ナル者ヲ問フ 外交困難モ一大原因ナレド、當時奢侈再發シテ國用足ラズ、劣質ノ金銀貨即チ文政二分金小判、一朱金、天保二朱金、一分銀、當百錢等ヲ發行シタルモ亦其ノ原因ノ一ナリ、而シテ更ニ大ナル原因ハ、此ヨリ先キ、水戸光圀ガ尊王主義ヲ首唱セシヨリ、天下ノ識者漸ク之ニ靡從シ、降ツテ家齊ノ世ニ、林子平、蒲生君平、高山彦九郎ノ三奇士出デテ、或ハ海防ノ忽ニスベカラザルヲ論ジ、或ハ王室ノ陵替ヲ慨キ頻リニ尊王ノ氣風ヲ鼓舞セシノミナラズ、和學者ニハ本居宣長、平田篤胤アリテ古學ヲ闡發シ、論說ニ學術ニ尊王愛國ヲ基本トシ、漢學者ニハ賴山陽アリテ、

其ノ著日本外史、日本政記等ニ於テ、王室ノ衰替武家ノ專横ヲ憤慨セシヨリ、天下ノ志士益々心ヲ尊王ニ傾ケタルニ在リ。

(四三) 此ノ時代ニ於ケル大名出行ノ狀ヲ問フ 當時大名ノ往來スル狀ハ、家々ニヨリテ種々ノ定式アリタレド、先ヅ三家ニ付キテ之ヲ述ベンニ金紋前箱トテ、金紋ヲ蒔繪シタル一對ノ挾箱ヲ前ニ立タセ、次ニ絨若シクハ革羽毛等ニテ鞘ヲ飾レル一對ノ鎗ヲ並べ持タセ、弓矢鐵砲ヲ携ヘタル數多ノ士ノ後ニハ、覆キセタル薙刀ヲ持テル者列ニ立チ、主君ノ乗レル駕ノ後ニハ、虎ノ毛皮ノ鞍覆セシ良馬ヲ牽カセ、又銀作りノ茶辨當ト稱スルモノナド擔ハセ、從者等ハ隆冬ト雖モ袴ノ裾高ク塞ゲテ一町モ二町モ行列整ヘテ徐行シタリ。

(四四) 當時武士ノ風俗ヲ問フ 武士ハ一般ニ羽織袴ヲ着ケ、大小ノ刀ヲ腰ニサシ且身分重キ者ハ常ニ從者ヲシテ槍ヲ擔ハシメ、公ノ勤ニハ、肩衣ヲ着ケ、儀式ノ時ニハ鬘斗目ノ小袖ニ麻ノ上下ヲ着ケタリ。

(四五)當時ニ於ケル男女ノ髮容ヲ問フ 公家ト僧ト醫トノ外ハ、男ハ總ベテ月代ツキヨノ前ヲ剃リ、髮ヲ頂ニ集メテ鬘ニ結ビ、後ニハ一般ニ鬘ヲモ剃去ルコト、ナリヌ、女ノ髮ハ豐臣氏ノ頃ヨリ、已ニ筋鬘、唐輪ナドニ結ベルモノアリシガ、徳川氏ノ世ニ至リテハ、大抵髮ヲ結ブノ風トナリ、油ヲ用ヒ櫛笄等ヲ挿シテ髮ノ飾トナシ、ガ、他出ノ時ハ、塗笠又ハ綿帽子ナドヲ被リ、貴婦人ハ蒙衣カウキヲ被リテ面ヲ露サマル風アリキ、然ルニ日傘ト云フモノ行ハレシヨリ、鬘ノ形隨ツテ改マリ櫛笄ノ外、更ニ簪ヲ挿スノ風始マリテ、復昔日ノ如ク面ヲ曝スヲ羞ヂザルニ至リヌ。

(四六)文化文政度ニ於ケル歌文、小説、繪畫ノ發達概要ヲ問フ 此ノ時代ニハ人々泰平ニ忤レテ士氣大ニ衰ヘタレド、文藝美術等ハ著シク發達セリ、和歌ニハ香川景樹アリテ別ニ一派ヲ立テ、村田春海、加藤千蔭ハ特ニ歌文ヲ以テ著ル、小説家ニハ、山東庵京傳、曲亭馬琴、式亭三馬、柳亭種彦等アリ、就中馬

琴ハ學識富贍、文章絢爛ナルヲ以テ著レ、里見八犬傳、椿説弓張月等ノ巨篇傑作アリ、種彦亦流麗巧緻ノ文ヲ以テ名ヲ擅ニス、繪畫ニハ池野大雅、支那人ニ學ビテ南宗畫ノ一派ヲ起シ、圓山應舉、寫生ニ巧ニシテ圓山派ヲ起シ、谷文晁一機軸ヲ出シテ別ニ文晁風ヲ起セリ、浮世繪ニハ鈴木春信、喜多川歌麿、歌川豊國、葛飾北齋等最モ有名ニシテ、當時ノ風俗ヲ畫キ、精巧ナル錦繪板行セラレタリ。

(四七)水越天保ノ改革トハ何ゾ 將軍家齊職ヲ辭シテ世子家慶嗣グ、水野越前守忠邦老中トナル、忠邦天資英明ニシテ經濟ノ才ニ富ミ、松平定信ニ就キテ治道ヲ諮ヒ、享保寛政ノ治ニ復セント欲ス、乃チ奢侈ヲ戒メ、武備ヲ修メ、又風俗ノ壞亂ヲ匡正セントテ施設スル所寡カラザリシガ、其ノ弊苛刻ニ失シ、人民天鷲絨ノ鼻緒ノ爲メニ入牢スルニ至リ、内外ノ怨ヲ招キ、忠邦遂ニ罷メラレヌ、之ヲ水越天保ノ改革ト云フ。

(四八)左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ

(甲)上杉治憲 (乙)佐藤信淵 (丙)關孝和

(甲)上杉治憲ハ、米澤ノ藩主ナリ、治憲學ヲ好ミ政ヲ修メ、製茶養蠶ノ業ヲ獎メ、特ニ藉田法式ヲ學ゲ、身ヲ以テ衆ヲ率キ、農業ヲ督勵シ、優ニ凶荒ノ備ヲ立テシカバ、天明ノ大饑饉ニ與羽最モ甚シカリシモ、米澤領ノミハ其ノ災ヲ免レタリ、水府光圀、備侯光政以來ノ賢君ト謂フベシ。

(乙)佐藤信淵ハ出羽ノ人ニシテ、父祖四世ノ經驗ヲ大成シテ農業經濟等ノ書凡ソ三百部ヲ著シ、嘉永元年(紀元二五〇年)ニ歿セリ、信淵諸侯ノ招聘ニ應ジ、國々ヲ巡歴シテ、水利ヲ修メ、牧馬ノ法ヲ教ヘ、社倉ヲ設ケ、墾田ヲ開キ、耕種ノ法ヲ改メナドシテ、農事ヲ改善セシコト屈指ニ追アラズ。

(丙)關孝和ハ數學ノ大家ナリ、吉田光由ツ門派ヨリ出デ、前人未發ノ圓理ヲ説キ、關流ノ算術ヲ開ケリ、圓理トハ即チ今ノ微分積分ニ近キモノニシテ極メテ高尚ナル數理ナリ。

(四九)米艦渡來ノ始未ヲ問フ 孝明天皇ノ嘉永六年六月(紀元二五三年)米國ノ使節

水師提督ペルリ軍艦四艘ヲ率キテ相州浦賀ニ來リ、國書方物ヲ呈シテ通好互市ヲ乞フ、幕府即答スル能ハズトテ明年ヲ期ス、尋イデ露艦四艘亦長崎ニ來リ、隣好ヲ修メ、樺太ノ境界ヲ定メ、且ツ貿易センコトヲ乞フ、幕府亦他日ヲ約シテ歸ラシム、翌安政元年(紀元二五四年)米國ノ使節ペルリ再ビ來リテ回答ヲ求メシカバ、幕府遂ニ拒絕スル能ハズ、下田、長崎、函館ノ三港ニテ薪水食料ヲ給スルコトヲ許ス、尋イデ露、英、佛ノ三使至リシニ、亦之ヲ許シキ、初メ外國トノ交通ハ專ラ長崎ニ限リシヲ以テ、江戸附近ニハ防備ノ設ナカリシガ、是ニ至リ遽ニ品川海ニ三砲臺ヲ築キ其ノ他近海ヲ警備シ、下田、函館ニ奉行ヲ置キ、講武所、海軍操練所ヲ設クル等幕府ノ周章狼狽大方ナラザリキ。

(五〇)幕府諸外國ト假條約ヲ締結スルニ至リシ顛末ヲ問フ 安政三年(紀元二五六年)

米國ノ使節はるりす國書ヲ齎シテ下田ニ來リ、強請シテ將軍ニ謁シ、通好貿易ヲ請フ、時ニ老中堀田正篤、外交ノ局ニ當リ、頗ル外事ニ通ゼシカバ、はるりすノ請ヲ容レテ、更ニ神奈川、大阪ノ二港ヲ開カントス、然レドモ世論ヲ憚リテ勅裁ヲ請フ、孝明天皇、深ク利害ヲ慮リテ輒ク之ヲ許シ給ハズ、輿論亦鎖港ヲ主トセリ、然ルニ幕府ニハ、内部ニ將軍家繼嗣ノ論アリテ親藩ト和セズ、外ニハ外國ノ開港ヲ迫ルアリテ正篤等大イニ困シム、是ニ於テ將軍ハ内意ヲ傳ヘテ果斷ノ聞エアル彦根侯井伊直弼ヲ大老トセリ、直弼乃チ開港ノ止ムベカラザルヲ察シ、勅許ヲ待タズシテ、安政五年(紀元二五
一八年)六月、遂ニはるりすト假條約ヲ結ビ函館、橫濱、兵庫、長崎新潟ノ五港ヲ開キ、貿易ヲ許ス、尋イデ露、英、佛、蘭ノ四國モ皆米國ノ例ニ倣ヒテ條約ヲ締結セリ、因リテ幕府ハ安政六年ヲ以テ五國ノ條約書ヲ天下ニ公布シ、翌年使節ヲ米國ニ遣ハシタリ。

(五一)安政ノ奇獄トハ何ゾ 井伊直弼ガ外國條約ニ關スル專斷ノ舉動ヨリシ

テ世論大イニ沸騰シ、徳川慶勝(尾張藩主)同齊昭(水戸藩主)松平慶永(福井藩主)等ノ親藩モ亦皆直弼ノ處置ヲ咎メシガ、直弼ハ總ベテ之ヲ禁錮シ、朝臣近衛忠熙、鷹司輔熙、三條實美等ヲ黜ケ、志士橋本左内、頼三樹三郎、吉田寅次郎等ヲ首トシテ、公卿ノ家士浪人學者ヨリ婦人僧侶ニ至ルマデ五十餘人ヲ捕ヘテ、或ハ斬流或ハ禁錮セリ、世ニ之ヲ安政ノ奇獄ト云フ。

(五二)櫻田ノ變トハ何ゾ 井伊直弼ガ天下ノ志士ヲ虐待セシ行爲ハ、上下ノ人心ヲシテ益々激昂セシメシガ、萬延元年(紀元二五
二〇年)水戸藩ノ浪士佐野竹之助等十七人、直弼ヲ櫻田門外ニ要シテ之ヲ刺殺セリ、世ニ之ヲ櫻田ノ變ト云フ。

(五三)公武合體論及ビ其ノ實行ノ狀ヲ問フ 激論ノ士益々幕府ノ處置ヲ悦バズ、頻リニ勤王攘夷ヲ主張シテ公卿ノ門ニ游說シ、諸藩亦開港鎖國ノ二派ニ分レテ互ニ相凌轢シ、幕勢日ニ下リ皇威月ニ張ルノ際ニ當リ、薩長等ノ諸藩幕府ニ勸告スルニ、朝廷ト武家ト協和シテ人心ヲ收攬スベキヲ以テス、是即チ公武合

體論ナリ、幕府之ヲ然リトシ、文久元年、皇妹和宮^{カズノ}ヲ將軍ノ御臺所ニ申シ降シ、嚮キニ直弼ノ爲ニ罰セラレタル人々ヲ赦シ、後又勅旨ヲ奉ジテ、徳川齊昭ノ第八子ナル一橋慶喜ヲ後見職トシ、越前侯松平春嶽^{即チ慶永}ヲ政事總裁職トシ、大イニ新政ヲ施シタリ。

(五四) 將軍家茂入朝及ビ攘夷ノ勅命ト其ノ結果トヲ問フ 文久三年(紀元三五) 將軍家茂入朝ス、孝明天皇、攘夷ノ勅ヲ下サントテ、石清水八幡ニ幸シ、祠前ニテ節刀ヲ授ケ給ハントス、家茂病ト稱シテ受ケズ、志士等之ニ激昂シ、遂ニ迫リテ天皇ノ親征ヲ乞フ、家茂己ムヲ得ズシテ勅ヲ奉ジ、攘夷ヲ約シ、普ク諸侯ニ告ゲ、又外國公使ニ告グ、公使等聽カズ、此ヨリ先キ、島津久光ノ家士英人ヲ武州生麥ニ斬リシカバ、英公使ハ日ヲ刻シテ幕府ニ償金ヲ迫リ、幕府、内外ノ處置ニ困シムニ當リ、此ノ歳五月長州藩先ヅ攘夷ノ令ヲ奉ジテ米艦ヲ赤間ヶ關ニ砲撃ス、英艦ハ薩摩ニ至リテ生麥ノ事ヲ詰リシニ、藩兵亦之ヲ砲撃セリ、サレド此ノ役ニ於テ薩長兩藩頗ル外國ノ侮リ難キヲ悟リ、幾モナク和ヲ講ゼシト云フ。

(五五) 天皇大和行幸及ビ七卿奔竄ノ事實ヲ問フ 孝明天皇、大和ニ行幸シテ神武ノ陵ニ謁シ、親征攘夷ノ議ヲ決セントシ給フ、時ニ會津侯松平容保京都守護職タリシガ、中川宮尊融法親王及ビ薩藩ト結ビテ謀ル所アリ、朝議俄カニ一變シテ行幸ヲ停メ、長藩ノ禁裡護衛ヲ解キ、三條實美等ヲ屏居セシム、長人乃チ實美以下ノ七卿ヲ奉ジテ長門ニ走ル、朝廷其ノ官爵ヲ削リ、長藩士ノ入京ヲ禁ズ、尋イデ家茂亦入朝セシカバ、公武是ニ於テ漸ク一致シ、攘夷ノ事稍弛ビタリ。

(五六) 五條、生野及ビ筑波ノ亂等ノ事略ヲ問フ 浪士等、朝幕ノ合體漸ク成レルヲ見テ自ラ安ンゼズ、藤本鐵石、松本奎堂等浪士ヲ率キ、大和ノ五條ナル幕府ノ代官所ヲ攻取リテ十津川ニ據ル、尋イデ平野次郎、南八郎等兵ヲ但馬ノ

生野ニ舉ゲシガ、何レモ幕府ノ爲メニ破ラレタリ、又水戸ニハ、藤田東湖ノ子小四郎等、藩内ノ守舊黨ノ爲メニ激セラレ、所謂水戸浪人五百餘人尊王攘夷ヲ唱ヘテ常陸ノ筑波山ニ據リ兵ヲ舉ゲ、故齊昭ノ寵臣ナル武田耕雲齋等之ニ合セシガ、是亦討平ゲラレタリ。

(五七)長州征伐ノ顛末ヲ問フ 初メ長藩ノ重臣福原元憫、伏見ニ至リ、藩主ノ冤ヲ訴ヘ七卿ノ復職ヲ請フ、時ニ長藩ノ士脫藩シテ至ル者多カリシガ、藩ノ老臣國司朝相、益田親施等、之ガ鎮撫ト稱シ、兵ヲ率キテ京師ニ入ル、會津薩摩ノ二藩ノ兵防戦シテ之ヲ破リ却ケ、元憫等國ニ遁レ歸リヌ、是ニ於テ朝廷、長藩主毛利慶親ノ官爵ヲ削リ、有栖川熾仁親王以下七十餘人ヲ幽シ、徳川慶勝ヲ總督トシ、關西諸藩ニ令シテ長藩ヲ征討セシム、然ルニ藩主恭順ヲ主トシ、元憫等ヲ斬リテ罪ヲ謝セシカバ、慶勝師ヲ班シ、實美等ヲ太宰府ニ幽ス、時ニ元治元年(紀元二五二四年)ナリキ、此ノ時長藩ニ二黨アリ、一ハ幕府ニ對シテ開戦ヲ主

張シ、一ハ專テ恭順ヲ主トシテ俗論黨ト稱セラル、藩主ガ恭順謝罪セシハ實ニ俗論黨ノ議ニ出ヅ、是ニ於テ開戦黨ノ主領、高杉晉作大イニ憤リテ兵ヲ起シ、俗論黨ノ首領ヲ斬リ、慶親父子ヲ奉ジテ山口ニ據ル、幕府乃チ長州再征ノ令ヲ布キ、將軍家茂大坂ニ至リシガ、幕軍長藩ト戦ツテ利アラズ、會家茂薨ジテ一橋慶喜軍職ヲ襲ギシガ、尋イデ孝明天皇亦崩ジ給ヒキ、因リテ大喪ニ托シテ征長ノ師ヲ停メシメ、熾仁親王、三條實美等ノ幽禁ヲ解ク、幕府ノ勢威是ヨリ地ニ墜チタリ。

(五八)幕府大政奉還ノ始末ヲ問フ 慶應三年(紀元二五二七年)今上天皇、御歳十六ニテ踐祚シ給フ、是ヨリ先キ先帝既ニ安政五年ノ假條約ヲ勅許シ給ヒ、此ニ至ツテ又兵庫開港ノ勅許アリ、海外ノ形勢漸ク分明トナリシノミナラズ、長州征伐ノ失敗等ヨリ幕府ノ威信頓ニ地ニ墜チ、到底斯カル内外多事ノ日ニ處スルコト能ハザリシカバ、土佐侯山内豐信、其ノ臣後藤象次郎ヲシテ、慶喜ニ説キ、大

政ヲ王室ニ奉還センコトヲ議セシム、安藝侯淺野茂長モ亦之ヲ勸メシカバ、慶喜大イニ悟ル所アリ、此ノ歳十月十四日ヲ以テ政權ヲ王室ニ奉還センコトヲ請フ、天皇勅シテ之ヲ許シ給フ、徳川氏政權ヲ握リシコト十五代二百六十五年、此ニ至リ海内復王化ニ霑ヒテ日月ノ赫々タルヲ仰グニ至リヌ。

(五九) 左ノ人々ノ顯著ナル事蹟ヲ問フ

- (甲) 佐久間象山
- (乙) 吉田松陰
- (丙) 山縣大貳

(甲) 佐久間象山ハ信州松代ノ藩士ニシテ、開港ノ卓見ヲ懷キタル文武兼備ノ人ナリ、象山、吉田寅次郎ガ外國船ニ托シテ洋行セントスル企ヲ幫助セシ罪ニ坐シテ獄ニ下サル、元治元年將軍家茂上洛スルニ當リ、象山徴サレテ京師ニ在リシガ、水戸藩ノ士京ニ入り攘夷ノ詔ヲ請フト聞キ、其ノ利害ヲ陳セント欲シ、書ヲ懷ニシテ山階宮ニ詣ル途上ニテ激徒ノ爲メニ刺殺セラレタリ。

(乙) 吉田松陰ハ通稱ヲ寅次部ト稱ス、象山ノ門人ナリ、松陰夙ニ海外ノ形勢

ヲ察シ、開港ノ已ムベカラザルヲ先見シ、渡海術等ヲ研究セン爲メ、米使ベ
 るりノ船ニ托シテ渡外セントセシガ、事覺レテ獄ニ下サル、後井伊直弼、在
 野ノ志士論客ヲ處罰スルニ當リ、松陰モ亦頼三樹三郎等ト共ニ刑死シタリ、
 高杉晋作等長藩ノ名士ハ大抵松陰ノ門ニ出ヅ。

(丙) 山縣大貳ハ甲府ノ興力ナリ、江戸ニ寓シテ兵法ヲ講ズ、常ニ皇室ノ陵夷
 ナ概キ、其ノ言往々人聽ヲ驚カス、幕府之ヲ忌ミ、獄ニ下シテ遂ニ之ヲ斬罪
 ニ處セリ。

第八篇 今代王政復古ヨリ條約改正事件ニ至ル

(一) 維新第一着ノ新政ハ如何 徳川慶喜既ニ大政ヲ奉還シ、尋イデ軍職ヲ辭スルニ當リ、朝廷乃チ諸侯ヲ京ニ會シテ新政ヲ議定セシム、慶應三年(紀元二五)
(二七年)
 十二月九日先ヅ三條實美等及ビ毛利慶親父子ノ罪ヲ赦シテ其ノ官爵ヲ復シ、且

入京セシメ、薩、長、土、藝、尾、越ノ諸藩ニ禁闕ノ護衛ヲ命ジ、會津桑名二藩ノ守兵ヲ徹セシム、此ノ月又大詔ヲ發シ、攝政、關白、征夷大將軍、議奏、傳奏、等ノ官職ヲ廢シテ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置キ、有栖川宮熾仁親王ヲ總裁トシ、仁和寺宮嘉彰親王、山階宮晃親王、三條實美、徳川慶勝、島津茂久、松平慶永、山内豐信ヲ議奏トシ、西郷隆盛、木戸孝允等ヲ參與トシ、王政復古萬機親裁ノ詔ヲ下シ給ヒヌ。

(二)鳥羽伏見ノ戰ノ顛末ヲ問フ 朝廷、徳川慶喜ノ辭職ヲ許シ、且内諭シテ其ノ内大臣ヲ辭セシメ、又封土ヲ納レシメントセシカバ、會津、桑名ノ二藩等大イニ激昂シ、慶喜モ亦疑惑スル所アリ、相率キテ大阪城ニ退ク、明治元年(紀元二八)正月、會桑ノ二藩、君側ヲ清ムルヲ名トシ、慶喜ヲ擁シテ入京セントス、薩長ノ兵出デテ之ヲ鳥羽、伏見ニ拒ギ、交戰四日、勝敗未ダ決セザリシガ、佐幕黨ナル津藩俄カニ官軍ニ應ジテ、幕軍ヲ横撃セシカバ、幕軍大イニ敗レテ大

阪ニ走り、慶喜以下海路ヨリ江戸ニ逃レタリ。

(三)官軍東下ヨリ上野ノ戰爭ニ至ル迄ノ事略ヲ問フ 慶喜ノ江戸ニ走ルヤ、朝廷其ノ官爵ヲ削リテ征討ヲ布告セラレ、熾仁親王ヲ大總督トシ、西郷隆盛等ヲ參謀トシ、諸藩ノ兵ヲ率キテ、東海、東山、北陸ノ三道ヨリ江戸ヲ征セシム、慶喜大イニ畏レテ江戸城ヲ出デ、上野ノ寛永寺ニ屏居シテ、一意恭順ヲ表シ、其ノ臣勝安房等ヲシテ、西郷隆盛ニ依リ其ノ罪ヲ謝セシム、朝廷乃チ城地、軍艦、兵器ヲ收メ、慶喜ノ罪ヲ宥シテ、水戸ニ退カシム、幕府ノ舊臣等慶喜ノ恭順ヲ喜バズ、脱走シテ兵ヲ關東ノ各地ニ擧ゲ、恢復ヲ計ラントスル者少カラザリシガ、江戸ニテハ旗下ノ士及ビ不逞ノ徒相集リテ彰義隊ト號シ、輪王寺宮ヲ擁シテ上野ニ據レリ、官軍ノ參謀大村益次郎討ツテ之ヲ平グ、時ニ明治元年五月ナリキ。

(四)東北地方及ビ函館ノ戰爭事略ヲ問フ 松平容保、其ノ藩城若松ニ據リ、仙

臺米澤ノ二藩亦之ニ應ジ、其ノ他幕臣大鳥圭介等諸脱走ノ士皆若松ニ投ジテ兵勢頗ル熾ナリキ、官軍之ヲ討セントシテ、一軍ハ越後口、一軍ハ奥州白河口ヨリ兩道並ビ進ンデ之ニ向ヒ、連リニ白河城及ビ長岡城(越)ヲ陷レ、又棚倉、磐城平ノ諸城ヲ下シ、遂ニ相合シテ若松城ヲ圍ム、城兵善ク防戦シケルガ、糧盡キテ遂ニ降リヌ、斯クテ仙臺、莊内、南部等ノ諸藩モ相踵ギテ降リシカバ、奥羽ハ悉ク平定セリ、然ルニ此ヨリ先キ、榎本武揚ハ幕府ノ軍艦八艘ヲ率キテ函館ニ走リ、大鳥圭介亦殘兵ヲ率キテ之ニ合シ、相共ニ五稜郭ニ據リ、勢頗ル猖獗ナリ、官軍之ヲ攻メテ頗ル苦戦セシガ、偶々武揚等風濤ノ爲メニ戰艦ヲ失ヒ、官軍亦切リニ歸順ヲ諭シケレバ、武揚、圭介等遂ニ出デ降リヌ、是ヲ函館ノ戦爭ト云フ、是ニ於テ海内全ク平定セリ。

(五)當時諸藩ノ兵式軍服等ヲ問フ　薩長及ビ舊幕府ニテハ、早ク己ニ洋式ノ操練ヲ實施シケルガ、其ノ軍服ハ大抵洋服ノ寛キモノニテ、俗ニ之ヲつつつば、だんぶくろト稱シ、猶其ノ上ニ陣羽織ヲ着スル者モアリキ、然ルニ諸藩ハ概シテ舊式ノ兵制ニテ、甲冑ハ鐵砲ヲ捍グコト能ハザルノミナラズ、却テ兵士ノ進退ヲ妨グルノミナリキ、サレバ長州征伐以後、此ノ頃ニ至ルノ間、諸藩皆其ノ不便ヲ實驗シテ、漸ク甲冑ヲ廢シ、或ハつつつば、だんぶくろヲ着スルアリ、或ハ筒袖羽織ト義經袴(野袴ノ裾ヲ斷チタルモノ)トナ着スルアリ、又鐵砲ハ新式舊式兩ツナガラ之ヲ用ヒ、中ニハ天文時代ノ火繩筒ヲ用フルモノアリ。加之、東北平定ニ際シ、尙弓矢ヲ袋ニシテ凱旋スル者アルヲ見タリ。

(六)五條ノ御誓文ヲ問フ　明治元年(紀元二五二八年)三月、今上天皇ハ公卿及ビ諸侯ヲ率キテ紫宸殿ニ出御シ、天神地祇ヲ祀リテ、五事ヲ誓約シ給ヘリ、一ニ曰ク、廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スベシ、二ニ曰ク、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ、三ニ曰ク、官武一途、庶民ニ至ルマデ各々其ノ志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメムコトヲ要ス、四ニ曰ク、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基

クベシ、五ニ曰ク、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシト、之ヲ五條ノ御誓文ト云フ、立憲ノ政體實ニ基ヲ此ニ開ケリ。

(七)維新ノ初ニ於ケル待外ノ方針ヲ問フ 幕府既ニ倒レテ時勢一變セシヲ以テ朝廷ニテハ專ラ開國ノ新主義ヲ執リ、先ヅ外國事務官ヲ置キ、議定嘉彰親王ヲシテ總裁ヲ兼ネシメ、三條實美、後藤象次郎ヲ其ノ取調掛トシテ、新政ノ趣旨ヲ各國公使ニ告ゲシメ、又國內ニ詔シテ、斷然外國ト和親條約シ、宇内ノ公法ヲ以テ外國ヲ待スルガ故ニ、上下一致シテ疑惑ヲ生ズベカラズト告ゲ給ヘリ。

(八)藩籍奉還ヨリ廢藩置縣ニ至ル迄ノ事略ヲ問フ 天下ノ政既ニ朝廷ニ返リタルヲ以テ、諸侯ハ土地ヲ私有スベカラズ、地方ハ政ヲ異ニスベカラズ、是ニ於テ木戸孝允、藩籍奉還ノ議ヲ建テ、大久保利通之ヲ賛成シ、先ヅ之ヲ長藩主ニ勸メケルニ、薩長土及ビ肥前ノ鍋島ノ四藩遂ニ連署シテ版籍奉還ヲ請ヒ、諸藩亦相踵ギテ之ニ倣フニ至レリ、朝廷乃チ其ノ請ヲ許シ、府藩縣三治一致ノ政

體トセラレシガ、藩ニハ尙舊藩主ヲ以テ知事トセラレキ、サレバ封建ノ名ハ廢レタレド其ノ姿尙存セリ、因ツテ明治四年更ニ廢藩置縣ノ制ヲ定メ、知事ノ任ヲ解キテ出京セシメ、尋イデ舊藩主及ビ公家ヲ華族ト稱シ、武士ヲ士族ト稱シ、華士族ニハ公債證書ヲ賜ヒテ永ク世祿ヲ廢セラレ、郡縣ノ政體全ク成リヌ。

(九)地租ノ改正ヲ問フ 明治六年地租ノ改正ヲ行ヒ、新ニ地券ヲ作りテ、地價百分ノ三ヲ地租ト定メラレシガ、後更ニ百分ノ二半ニ減ゼラレ、又地券ヲ廢シ、土地臺帳ヲ以テ之ニ代ヘラレタリ。

(一〇)維新以來事物ノ革新ノ重ナルモノヲ問フ 華士族ノ外一般ノ人民ヲ平民ト稱シ、農工商ノ別ナク、總ベテ同等ノ權利ヲ享ケシメ、華士族平民互ニ婚嫁スルコトヲ許シ、舊來ノ穢多非人ヲ平民籍ニ列シ、人身ノ賣買ヲ禁ジ、貴紳ノ往來ニ喝道スルコトヲ止メ、庶民僧侶ニ氏ヲ稱セシメ、士民ノ佩刀ヲ禁ジ、上下ニ散髮ヲ獎メ、舊來ノ禮服ヲ廢シテ洋式ノ禮服ヲ用ヒシメ、從來ノ輿乘物

ナ止メテ馬車、人力車ヲ用フルコト、ナリヌ、建築ニ於テモ官省等ニテハ石室或ハ煉瓦ヲ用ヒテ洋式ヲ模スルコト、ナリ、又郵便電信ノ法ヲ設ケテ、飛脚ノ舊制ニ換ヘ、陸路ニハ鐵道ヲ布キ汽車ヲ走ラセ、海路ニハ汽船ヲ運用スルコト、ナリテ交通運輸共ニ其ノ便ヲ極ムルニ至リヌ、又洋風ノ貨幣ヲ鑄造シ、國立銀行ヲ開キテ爲換兩替ノ業ヲ改メ、活版ノ術ヲ盛ニシテ人智ノ開發ヲ務メタリ、又曆法ニ於テハ明治五年十二月從來ノ大陰曆ヲ廢シテ大陽曆ヲ用ヒ、宗教ニ關シテハ、固ク神佛ノ混淆ヲ禁ジ、僧侶ノ肉食妻帯ヲ許シ、耶穌教ノ禁ヲ解キ後更ニ信教ノ自由ヲ許サレタリ、

(一)臺灣征討ノ顛末ヲ問フ 當時臺灣島ハ、支那ノ版圖ニ屬シ、島ノ西部ニハ支那人住シ、東部ニハ未開蠻貊ノ蕃人棲ミケルガ、明治五六年ノ頃琉球及ビ備中ノ民、此ノ島ニ漂着シテ土人ノ爲メニ虐殺セラレタリ、因ツテ明治七年、陸軍中將西郷從道ヲ都督トシテ、問罪ノ師ヲ起シ、我が軍進勦シテ蕃人ヲ征服

セリ、是ヨリ先キ清國ハ、臺灣ハ化外ノ民ナリト辯疏シケルガ、此ニ至リ俄カニ異議ヲ唱ヘシカバ、參議大久保利通ヲ全權辦理大臣トシテ清國ニ遣ハシ、總理衙門ニ就キテ談判スル所アラシム、會英國公使仲裁シテ、清國ヲシテ償金五十萬兩ヲ出シ、且臺灣蕃人ヲシテ後來航海ノ累ヲ爲サシメザランコトヲ誓ハシメテ專局ヲ結ビス。

(二)琉球ノ處分事件ヲ問フ 琉球ハ徳川氏ノ時、島津氏ノ附庸トシテ、時々幕府ニ入觀セシガ、維新ノ後ハ之ヲ藩トシテ國王尙泰ヲ藩主トシ、華族ニ列セリ、明治十二年ニ至リ、更ニ琉球藩ヲ廢シテ沖繩縣トシ、尙泰ヲ東京ニ移住セシメ、別ニ縣令ヲ置キ、内地同様ノ政ヲ布クコト、ナレリ、然ルニ琉球ハ明ノ代ヨリ支那ニモ通ジテ、常ニ其ノ封冊ヲ受ケシヲ以テ、清國ハ我が此ノ處分ヲ肯ハザリシガ、我國實證ヲ舉ゲテ之ヲ辯ゼシヨリ清國遂ニ屈服シ、世界各國亦之ヲ公認スルニ至リヌ。